
ブレイク

シトラチネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイク

【Nコード】

N2945V

【作者名】

シトラチネ

【あらすじ】

父即死、母脳死。困り果てる彼の前に現れた、能天気な少女。十年八年の寿命と引き換えに、彼は少女の下僕になる。そこに愛は生まれる……か？ じれったく愛憎笑劇。（以前、別サイトにて掲載していたものをサイト閉鎖により移植）

1 . Break down 降伏 君はお嬢の下僕

..... 1 break bounds . . . 境界外に出る

目が見えている、という時点で彼にはそれが現実でないと分かっていた。何せ三ヶ月前から、きっぱり視力ゼロなのだ。だから何一つない真つ暗闇に光が現れても、ああこりゃ夢だわ と醒めた思いで眺めているだけだった。

彼はやんごとなき事情でやけっぱちになっていた。ふと、その光があの子からの迎えならいいぞと思う。そして来るなら来い、ただし可愛いねーちゃんじゃなけりや当たるまでチェンジしてやる……などとバチ当たりなことを考える。

しかし本人には、バチ当たりなんて感覚はなかった。ろくろく人生を楽しむこともできやしなかった。最期くらいおいしい思いして何が悪い、と胸張って待ち構えている。光もそんな彼の胸中を見透かしたように、望むところだとばかりに真つ直ぐ向かってくる。

「よーしいい子だ、おいで」

彼はしゃべれることに気づいた。非現実世界とはなんと素晴らしなものなのか。彼の声帯は音を作り出すことができないうのに、ここではそんな障害など軽くひとつとびだ。

光は近づくにつれ、数も色も増え始めた。彼はあの世からの迎え説を疑い始める。こんなきらびやかな大集団に迎えを頼めるほど、人徳を積んだ覚えも暇もなかった。

となるとあれは何なんだ 彼はまだ輪郭のはつきりしない光源に、じつと目を凝らしてみる。

「クリスマス・ツリー？」

しかし二等辺三角形ではなく、長方形をしている。

「ネオン？」

しかし野太いエンジン音が聞こえている。

「ヤンキートラック？」

しかしやたらとピンクが多い。

「バ……バス？」

四本指のネズミやアヒルが愛想と尻を振りまく某テーマパークのパレードも、これほどビカビカしちやいない。だがラスベガスになら、こんな電飾もありかもしれない。彼はテーマパークとラスベガスの違いは何かと考えてみて、下品さだと思い当たった。

ようやく謎の光の正体が全貌が見えてきた。ピンクとレモンイエローとハートで埋め尽くされた、観光バス。少女趣味というよりグロテスクという形容が当たっている。

「お迎えもサービス業の時代か？ 俺の人生は、この安っぽい悪趣味なバスに相乗りで締めくくられるのがふさわしいってのか？」

それはあまりに非道というものではなかるうか。何しろ彼の人生、いいことなどひとつもなかったのだ。彼はどんどんと迫り来る巨大にして鮮やかな光の塊を、怒りとともににらみあげていた。

見上げていて、そして 轢かれた。

「あれー？ 確かにこの辺なのにい。誰もいなーい」

素っ頓狂な少女の声がした。

「カイ。素直にザンゲするなら、あたしをイタズラ目的で連れ出したこと許してあげる」

「違います、イタズラなんてしてません！ ほら、ちゃんとここで誰か救援信号を発信してます。さっきよりずっとレベル高いですよ。まだまだ声変わりしそうにない、高くて細い少年の声もする。

「いないもんはいない」

「……アンタに踏まれてる」

ん？ と驚いた風でもなくのんびり答えてようやく、十センチ彼には十メートルにも見えだが はあろうかというピンクのピ

ンヒールがどいた。

「うわっ、ちつき。豆粒みたい。踏まれてとーぜん」

「轆かれてもとーぜん、か？」

「んもう。いないってことにして、カイにお仕置きでウサギの着ぐるみかぶってもらおうと思ったのに。何でしゃべるのよう」

「着るだけならまだしも、お嬢様はそのあとワニを大解放する気ですよね？」

どうやらあの世には、誠意とか反省とか詫びという概念がないらしい。そのくせ着ぐるみはあるらしい、と彼は脱力系精神疲労の中で判断した。

彼には起き上がる術がない。四肢はあるが機能していなかった。そもそも立ち上がる気力もなかった。そんな彼に、死にかけた虫を観察する子猫ような、あどけない視線が降り注ぐ。

「おめでとー。夢じゃなかったら、君はもう死んでるよん」

まるでひとごと。不注意をごまかそうとひきつり笑いしながら言われる方がよっぽどマシな、良かったなどと爪の先ほども思ってたさげな淡泊さだ。

「……夢の中の登場人物に夢だつて断言されんの、初めて」

「よく言われるー」

彼の中であの世からの迎えというものは、足許に雲をたなびかせ、後光を背負っているもののはずだった。穏やかにほほ笑んで、さあいらっしやいと両手広げて出迎えてくれるもののはずだった。

あれは迷信か。実際はこんな脳の足りないガキをよこすのか。人生の最期がこれでいいもんか、夢にしたってこいつはひどすぎる、と気力だけ起き上がらせる。

「チェンジ。乗られんのは楽でいいけど、あいにく踏まれる趣味はねーの」

ヒールの音が素直にバスへと去る。やれやれ、と一息ついた彼の耳へ、裏切るように能天気な少女の声が響いてきた。

「カイ、おしぼりパス。あ、割箸も」

「お嬢様、割箸って……あれでも一応人間なんですから。ボクがやります」

ぱたぱた軽い足音が彼に近づく。さっき、イタズラしようとしたとか少女に疑いをかけられてた少年だ。口調は優しげだがさりげなく『あれ』呼ばわりされていることに、彼は密かに憤慨する。

「チエンジで男に代わる気か。俺はシヨタじゃない。ホモでもない。そんな無体ありかつ」

「失礼しまーす」

「おい少年、ナニする気なの……お？」

一瞬ののち、使い古しの雑巾並にズダボロな彼の体は、どこだかの少年の指によっておしぼりに軟着陸した。

この時にもう、彼の運命は決まっていたのかもしれない。悲惨な現実から逃れて迷い込んだ世界でさらにめちゃくちゃな扱いを受ける、これまた哀愁な運命が。

…… 2 …… break out . . . 突然起こる

彼はおしぼりごとバスの最前席に降ろされた。ウエットティッシュらしきもので顔を拭かれる。轢かれて踏まれてボンヤリしていた視界に、ようやく人の姿が映り始めた。

「でかつ」

「カイ、天誅」

名を呼ばれた少年の指が、瞬時にぐりぐりと彼をひねり潰す。

「いや胸もだが、俺はえをこぼほいつへふぶぼ」

「お嬢様、目のことを言っただつもりだそうです」

「あっそう。それならそうと言えばいいのにい」

言う暇を与えなかったのは誰だと反論する力もなく、彼は再びボロモップのように横たわっていた。

「早く目覚めようよ俺……」

「で、何を困ってるんの君は」

彼は、おやつと思いつつ顔を上げる。少女の声には一転して、優しさと親切心が溢れていたからだ。彼はようやくまともな少女と向き合った。

ピンクのスパンコールのピンヒールに突っ込まれた、驚くほど白い足。足首は折れそうに華奢なのに、ふくらはぎはやけに肉感的。転んだことがなさそうに滑らかな膝を経て、太腿は超ミニの紺のスカートの包まれている。

砂時計みたいにくびれた腰に、ベストの布地を張らせるほどの胸。細い首の上にはまだ十六か十七か、あどけなさや女らしさが同居する小さな顔が待ち受けていた。

落ちてきそうに大きな瞳、バービーみたいにちよつとだけ上向いた鼻。ライトブラウンの、これでもかかとカールされたふわふわの髪にはリボンが踊る。

頭に行くべき栄養が、きれいさっぱりその他に振り分けられたかのような。少女の脳みそとざる豆腐のシワ数を思い浮かべ、彼はざる豆腐に軍配を上げた。

彼は胸と尻がばつんばつんに張った、濃紺のバスガイドの制服を眺め回した。

「デリヘルでコスプレして、いくら？」

「カイ」

またしても少年の指先が、内臓がはみ出そうな圧力を彼に加えた。「少年……顔に似合わず容赦ないのね」

「失礼しました。でも本当はボクだって、こんなことしたくないんです。恨むならお嬢様を恨んで下さいね」

十歳くらいで、ベストに半ズボン。合唱団からスカウトされそうな、ソフトで澄んだソプラノ。絶滅危惧種な丸眼鏡をかけた、線の

細い優しげな顔。憂いながらも迷いなく制裁を代行する少年は子羊の皮をかぶった狼なのだ、彼は体の節々がきしむ音で思い知らされた。

恨めと言われた少女は頬をぷつとふくらませて仁王立ちしている。「制服で欲情したりして、やらしー。短絡的オヤジ思考で断罪しました」

「ぱんつ見えそうにスカート短いバスガイドが、どこの世界にいる」「夢の世界」

そうだこれは夢なんだ。あの世からの迎えだなんてありえない。きつと溜まつてるからこんな夢を見るんだ。処理すべく襲つちまえと、彼は不埒なことを考える。が、今の彼は自由に動けない。

情けなくてため息をつく彼に、少女は星がこぼれてきそうな鮮やかな笑顔を向けてきた。

「あたしは悩める子羊のナビゲーター。心の旅路のバスガイド。あなたの悩みを解決するお手伝いをしまーす」

「少年、この狂ったガイドを今すぐ病室に連れ帰ってくれ。制服じやなくて拘束服にお着替えさせてあげてね」

「あー、信じてない」
現場レポーターには決して採用されないであろう無感情さで言い、少女は腰に手を当てる。

「いいもん、五割増しで請求するから。じゃ、君のお悩みはいけーん」

軽やかに髪をバウンドさせて、少女は彼の前に腰を落とした。

「君のそのナリじゃ、表層じゃ何も見えてないね。ってことは聴覚が探索ルートか」

カラーストーンが施されたパールピンクの爪先が、彼の耳にそつと押し当てられる。

「何を……」

「シンク口です。お嬢様は触れている相手の感覚器官と同調できるんです」

口を挟んだ少年の説明が理解できずに聞きなおそうとした時、彼はその意味を体感した。少年の声が二か所から聞こえ出したのだ。ひとつは今までと変わらず彼の右方向から、そしてもうひとつ加わったのは左方向から。まるで彼の向かい側にいる、少女の位置から聞いているかのように。

「こいつと聴覚を共有させられたってことか？」

「そうです。さらにお嬢様は、あなたの聴覚記憶も共有し再現できます」

「記憶を覗き見か？ 冗談やめてよ、そんなの著しくプライバシーの侵害」

抗議はすでに遅かった。彼の耳の奥に、激しいブレーキ音が蘇る。エアブレーキの抜ける音、汽笛のごとく重く低いクラクションはそれが大型トラックだと告げている。タイヤがねじり裂かれるような引きつったブレーキ音は、恐怖を食べたがる野獣のようにこちらへ突進してくる。

『きゃあ！』

『うわあっ！』

若い男女の叫び声は金属と金属が衝突しねじ曲げられる、おぞましく不快な大音響にかき消された。やがてサイレンが近づき、複数 of 慌しい足音や鋭い指示が飛び交う。

『男性は即死だ。女性を先に搬送しろ』

鳴り続けていたけたたましいサイレンがやむと、しばらくは静かながらも緊迫したやりとりが続いた。

『先生、レントゲンです』

『よし、すぐ緊急手術だ。腹部のエコーは』

『準備できてます』

『私がやる。……お、これは……』

輸血、メス、鉗子、吸引　延々と繰り返される作業が厳しい状

況であることを物語っていた。十数時間後、ようやく大きなため息をついて歩き出した重い足音に、ばたばたと複数が駆け寄ってくる。

『先生、娘は……娘は助かったんですか』

『お母様ですね。落ち着いて聞いてください。……娘さんは、脳死状態です』

一拍の間、そして年配の女性の嗚咽があたりに響いた。それからゆっくりと低い声で、男が話します。

『娘は脳死になったら、臓器提供するドナー登録をしていたはずです……』

しかしきつぱりとした口調がそれを却下した。

『あと七ヶ月待ちましょう』

どうしてです、と男の声が問う。

『娘さんは妊娠なさっています。三ヶ月です』

続いていた嗚咽が止まった。

『臨月までは延命措置を施します。とはいえ、容態は不安定で全く予断を許しません。しかしあれだけの事故に遭いながら、流産しなかったのは奇跡です。母体と赤ん坊の生命力を信じましょう』

「つまり」

少女の声で、彼は我に返った。彼がこの夢に落ちる直前に繰り広げられた、現実の悪夢の再生から。耳に触れていた少女の指先の感触はもうない。

いつの間にかぎゅっとまぶたを閉じていた彼が恐る恐る目を開けると、少女は今にも泣きそうな顔で彼を覗き込んでいた。

「つまり、君がその三ヶ月の赤ちゃんなんだ」

…… 3 …… b r e a k t h e d e a d l o c k . . .

行き詰まりを打開する

轆けて踏めておしぼりに載せられるほど小さい、自力で動けない、そんな妊娠三ヶ月の赤ん坊である彼の悩み。それはかの有名なハムレットと同じ。生きるべきか死ぬべきか、であった。

少女がしゃくりあげながら涙を流している。あまりにぼろぼろ泣かれて、彼は少女のざる豆腐な脳みそが高野豆腐に干されてしまうのではないかと思った。

「あー、別に泣かなくていい。どうせ生まれたって、両親揃って死んでるわけだし。俺も死んじゃった方が楽だわ」

少年がピンクのクリアケースに入ったティッシュを捧げ持つ。そこから何枚も引き抜いて目に当てると、少女はスンと鼻を鳴らした。「おばか。そう割り切ってる人間は、救援信号なんて出さないよーだ」

「人間だって気づいてくれてたようで、どうも」

「ごまかさないで。君は生きたいの」

覗き込まれるとでかい目が本当に落ちてきそうで、しかもその目玉に潰されそうで、彼は頭上を警戒する。

「そういう陳腐な励ましが欲しくて、こんな夢を見てるとでも？」

「君さあ」

丸めたティッシュが放られると、ゴミ箱を抱えて待っていた少年が器用に受け止めた。

「ユングの集合的無意識って知ってる？」

突然の話題転換に面食らいながらも、彼はうなづく。

「あー、意識つてのは表面層では個人でも、その根っこはみんな繋がってるとかいうやつでしょ」

彼には、このお脳フヤケ少女が心理学者ユングの名を口にするのがあまりに意外で、罪にさえ思えた。占いやファクションのノリで心理学にハマったりもするのが、この年頃のガキのやることかもしれません。と、彼は少女の代わりにユングに許しを請う。

そんな彼の嘆きに気づきもしない様子で、少女は無邪気に笑った。「そう。個人の表層意識は大木における一枚の葉っぱ。元は全部幹につながってる。その概念で考えれば分かるよね。個人的無意識である夢を経由して入り込む集合的無意識の世界は、みんなつながってるの」

彼は残念ながら、少女の言うことが正しいのを認めた。

ユングによれば、人間の無意識は階層構造になっている。浅い層が個人的無意識だ。これは個人の経験や知識が無自覚に蓄積された層である。

そして個人的無意識はより深い層、すなわち集合的無意識に根ざしている。ここには個人の範疇を超え、民族や人類に共通した心の働きそのものがある。世界各地の神話やおとぎ話に登場する、老賢人や英雄などの人格が共通していることでそれがうかがえる。

「そこは表層意識と違って、他人と自分を隔てるものは何もない。だからこうして、他人同士顔を合わせて話せるわけ」

少女は夢を個人的無意識から集合的無意識への門として捉え、それを経たより深い集合的無意識レベルで他人と自由にコミュニケーションできるようになるのだ、と言いたいらしい。

ならばここは夢をくぐって入り込んだ集合的無意識の世界であり、現実だと言いたいのか、と彼は理解した。

「そいつは意識つつう精神世界の話であって、その仕組みと似たこういう空間が実在するってのは違うんじゃない」

「空間がないなんて、ユングおじさんは言っていないもん」

あるとも言っていないぞ、と彼は反論したくなる。

「で、本題いきましようか」。その集合的無意識の一幕を間借りして

その世界を紹介するかのようになり、白く細い腕が大きなフロントガラスの向こうの果て無き闇へと伸ばされた。

「あたしは悩み事相談所ブレイク日本支店で、支店長してまーす」

夢なら早いとこ覚めちゃって 彼は頭を抱えなくなつた。

いくら巨乳でもこんな騒々しい、十年前に脳がとろけて耳から流れ出てつたことにも気づいてないような女なんぞ願ひ下げだ。起きる俺、起きるんだ と、彼は自分を叱咤する。

だが少女は辟易している彼の様子などお構いなしに、得意気にしゃべりだした。

「ほら、一晚寝たら考えがまとまったとか、昨日まで悩んでたのは何だったんだースッキリ！ って経験あるでしょ。あれはこうして、ブレイカー…… あ、相談員のことね。ブレイカーに夢の中で相談に乗ってもらつて解決したから。君の手柄じゃないんでーす」

「ああそうなのすごいのねー」

「なのに朝になつたら相談のことなんて覚えてないか、夢だったと思うかだなんて……ひどい話だったら。ねー」

「ねー」

あしらう彼の横で、少年が細い首をぴよこぴよこさせて少女に同意を表明している。その目が冷静なのを見て、彼はむしる少年の腰巾着ぶりが健気にさえ感じられてきた。

「困つた時特有の脳波を救援信号としてキャッチして、こうして駆けつけるわけ。で、悩みを聞いてあげて、解決したらお代を頂く。と、そういうシステム。先生の話、理解できましたかー」

彼は少女のアホが自分に空気感染しないことを、心底祈つた。

「……金持つてません、三ヶ月のガキなもんで。逆立ちしたつて

あ、腹ん中じゃ逆立ちか」

立ち去りたいのは山々だが、いかんせん彼には移動手段がない。個人的無意識へ戻る手立ても知らない。仕方なく肩をすくめてみせると、少女がグロスの光るピンクの唇を尖らせた。

「やーだ。精神世界でお金なんて何の価値もないのに。トータリー・ナッシング」

「んじゃ、ボランティア？」

少女はくるくるの髪を手で背中へと流しながら、にっこりと首を振った。

「無償の奉仕なんてありえない。内心、秘めた欲望とか自己満足とか死後の厚遇を期待するのが人間なのです」

「……アンタ、無邪気な顔してスレてんねー」

「君こそ、ろくに男の機能も出来てないのにオジサンくさいね」

ひょい、と彼の下半身を包んだおしぼりが、パールピンクのネイルにめくられた。

「セクハラだ」

「で、オジサンくさい赤ちゃん。あたしが報酬にもらうのはお金じやない。寿命」

…… 4 …… b r e a k t h e d i v i n e l a w .
・ 神の掟を破る

「寿命？」

「そう。大金持ちでも貧乏人でも、老若男女生きてる人間なら必ず支払えるもの、それが寿命。何日、何ヶ月、何年分かはあたしと君の交渉次第」

ビシ、とネイルが彼の鼻先に据えられる。手強い交渉相手であることを宣言しているようだった。

「寿命の取引なんて、倫理がよく許すな」

「倫理はともかく、神様に見つかる前に引越さなきゃね」

神様的には非法組織らしい。彼はため息をついた。

「命を削ってまで相談するやつのが知れないね」

「うふん」

満足そうに、勝ち誇ったように笑われて、彼はたじろいだ。その小さな小さな顎を、ネイルの先がくいくいといたぶる。

「命は大事って認識があるんだ。ほら、君は生きたいの」

「……………」

少女は手を引っ込めると、バレリーナみたいにくるんと爪先で一回転した。

「悩み事でウダウダしてたら一週間、一ヶ月なんて平気で無駄につぶれる。だったらここで何日か支払ったって、まだおつりが来るじやない？ それとも君の悩みは、その何日かに値しないくらい、つまらないもののかなあ」

バスの通路を、ピンヒールがコツコツと行ったり来たりする。

「日本人男性の平均寿命は七十八歳、日数にしてのべ二万八千四百七十日。仮に支払いが七日だとしたら、それは平均的人生においてたったの四千六十七分の一」

「……………よく暗記できました」
すらすら流れるような数字の羅列を、彼は検算する気にもならない。

「悩み事の内容によっては、四千六十七分の一くらい釣り合つと思うんだなあ」

「けど俺、すでに風前の灯なんだわ。寿命を一日でも支払ったら、今ここでポックリかもな」

「決めた。君はあたしの相談所で働きなさい。自分で寿命を稼いで、君自身に割り振ればオール・オッケー。カイ、契約書」

突き出された少女の手を、少年は困ったように見返している。

「お嬢様。一応、ブレイカーの採用規定は満十八歳からです」

「だから十八年と七ヶ月、ツケにしてあげるの。あたしの口座残高からなら余裕」

少年はハイと答えて、バスの後方へ去っていった。ばさばさと乾

いた音を立てて書類をあさっている気配がする。少女はハートのチャームがじゃらじゃらついたペンを頬に当てて、にっこり彼に笑いかけてきた。

「オジサンくさい前世の知識が残ってるみたいだから、初心者レベルの相談くらい受けられるでしょ。人って生まれる瞬間の苦しさで前世の記憶を失くすって本当なんだな。生まれる前の赤ちゃんなんてファースト・コンタクト」

彼はブレイク日本支社とかいうものへの就職準備がなされていることを知る。

「先生。本人の意見とか希望は無視されているのは気のせいでしょうか」

「つまり七ヶ月後の生まれる瞬間に、君は知識も経験も失ってたただの赤ん坊に成り下がる。それまでに十八年と七ヶ月の寿命を稼ぎたまえ」

意見や希望だけでなく、抗議さえも無視された。

「十八になったらブレイカーとして正式採用してあげる。そこから日々、君の寿命を稼ぐのだ。んー、サバイバー」

「だから俺は」

彼が重ねて抗議する前に、少女は背を向けて低く呟いた。

「カイはね……あの子は心臓移植のドナーが現れるのを待ってる。ここで働かなかつたら、一ヶ月前にとっくに寿命が尽きてた」

それでやたらと手足が細くてなよつちいのか、と彼は合点した。

「せっかくママに守ってもらった命のクセに。カイの前で、死んだ方が楽なんてもう一度言ってみなさい。あたしが君の命、今ここで踏みつぶしてやるから」

見るからに頭の足りなさそうな少女とは思えぬドスの効き方だった。ドスが効いてなくても、彼は言い返せなかった。

: : : : 5 : : : : b r e a k i n h i s l i f e . . .
人生の岐路

組んだ膝の上で書類をめくって、少女はあちこちに走り書きを加えている。スカートと腿の隙間はばっちり彼の目線上だ。特等席でいい眺めを満喫する彼の視界に、さりげなく少年が割り込む。

「そこ、邪魔」

「カイです。ギリシャ文字の」

カイはむっとした様子で、それでも健気に名乗った。

「日本人がギリシャ語を名づける世になったか。大和魂は絶滅したつて、環境省に到達しといて」

「違います。お嬢様の付き人は、代々ギリシャ文字をあてがわれるんです」

「へえ」

数字三桁のスパイ映画のスパイツール開発スタッフみたいだな、と冷やかす。

「（カップ）とか（クサイ）なら笑いを取れるのに」

「ボクは笑いを取るために働いてるんじゃないやありません」

「はい、できた。ここにサイン……は無理か、拇印」

少女が書類の一番後ろの空欄を差し出した。自分を救いの神だと信じているような笑顔が、彼には疫病神に見える。

「俺は契約内容を確認するために紙をめくることができなかったりする、か弱き小さな体ですが」

「お婆か。ここは集合的無意識、肉体の存在しない世界なの。自分に都合のいい容姿を念じればいいだけ。実際君は赤ちゃんのくせに都合よく、目も見えてるし口もきけるし」

そう言われて念じてみるが、彼の姿は一向に変化を見せない。カイが大人びた仕草で肩をすくめた。

「無意識世界の造形を好きに作り上げて固定できるくらいの精神力をお持ちなのは、ボクの知る限りお嬢様だけです。だからこそこうして、バスや会社が存在できるんじゃないやありませんか」

「そお？　しょーがないなあ、契約したらカツコイイ十八歳にしてあげる」

「契約内容を読んでくれなきゃだ」

「子供じゃないんだから駄々こねない」

「それ以前の俺が子供じゃないんなら、この世に子供は存在しない」
少女は眉をしかめた。片手を腰に当て、いかにも嫌々そんな平坦な口調で読み上げ始める。

「契約書。一、君の睡眠中は個人的無意識を経由して、お嬢の経営するお悩み相談所……」

「……お嬢が名前なのか」

「それ以上突っ込んだら、お嬢様はまた制裁発動なさいますよ」
珍しくカイが密やかに進言する。

「……お悩み相談所、ブレイクに必ず入社すること」

「さつきから思ってたんだけど、何でブレイク？」

カイがまた耳打ちする。

「悩みから抜け出すとか、解決に向けて殻を破るとか、そんなイメージだそうですね」

「失敗とか絶交とかって意味もあるって知っててつけたんならナイ」
ス

二人のひそひそ話を無視して、お嬢が続ける。

「一、出社後は鏡に向かい、笑顔の練習をして業務に臨むこと。その笑顔で君の寿命が一日延びる」

「社則とスローガンが一緒ください」

「一、お客様の前で飲食はしないこと。もちろんお客様を食べちゃうのも厳禁です」

「……カイ、朱肉」

最後まで聞く気力を無くし、彼は親指を朱肉に押し付けた。契約書の署名欄にべったりと拇印をおす。

「あーあ、やつちゃった」

ぼそりと呟くカイの視線の先。そこには、お嬢が手ずから足した走り書きの「か条があった。

『一、十八年七ヶ月のツケを支払うまで、君はお嬢の下僕』

…… 6 …… b r e a k d o w n . . . 屈する

「下僕つてのは心理学が無意識界用語で雇用者、つて意味だったり」「しないよー。そのままの意味」

同情の眼差しをしつつも、カイはさつさと契約書をフォルダに収納してしまった。その口調がいきなりなれなれしくなったのは、下僕契約でカイより下の身分になったからなのか 彼はいきなり下僕たる自分の立場を思い知らされた。

「詐欺だ。人権侵害だ」

「君、名前がいるね。タイジでどうだ」

「話を聞け……」

「読みもせずに契約したタイジさんの負け。無意識の世界に人権も法律もないんだよ。あるのは契約だけ」

同情だったはずのカイの目は、すでに哀れみにすり替わっている。「おまえまでタイジ言っつな。つつつかタイジって何だ、まさか胎児？」

「ベイビーちゃんがいい？」

「……タイジで」

カイがにこにこしている。

「よかったー。タイジさん、子宮の中では寝てばかりだよね？
昼間はボク目が覚めててここにはいないから、お嬢様さびしがって
たんだよ」

「そんなことないもんねーだ。君の部屋は支店長秘書室。カイと一
緒に使いなさい」

タイジがじつと見てみると、お嬢の頬はほんのり桜色になった。

「なあに、下僕。返事くらいしなさい」

「……へえへえかしこまりました、ご主人様」

そして彼は十八歳の容姿を与えられた。脳死女性を母に持つ実質
妊娠三ヶ月の赤ん坊にすぎないタイジは、七ヶ月間で返済しなけれ
ばならない寿命の借金を背負い、少女の下僕をつとめることになる。

タイジ、現在三ヶ月。借金、十八年七ヶ月。彼はノルマを達成し
て、生まれてくる事が出来るのか。

…… 1 …… break off short . . . 絶句
する

支店長秘書室、と言ってもそこはまるでトロピカルリゾートホテルのロビーだった。大理石の円柱に籐椅子のソファ。フロアの向こうは熱帯植物がジャングル状態に繁茂して、その奥からは猿だかオウムだか謎な奇声が響いていた。

タイジは頭を抱えて座り込む。

「……誰か夢だと言ってくれ」

「ある意味、夢。集合的無意識世界だもーん」

「そうあっさり夢だと言われると、むしろ羨えるもんだな」

この世界はすべてお嬢様の創造だから、お嬢様の前で趣味が悪いなんて言っちゃだめだよ、とカイが繊細な眉をひそめて忠告してくる。タイジは冷凍マグロ並にどんよりした自分の目を、カイの丸眼鏡越しに見た。

「ってことは、おまえもアイツは趣味が悪いって思ってたのね」

一瞬硬直してから、あわわと空気を噛むカイ少年。

「タイジさんが、夢だと言えと言ったんだ!」

「悪夢だなんて言ったか?」

「でもそういう口調だった!」

「いや俺は南国リゾート気分たあ夢みたいにいい会社じゃねえかと」

ふと顔に影が落ちてきて、タイジは黙る。見上げるとそこには一人の青年。カイがぱっと目を輝かせて走り寄った。

「ファイさん!」

背は百九十はあろうか。ざっくり長めのプラチナブロンドに浅黒

く締まった肌は、ビーチの太陽に灼けすぎたライフセイバーのようだ。明らかに日本人ではない彫りの深い顔は、整いすぎてむしろ人格を感じさせない。加えて、瞳孔に向けてグリーンからヘイゼルへとグラデーションする瞳の色は、まるで作り物のような精巧さだ。

海外のファッション雑誌かアニメの世界にしか登場しそうな美しい美青年の薄い唇から、驚いているタイジに向けて第一声が発せられた。

「子供をいじめるのは良くありませんよ。ゲロダサ」

タイジはゲロダサ、が未知の外国語における『やめなさい』に相当するのではないかと考えた。それくらい、この上質なスーツを軽やかに着こなす外人モデルのような男の口から出てくるには不釣り合いな言葉だったのだ。

「ファイ、もう来てくれたんだー」

「あたりきしやりきのこんこんちきでございます、お嬢さん」

騎士のようにうやうやしくお嬢に頭を下げるその姿と裏腹に、青年はまたしても不似合いなセリフを口にした。

「お嬢さんのお呼びとあらば前付き人たるこのファイ、Bダッシュで睡眠薬の一ビンや二ビンいただきマウス」

「あ、あつちでは朝か」

「ノープロブレム。どうせヒマジン学園しておりましたので」

「ま……待て！ 何だ、何なんだその死語の羅列は！」

ようやくそれらが外国語なんかでないことを認め、タイジは叫ぶ。「金髪碧眼でベタベタな死語を言うな！ 脳がねじれてくるわ！」

抗議に驚いた風もなく、青年はひょいと肩をすくめた。その外らしい仕草はあまりに自然なのだが。

「めんごめんご。お嬢さんの言いつけですから、ゆるしてチョンマゲ」

それでも構わず繰り出される懐かしすぎる言葉に、タイジはめまいを覚えた。

「ファイ、これがタイジ。拾った行き倒れ下僕」

「拾った言つな。行き倒れてもいない」

「タイジ、この人がファイ。前の秘書くんです」

俺は『これ』で、こいつは『この人』か。下僕は人扱いじゃないのか。いやお嬢は踏んだり割箸でつまもうとしたり、最初から俺を人扱いしてなかったぞ。と憤慨しているタイジに、ファイは白く輝く歯を覗かせて爽やかな笑顔を見せた。

「4649」

文字になっていなくても、タイジにはそれが数字で言われたヨロシクであることが分かった気がした。

「芸能人みたいでしょうゆ顔ですね。お嬢さんがお造りになったんですか？」

その言葉にタイジは、一瞬忘れていられた容姿に関する悪夢を思い出させられた。

三ヶ月の胎児にすぎなかったタイジは、お嬢によって十八歳の容姿を与えられ。貸し出されたというべきか。自分の姿を鏡で見させられた時、たっぷり一分は口もきけずにいた。そこには、狡猾な狐が女をたぶらかさそうとして化けて出てきたみたいな顔があったのだ。

ファイとは対照的な黒い髪は腰まであり、後頭部で無造作にまとめられて狐の尻尾を形成している。背の高さと骨の太さがなければ、一見男か女か迷うほど肌は滑らかで白い。人の心まで切れそうに、長く切れ上がった目尻。そこに収まる熱のない黒い瞳。

お嬢は固まっているタイジに向けて、シャツのボタンは二つ以上とめてはいけないとか、人懐っこい笑顔を見せてはいけないとか、理解不能な命令をとうとうと並べ立てた。そこに至って初めて、タイジはお嬢の人形にされたことに気づいたのだ。

しかし下僕契約を結んでしまった以上すべての文句は却下され、タイジは涙を飲んでこの容姿を受け取ったのだった。そうして支店長秘書室に連行され、今に至る。

「……ソース顔のアンタもおもちゃにされてんの？」

死語には死語で対抗してみるタイジに、ファイはにっこりとうなずく。

「事故か何かで、頭も目もつぶされてしまったらしいです。ここは誰ワタシはドコでさまよっていましたら、お嬢さんが思い出すまで生き延びなさい、と」

そして寿命をエサにおかしな容姿を与えられて、死語を使えと命令されたわけか。似たような境遇らしいが人形っぷりに関しては俺のほうはまだマシかもしれない、とタイジはわずかな慰めを見出した。

「で、カイが目覚めてて無意識界にいない時は、タイジの調教をファイに頼むからね」

「指導と言え」

「モチのロン、合点承知の介でございます」

集合的無意識世界では俺の意見は徹底無視か、これが下僕というものか　とタイジはうなだれる。

「俺はアウト・オブ・眼中ってやつね……」

途端にファイがプラチナブロンドの毛先を揺らし、くるりと振り向いた。

「おお。タイジさん、死語イケてますよ。死語普及委員会でおたしと握手しませんか」

「死語にはよく反応するな……」

お嬢が支店長室へ、カイは個人的表層意識すなわち目覚めた状態の通常生活へと消えていって、タイジはファイと二人秘書室に取り残された。請われてぼそぼそと下僕転落話を聞かせる。

「七ヶ月で十八年七ヶ月を稼ぐんですか！　おっとびっくり玉手箱驚き桃の木……」

「もついいわ」

ファイはウーン、と唸って顎をなぞる。しゃべらなきゃ絵になる

男なのにな、とタイジは嘆息した。

「そんな回収率低そうな賭けをするなんて、寿命ハンターのお嬢さんらしくないですね。めちゃんこヒマ人してたんでしょっか」

俺は退屈しのぎに下僕にされたのか、とタイジは屈辱に震える。

「じゃあまず、下僕最初のお仕事といきましょう。お嬢さんのペットの散歩です。レッツラゴー」

タイジはジャングルへ向けて歩き出したファイに、気持ちも体もずるずるとついていく。

「人面犬とかじゃないだろうな」

「ははは、タイジさんもなかなか死語使いですね。実際は三ヶ月胎児で見た目は十八ですけど、中身の前世の享年は二十五ですか？

三十？」

「その件に関しましては記憶にございません……げー、やべえ死語が伝染してきた」

犬の散歩とは、下僕とは思ったより楽な仕事らしい。てつきり全裸でハイヒールで踏まれたり鞭打たれたりしなきゃいけないのかと

そこまで考えてタイジは、下僕前にすでにそんな扱いを受けていることを思い出して気を引き締める。

だが仕事が犬の散歩なら実は下僕の待遇もそう悪いもんじゃないかもしれない、と内心期待するタイジに、ファイはジャングルの太いパキラに結んであった鎖を解いて渡した。

「……鎖？」

「こちらがウロ子さん。あちらがクロ子さん」

タイジが長い鎖を引っ張ると、その先は沼に沈んでいた。犬が沼に棲んでいるわけがない。タイジは唇の端が引きつったのか笑ったのか、自分でも判断できなかった。

「……胎児の俺をタイジと名づけたお嬢の安直なネーミングセンスからすると、ワニの予感がするのは気のせいかな」

「ドンピシャです」

いやワニにもいろいろある。カイマンあたりの小型ワニがペット

としてはメジャーで　と希望をつなぐタイジ。しかし沼からのっそり姿を現したのは体長三メートルを超え、最も凶暴と言われるイリエワニ。

「もう一匹、アルビノのシラ子さんもいらしたんですが。カイを振り切って目下脱走してらっしゃいます」

あの弱々しい少年がワニに振り回されて逃げられる様子が、タイジの脳裏にまざまざと浮かんだ。むしろ扱いきれないのが普通の人間ならば当たり前だ。

それにしてもファイはシラ子に敬語を使わなかったか、もしかして秘書はお嬢のペットより格が下なのか、となると下僕は言わずもがなか。ウロ子やクロ子が俺を食いたがったら、食われるのが俺の役目なのか　下っ端人生を受け入れる心の準備がまだないタイジは、絶望的な気分になる。

「本当はカイの仕事なのですが、すこぶる怖がってしまっているのが無理なのです。彼らの散歩をこなすたびに、チップが寿命三日分出ることになります」

「散歩中に食われたら、どうしてくれるの？　労災がでるわけ……ないわな」

ファイはちつつ、と人差し指を左右に振った。

「タイジさん、精神世界にはまだトーシロのようですね。ここでは噛みちぎられたって丸飲みされたって死にませんから、ダイジョーV。痛いには痛いかもしれませんが。ではデッパツしてらっしゃい、下僕さん」

…… 2 …… break a bond …… 契約を破棄する

「寿命は寿命で受け入れる。十八年七ヶ月は返す。帰らせてもらおう」
藤椅子で読書していたファイはのんびり顔を上げる。泥まみれに流血で散歩から戻ったタイジは、その前でせえせえと息をついた。

「おかえりんご。およよ、クロ子さんウロ子さんに、ずいぶんとなつかれたご様子で」

「なつく相手をくわえたまま転げまわるのが、あいつらのなつき方なのか。ワニはもういい。頭の足りないガキも真っ平だ。明日死んでも構わねえから、俺は下僕をおりる」

タイジがかみつかんばかりの勢いで言っても、ファイは悠然と長い足を組み替えただけだった。

「では次は講習といきましょうか、タイジ選手。付き人および下僕の心得その一。お嬢さんには決して触れないこと」

「ただいマンモスとでも言えば答えるのかー！」
満足そうな笑みと軽い拍手がタイジに送られる。

「タイジさんが来てくれて一番ウハウハしているのは、わたしかもしれません。こうして死語トークでダべれるんですからね」

「好きでつきあってるんじゃない。言わねえとおまえが答えねえから」

「まあ、そうぶーたれず」

お嬢がファイに死語を言わせる理由が、タイジには分かってきた気がした。こうして文句を並べ立てる部下たちの気を挫くために違いない。実際こうして効果があるじゃないか、とタイジはソファに崩れ落ちながら思う。

「ぶっっちゃけ無理なご相談です。ここには警察も裁判所もありません。お嬢さんは支店長というよりも女王様なのです。お嬢さんが法律。お嬢さんとの契約が絶対です」

「あのクソガキがそんなにえらいのは何でだ」

「心得その二。お嬢さんには決して逆らわないこと」

無視されて、タイジは唸った。

「すみま千円。どうしてお嬢がそんなにえらいのか、このドジでノロマなカメに教えて下さい」

「お嬢さんはタイジさんの耳に触れて、聴覚とそれに関連した記憶を共有しましたね」

タイジは悪趣味なバスの中で、事故により父親が死に、母親が脳死に至つたいきさつをお嬢に引き出されたことを思い出した。

「お嬢さんは寿命を取引できる代償に、触れた相手の記憶や感情を否応なしに受け取ってしまう宿命を負わされているんです」

「だれに……どなたにざいますの？」

「魂と引き換えに願い事を叶えてくれる存在と叫びたら、何ぞや」

悪魔？ だからお嬢は、『神様に見つかる前に引越さなきゃいけない』と言っていたのか　タイジは首筋がすうっと冷えていくように感じた。

「世の中には魂を売ってでも生き延びたい、神にすがらず、みずからの手であがきたいと願う者たちがゴマンといるんです」

ファイのガラス玉のような瞳に射すくめられて、タイジは思わず視線を逸らす。カイも、そしておそらくこのファイもそうしてあがいている者のひとりなのだ。タイジは死んでしまった方が楽だなどと言ったことを、ファイの澄みすぎた目に見抜かれた気がして、居心地が悪くなった。

「けれどこの相談員・ブレイカーになることで、魂を売ることなく寿命を稼ぐことができる。お嬢さんは代償をおひとりで肩代わりなさっている。ブレイカーたちのために、いわばスケープゴートになったのです」

スケープゴート　他人の罪を背負い、いけにえになる者。古代ユダヤ人が年に一度、人々の罪を背負わせて野に放ったヤギ。

心理学では、集団や他人のミスなどの責任を、身代わりに背負わされる人間・存在。集団の中にひとり犠牲者を作ること、集団が

円滑に保たれるもの。

例えば経営難や事故を起こした企業において、引責辞任するトップ。家族や親族の問題を一身に抱えさせられて、鬱になったり自殺していく者。さまざまなうつぶん積もらせたクラスのいじめられっ子。

「ユングにおける投影、か……」

社会や心に必ず存在する影は、目を背けるには限界がある。それを他者に投影し攻撃する スケープゴートを求めることで、安定を保とうとする。

寿命の限界を見てしまった者が己の運命を嘆き、神を呪い、その怒りを誰かに向ける時。寿命を欲して夢を見る時、そこにある救済システムがブレイクであり、怒りの矛先のスケープゴートとしてのお嬢なのだ タイジはそれが自分自身にもあまりに当てはまっていることに気づく。

「お嬢があんなアホなのは、わざとなのか？ 過酷な運命を背負わされたはけ口として馬鹿にしたり、憎んだりしやすいから……？」

「心得その三。お嬢さんの心を乱さないこと」

ファイは静かな微笑を浮かべて、広い秘書室を眺め渡した。

「この世界はお嬢さんの精神力で物質が固定されています。お嬢さんの気持ちが弱くなれば、ブレイクは崩壊します。ブレイカーたちは寿命の残高が少ない者から、次々に死んでいくでしょう……南無三三」

…… 3 …… break through …… 打破する

支店長室のドアをノックしても、返事はなかった。タイジは少し

迷ってから、ノブを回してみる。ドアはすんなりと開いた。

中はまるで放し飼いの動物園だった。奥へ続く小道の左右にはジヤングルが茂り、昆虫やら小動物やら鳥やらがあちこちで動き回っている。

「俺よりよっぽど厚待遇じゃねえか、こいつら」

バナナの葉をくぐりながら、タイジはふと考える。お嬢が動物をこうもはべらせるのは、動物ならお嬢が触っても見たくないような感情を持ち合わせていないから安心なのではないか、と。

「そういえば俺に制裁を加える時も、カイに命令して代行させてたな……」

触ることで相手の余計な記憶や感情が流れ込んでしまうのを避けていたのか、とタイジは合点する。

タイジの聴覚から両親の事故の記憶を引き出した時、お嬢は泣いた。俺の代わりに泣いてくれたのかもしれない、とタイジは思う。生まれる前に両親を奪われて、泣こうにもタイジはまだ三ヶ月の胎児。泣く器官さえ持ち合わせていなかった。

お嬢から貸し出された掌に視線を落とす。狐が女をたぶらかそうと化けて出たような容姿であろうと、タイジは泣く術をようやく与えられたのだ。

「いまさら、涙なんか出ません」

お嬢に振り回されて、泣いてるところじゃなかった。事故という悲惨な境遇に対する嘆きはいつの間にか、下僕の身分に対する嘆きにすりかわっていた。運命や神に対する恨み言は、お嬢をスケープゴートにして、お嬢に対してぶつけられようとしていた。

立ち止まり、タイジは光と色と音、そして生命が乱舞するジャングルを見上げた。タイジにはこのおかしな支店長室が急に、神に忘れられた者たちのオアシスのように思えてきた。

熱帯雨林の木々が途切れると、天蓋つきの巨大なベッドが現れた。バスガイドの制服は脱ぎ捨てられ、お嬢はブラウス一枚でうたた寝している。

「会社で、ケツ出して寝る支店長がいるか……」

いるな、ある意味夢の世界には　と、タイジはあきらめのため息をつく。そしてベッドから落ちかけていた毛布を引っ張り上げて、お嬢にかけてやった。

溜まってるから巨乳女の夢なんか見るんだ、処理すべく襲つちまえとか、スカートと腿のあいだを覗き見しようとか、ついさっきまでそんなことを考えたはずの相手。それが半裸でベッドで寝ている絶好のチャンスだというのに、タイジはお嬢に触れる気にならなかった。

触った途端に自分の記憶や感情が見られてしまうから、という理由とは違つように思えた。

夢でワニに噛まれても死にはしない。ケツを出して寝ても風邪はひかない、それでもタイジはお嬢のお尻をさらしておくのがためらわれた。

「お嬢。俺、下僕やつてみるわ。激しく自信ないけど」
話しかけられても、長いまつげはぴくりともしない。

「アンタが本当のアホなのか、知りたくなつちまったしさ」
すつすつと幼い寝息が続いている。

「誤解すんなよ。毒を食らわば皿まで、つてやつだから……」
そう言つとゆっくり回れ右をして、タイジは再びジャングルの小道を歩き出す。そこへ、寝言のように小さな声が届いた。

「下僕の身分で生意気なこと言わないの、おばか……」
タイジはベッドに背中を向けたまま、くすりと笑った。

「へーい。失礼しました、お嬢様」

「すつきりとチヨベリグな顔になりましたね、タイジさん」

秘書室で寛いでいたファイは、支店長室から出てきたタイジを見上げて上品に笑う。

「冗談はよし子さん。あきらめついただけ」

「これが相談員・ブレイカーの仕事なんですよ、タイジさん」

ファイの、流し目に近い含み笑いがタイジをたじろがせる。

「わたしは下僕なんてとんでもハツン歩いて十分、にっちもさっちもどうにもブルドッグと行き詰ったタイジさんを、やる気にさせることに成功しました。本来なら、悩み解決の報酬に寿命十日分ほど頂きたいところですけど」

あんぐりと、タイジの口が開いた。それが目に入った様子もなく、ファイは手にしていたカップから優雅に紅茶を飲み下す。

「わたしにとっては、大切な死語マスター同士ですから。今回は無報酬にしておいてあげましょう」

「マスターなんぞでないわ！」

「では講習の続きをしましょうか。心得その四、お嬢さんの実生活について聞かないこと」

「頼まれたって聞くかー！」

タイジ、現在三ヶ月。借金、十八年七ヶ月・ワニの散歩代行による三日。彼はノルマを達成して、生まれてくる事が出来るのか。

..... 1 break chops . . . 痛めつける

ああ素晴らしきかな、個人表層意識世界、すなわち自我。着床とはまさによく言ったもんだ。温かく柔らかいベッド。心地よい血流の音。おふくろの子宮はまさにパラダイス、何者にも邪魔されることなくのんびりと休まる至福のひとつとき。

眠るなよ俺、眠ったら最後だ。いくら気持ちよくても眠ったら、そこは地獄だ。この、うとうとと意識と無意識の境をたゆたうギリギリをキープするんだ

「こんばんみ、タイジさん。どこで何してたんです？ 待ちくたびれたじゃありませんか」

気づくとタイジの前には、白金髪にして死語使い、ファイが立っていた。

「くそ、うつかり寝ちまった」

タイジは眠ると自動的に、集合的無意識の世界へ召喚される。なぜなら、不本意ながらその一画にある相談事解決所・ブレイクの日本支店長、お嬢の下僕であるからだ。

「どこで何するも、妊娠三ヶ月胎児の俺がすることって言ったら、おふくろの腹ん中でぐーたらするしかないでしょ」

支店長秘書室とは名ばかりで、そこはジャングルに建つ御殿だ。ただっ広い大理石のフロアの籐椅子で、タイジは大あくびを放つ。「タイジさん、仕事だよ」

甲高い少年の声に、タイジは眠い目をこすってそちらを見やった。長身のファイの隣にいと、カイはますます子供に見える。半ズボンの丸眼鏡ときっちりスーツの碧眼はそろってにっこりした。新旧の支店長秘書を前にして、嫌な予感がタイジを見舞う。

「謹んでご遠慮申し上げたく」

「下僕に仕事を選ぶ権利はないんだよ、タイジさん」

「やっぱりそうくるか、とタイジは眠りに落ちてしまった自分を呪った。睡眠は人間の三大欲のひとつだぞ。逆らえないんだぞ。それを利用するなんて卑怯なやつらめ　にらみつけるタイジをよそに、カイは床掃除と同じような気軽さで申し付けた。

「シラ子を捕まえて」

シラ子十歳、体長三メートル弱のアルビノ・アリゲーター。すなわちワニ。お嬢のペットで、散歩中にカイの手を振り切って脱走。以来二週間行方知れずだという。

「カイ、おまえがドジって逃がしちゃったんだろ！　責任持つておまえが捕獲しなさいよ」

「あ、ボク心臓が……」

カイは左胸を押さえてよろめく。そのこめかみに、タイジの両こぶしがグリグリとねじこまれた。

「うわーん、タイジさんのいじわるー！」

「精神世界には肉体がないんだから、心臓発作起こしたって食われたって死にゃあせん！　とつとつ　うおっ」

ビシ、と鋭い音とともにタイジの右肩に痛みが走る。おののいて身を引くタイジが見たのは、ファイが手にする一・五メートル竹定規。

「竹刀よりもスナップ効いて便利だしよ」

「おいおい、警策つてのは坊さんが座禅会で激励に使うもんだぞ！」

「カイ、ここはいいですからお嬢さんをお願いします。さて」

高価なガラス細工のような冷たい目がタイジを射る。同時にドス、と音を立てて竹定規がタイジの足先に突き込まれた。タイジが叫んで逃げようとしても、定規はしっかりとタイジの足を押さえて放さない。

「星の数ほどお仕置き代行してきたわたしのテクを、ご覧になりたいのですね。おっしゃる通り、精神世界には肉体がありません。

どんなに骨折が折れても出血が出て、命の危険が危ないということはありませんので」

ファイは死語でないとタイジの言葉を聞こうとしない。タイジは死語知識を蓄えた前世の自分に感謝した。

「ア…… アイムソーリー、ヒゲソーリー……」

「シラ子の好物？ くわえたときに引きのいい人間かなっ」

バスに乗り込もうとしていたお嬢はステップに片脚をかけたまま、そう言った。あらわになつた内腿を堪能していたタイジは、途端に内腿どころでなくなる。

「そんなこと聞いてどうすんの？ 君」

「聞かなかつたことにするわ……」

シラ子さんを連れ帰つたらチップは寿命一ヶ月分です、とファイに言われて最初は少々やる気になったタイジだった。が、ブレイク社内ジャングルがサファリパーク並の広さを誇ることに、および釣り餌にと考えたシラ子の好物を聞いて、タイジの意欲は瞬く間にマイナスへ振り切れた。

「適当に探すフリすりゃいいわ。そのうち勝手に戻ってくるだろ」

購買でチキンサンドとペットボトルを寿命一時間分で買い込む。

ここではすべてが寿命で取引されるのだ。

「ジャングルで一人ピクニックとしゃれこもうぜ。……ん？ しゃれこむ、ももはや死語か？」

ぶつぶつ言いながらジャングルへ入る。その手にあるサンドを狙う猿たちに、タイジは瞬殺された。

…… 2 …… break and run …… 突然走り

出す

「寿命は寿命で受け入れる。十八年七ヶ月は返す」

「帰らせてもらう、ですね？ 耳タコですよ、タイジさん。もう少しおニューな言い回しをよろぴく」

「死語達人のおまえに言われとうないわー！」

「ギャフン」

狡猾な狐が女をたぶらかそうとして化けたような顔をした、タイジ。その狐は猿に殴られ、引つかきまわされ、食べ物はおるかシャツまで奪われたみじめな姿で這い戻った。

「動物は賢いのですよ。タイジさんがやる気ナツシングなのを見抜いて、襲ったのでしよう。ざまあ味噌漬けですね」

「……おまえ、こうなるの分かってて俺をジャングルに行かせただろ。トサカにきたぞ」

「わたしのお仕置きをご覧になりたかったんでしょ？」

くつと唸って、タイジは相手がうわてなのを認めるしかなかった。

ファイはうつむくタイジの乱れきった長髪をきれいに結いなおす。

そのまま狐の尻尾、すなわちタイジの髪をつかんで歩き出した。

「いててて」

「調教も楽じゃありませんね。リンダ困っちゃう」

「なーに、そのきつたない下僕」

バスから降りてきたお嬢は、裸の上半身に猿の攻撃痕も生々しいタイジを一瞥するなりそう言った。お嬢と一緒にバスに乗務していたカイは知らん顔している。

「下僕が痛めつけられたつてのに、嬉しそうなのね……」

「ブレイカー業務おつかれサマンサ、お嬢さん。実はタイジさん、シラ子さんを探してみずからジャングルに分け入ったのです。猿と

戦ってきたそうですよ」

みずからじゃない、ファイに言われて　と説明しようとしたタイジの腿に、ファイの腰にさした竹定規がさわさわと触れた。お口にチャック、という脅迫メッセージをひしひしと感じてタイジは黙る。

心底意外そうなお嬢の目に、タイジは眺め回された。

「あつそ。でも無駄かも」

えっ、と驚き戸惑う言いだしっぺ・カイ。

「クロ子やウロ子と違って、シラ子はあたしの造りものじゃないもん。救援信号があつて行つてみたら、あの子がいたの。その時はまだ生まれたてで、こーんなちっちゃかつたっけ。ちゃんと現実にいるワニなのだ」

淡々とした説明が続く。

「でもほらー、あの子アルビノ・アリゲーターだから。もう、いなくなつちやつたんじゃない？」

それだけ言うと、お嬢は三人のあいだを抜けて、すたすたと支店長室へ向かった。

「カイ、お紅茶ちょうだい。はちみつはアカシアでプリーズ。この前みたいにレンゲ入れたら、頭からはちみつぶっかけちゃうから覚悟しなさい」

「ぶっかけるだけならまだしも、お嬢様はそれを熊牧場で実行なさるおつもりですよね？」

くるくると豊かな髪を揺らして歩き去るお嬢を、ぱたぱた足音を鳴らしてカイが追う。二人の後姿はすぐに支店長室へ消えた。

「ケビン・スペイシーの『アルビノ・アリゲーター』という映画を、ご覧になったことはありませんか？」

ファイは閉められた支店長室のドアを眺めやり、何気ない口調で言い出す。

「数万分の一の確率で生まれる白いワニは、敵対する群れに襲われたときに仲間のいけにえにされます。アルビノ・アリゲーターが食

べられているあいだに仲間が逃げたり、反撃したりできますから」

タイジは冷水を浴びせられたように思った。

「シラ子はお嬢と同じ、スケープゴートなんだな。だからペットにして可愛がってたんだな……」

アルビノ・アリゲーターだから通常世界でいけにえにされて、だからこの集合的無意識世界からいなくなったのかもしいれない。お嬢がそういうつもりでいなくなったと言ったのを、カイが理解したとは思えない。だがタイジは、それがシラ子を過失で逃がしてしまったカイが罪悪感を抱かぬように気を遣った言葉のように感じた。

生まれたてから十歳になるまで育てたペット、それも自分と似た境遇のペットがいなくなつて、心配しないわけがないのだ。無駄だ、いなくなつてしまったのだと割り切れるはずがないのだ。

もしかしてシラ子を探さないのはいわゆる代償行動つてやつか、とタイジは思いつく。

本当はスケープゴートでありたくない、けれど立場上そうではないお嬢が、自分の代償としてせめてシラ子には自由であつて欲しくなつたのか。それによつて慰められているのか。

だがそれならば、カイではなく自分の手で自由にやりたかつたはずだ。こんな風に、突然失つたまま終わつたりして納得するもんか。ましてや、いけにえにされてたまるか。

頼むシラ子、食われてないでくれ。俺が行くまで持ちこたえてくれ。タイジはジャングルに飛び込んだ。

live mode . . . break away from pass

「どこだシラ子おお！ 引きのいい人間がここにいるぞ！ 死ぬ気で引いてやるから出てこいオラあ！」

あれから三日。タイジはジャングルの湿地帯をじゃぶじゃぶかき分けながら歩いていた。ヒルに吸われピラニアにかじられ、それでもシラ子を探して歩き続けていた。

シラ子を呼びつつさまようタイジに、メガネカイマンの一群がゆつくりと近づく。タイジはゆらりとそっちへ踏み出した。

「なにがメガネカイマンだ。メガネはカイだけで充分なのよ。カイはカイでもカイマンまでいらねえのよ。シラ子を出せ、シラ子をお！」

タイジの狂気じみた叫びに、カイマンたちは動きを止める。

「ふふふ、見たかファイ。今の俺には猿どころかカイマンも近寄れないわっ。ふははははは」

ばく、というにぶい音とともにタイジは濁った水へと引きずり込まれた。タイジの胴体は牙を持った巨大な口に挟みこまれ、水の中でぐるぐると回転させられた。

こ、これはツイスト。ワニが獲物を気絶させ、その肉を引きちぎる時の習性。タイジはごぼごぼと空気を吐き、上か下かもすでに分からぬ渦に翻弄されながら思う。

カイマンに気を取られているあいだに、背後からワニに食われたらしい。ひよっとしてカイマンが動きを止めたのは俺の気合じゃなくて、このワニの存在だったのか。くそ、いくら精神世界では死なないとはいえ、こんなところで食われてたまるか。シラ子を見つけて出し、連れ戻すまでは。もがきながらも、タイジの意識は遠くへっていく。

ああやっぱ俺は肉体労働に向かないのかもね。下僕は無理なのかもね。どんなに暴れても逃れられない凶暴な牙にあきらめかけたとき、タイジのかすむ目に自分をくわえたワニの姿が映った。

茶色く濁った水の中にも鮮やかな白、いけにえどころか神の使いのように美しいアルビノ・アリゲーター、シラ子の姿が。

「タイジってば、よっぽど引きが悪かったんでしょー。シラ子がわざわざ抗議するみたいに持ち帰ってくるなんて、なさけなーい」

目が覚めると、タイジは秘書室の床に寝かされていた。お嬢、フアイ、カイと打ちそろって覗き込んでいる。ぼんやりしたまま見回すと、少し離れたところにシラ子がいた。すでに鎖が結ばれている。「シラ子……俺を食わなかったのか。連れ帰ってくれたのか……」

「タイジのマズさにウンザリして、捨てにきたんじゃない？」
豊かな胸の上で腕組みして、お嬢は呆れ切ったように首を振る。
タイジはゆるゆるとそっちへ顔を向けた。

「お嬢」

「なあに、ワニの餌にもならないヘタレ役立たず下僕」

「ワニ社会では、アルビノ・アリゲーターはただのいけにえかもしれないが……」

げぼげぼ、と咳き込んで泥水を吐いてから、タイジはかすれる声で言った。

「……俺は、シラ子が好きだ」

怪訝な顔がタイジを見下ろしている。

「なら、鍛えて引きのいいカラダになればー？ そしたら、愛しのシラ子ちゃんにおいしく食べてもらえるしい」

「そうするわ……」

やけに従順なタイジを気味悪がるように首をかしげてから、お嬢は立ち上がった。

「さ、お仕事お仕事。こんなことしてるあいだに、寿命離れのいい客逃してたらどーしょ。カモン、カイ」

そう言い捨てるとお嬢はカイを従え、相変わらずハートのピンクでゴテゴテのバスへさっさと乗り込んでいった。

「ド根性でしたね、タイジさん」

フアイが涼やかにほほ笑んで、タイジの頭をなでなでする。

「これはお嬢さんからのごほうび代行と想って下さい」

「ひとつも嬉しそうな顔してなかったじゃねえか……」

明らかにやられ損だ、せっかくシラ子が帰ってきたのに何だ、あのあっけらかんとした対応は。俺がしたことは見当違いの余計なお世話だったのか　タイジはがっかりしながら肩を落とした。

「そんなはずはアルマーニ。お嬢さん、瀕死のタイジさんそっちのけで、いの一番にシラ子さんへ駆け寄っていたのですから」

下僕が瀕死でも、帰ってきたペットの方が大事か。やっぱり下僕はペット以下か。タイジは報われたんだか報われないんだか分からず、長いため息をついた。

「タイジさん、ミッシヨンコンプリートで寿命一ヶ月ゲットです。

おっつー」

「マジ疲れたわ……ってかおまえ、こうなるの分かっててやったのね」

「では、心得その五……」

「ちったあ休ませろ、鬼畜米英！」

タイジ、現在三ヶ月。借金、十八年七ヶ月・シラ子発見による一ヶ月。彼はノルマを達成して、生まれてくること出来るのか。

…… 1 …… break down from exhaustion . . . 疲れきって倒れる

下僕生活も早二週間。タイジは日課であるワニたちの朝の散歩
その実態はワニたちによる、タイジのジャングル引き回し を
終え、秘書室のカウチに泥まみれで倒れ込んでいた。

「精神世界では不死身なのが、いつそ恨めしくなってきたわ……」

「あのー……大丈夫かい、下僕くん？ 怪我してるじゃないか」

そこへはらはらした声が落ちてくる。タイジはうつ伏せに倒れた
まま、中指を突き立てて見せた。

「明らかに大丈夫じゃない相手に大丈夫かと聞くのって、どうい
う見なわけ。アンタは死体に向かって、大丈夫かい君、死んでるじ
ゃないかーって聞いて回るの？」

「えっ、いや……そんなことはしないが……」

「真面目に答えんじやねーぞボケ」

ようやくズリと起き上がり、タイジはほつれた長髪のあいだか
ら相手をにらむ。よほど鬼気迫っていたのか、男は額に汗してへこ
へこ頭を下げながら一歩後退した。

既製ものらしい地味なスーツが痩せた体から浮いた、三十半ばく
らいのサラリーマン風味。安物であるう薄っぺらなYシャツは、肌
に直接着たら乳首が透けるに違いないとタイジは思った。

「何か用なの」

「わたしは財務課長なんだが……この書類に至急、お嬢様のサイン
が頂きたくて来たんだが」

面倒極まりない口調で突き放すことで、帰れコメツキバッタ。と
言っただつもりが通じずに、タイジはうんざりしながら顎を支店長室

へとしゃくった。

「入りやあいいだろ。ケツ丸出しで寝てるけどね」

「そ、それは困る……下僕くん、サインをもらってきてもらえまいか」

タイジはあくびをしながら、ばりばり後頭部をかく。

「三匹のワニとたわむれてきたばかりの俺に、動けとおっしゃる？」

「君は下僕じゃないか わっ！」

いきなり胸ぐらをつかみあげられて、財務課長は顔を引きつらせた。

「ああ俺は下僕よ。あのクソツタレ脳みそ梅干女の下僕よ。アンタの下僕じゃないのよ。何が悲しくてアンタの命令なんぞ聞かにならんよ、ああん？」

「わ……悪かった。君の境遇は可哀想だと思っているよ」

「同情すんなら寿命をくれ」

「……え？」

鼻先と鼻先がこすれんばかりに顔を近づけて、タイジは凄む。

「二週間経ったのに、俺まだ借金を三ヶ月しか返してないの。このペースじゃ生まれられないんだよね。寿命三日分ほど頂きまひよか、財務課長さん。そしたらお嬢にサインもらってきてやるっじゃないの」

「そんな、横暴な……」

「ワニども、最近運動不足らしいんだわ。あいつら連れて財務課に散歩に行ってもいい？」

「分かった、分かったからやめてくれ！」

こうしてタイジは、財務課長からせしめた寿命三日分の小切手と託された書類を持って、支店長室へと入る。タイジの予言通り、というかいつも通り、お嬢はピンクの下着にブラウスをはおっただけの姿で情眠をむさぼっていた。

タイジは天蓋付きキングサイズベッドのふちに足をかけ、ゆっさゆっさと乱暴に揺する。お嬢に触れることは許されていないため、起こすにはこうするしかないのだ。

「いっそどさくさにまぎれて落としたりするか。壊れたテレビも殴れば直るし、とタイジは本気で思う。」

「起きろ支店長！ 財務課長とかいうのが、サイン欲しいってよ」

「あーん、財務課長ってばあたしの隠れファンだったのねー。あのムツリスケベ」

寒い。熱帯だというのにあまりにも寒い。高原の、いや雪山の風が吹いている。遠い目をするタイジの視界には、雪のキリマンジャロが広がっていた。

即刻回れ右したくなったタイジをどうにかそこに留めているのは、寿命三日分の小切手に対するわずかな忠誠心だ。成り行きの十八年七ヶ月より、自分で稼いだ三日にタイジは服従することにした。

「そのサインちゃうわ、うぬばれんな。仕事だよ仕事！」

キリマンジャロから戻ってきたタイジは、いっそう激しくマットレスに蹴りを入れる。お嬢は唸って、豊かな肢体をタイジの反対側へと転じた。

「シヤラップ、ベイビーちゃん……」

「おい財務課長、カメラ持って来い。支店長のありえねえ写真撮ってやる」

「やーんもう、タイジのおばかー！」

…… 2 …… break the hush . . . 沈黙を
破る

突如、サイレンが鳴り響いた。財務課長からの臨時収入をアテにして豪華に海老天井をかき込んでいたタイジは、慌てて社員食堂から秘書室へ駆け戻る。お嬢が社内放送のマイクを握っていた。やけに張り切っている。

『全社員に告ぐです。わが社は今から緊急討伐態勢に入ります。有志は戦闘服着用・武器携帯の上、追撃するです』

戦争でも始まんのかオイ。まさか神様派兵の天使連合軍と……お嬢に連行されるのはここまでで十分だ、地獄の道連れは御免こうむる。いや今でも待遇は似たようなもんだが　タイジはロッカーをあさっていたカイをつかまえる。

「何がろっしひゃっはの」

「タイジさんつてば、食べながら歩いちゃいけないんだよ。ほらー、天つゆがシャツに……」

『ターゲットは財務課長！　寿命三十年を業務上横領、ジャングルを大逃亡中』

お嬢の嬉々とした放送が続いている。

なんだ相手は一般人か。財務課長か。それなら　え？　タイジ

は逆に戦慄を覚えた。

「まさか、社内の違反者を社員が狩るのか……？　財務課長つて、今朝来たあの気弱な男か？」

「そうそう。タイジさんもやる？　戦闘服あるよ」

と言つてカイがロッカーから出したのは、フードつきの黒いマン
ト。

「武器はこれだよー」

と言つてカイがロッカーから出したのは、身の丈ほどもある鎌。

「少年。これはどう見ても、死神のいでたちだと思っただが……」

いそいそと子供用黒マントを着込みつつ、カイは当然そうにうな
ずいた。

「寿命の横領は重罪で、ブレイク口座の全寿命没収なんだよ。つまり本来の寿命がもう尽きてる人の場合、捕獲と同時にポックリ。た

またまそれを目撃した部外者が、討伐隊を死神なんて名づけたんだよ。悪いのは犯人なのにさあ」

鎌を持つと、カイはまるでハロウィーンの仮装をした子供のようにだった。が、これはお祭りではなく人の命がかかった実戦なのだ。

「タイジさんは行かないの？」

「俺、肉体労働派じゃないの。まだ天井食い切ってねーし」

目下、タイジの心は海老のしっぽで一杯だった。そこへお嬢の社内放送。

『懸賞金は寿命半年分でーす』

「それを早く言えっつーの」

即座に井を放り出し、タイジはマントと鎌を引つつかんで走り出した。

『ジャングルC地区にて目撃情報あり。ニシキヘビ棲息地域につき、注意されたし』

などと放送が流れれば尻込むのが普通だ。肉体を持ち、のほほんと生活している者ならば。

しかしここは普遍的無意識の精神世界。ニシキヘビに締められようと呑まれようと、現実に死ぬことはない。しかも悩み事相談所員・ブレイカーは、命に飢えた者ばかり。黒マントの戦闘服をなびかせ鎌を振り上げ、我先にC地区へとなだれ込んでいく。

「カイ、おまえ心臓はどうしたのよ」

心臓移植のドナーを待ちつつ支店長秘書をつとめるカイは、タイジに過酷な労働を言いつけるたびに自分は心臓を理由に言い逃れするのだ。タイジとしては、嫌味のひとつも言いたくなる。

「今日は絶好調ー」

丸眼鏡を双眼鏡に押し付けて獲物を探索しながら、カイは答えた。「クソガキ。しかし、何だって財務課長は横領なんかしたんだ？

ここの社員なら、横領して捕まったら即死なことくらい承知してん

だろうが」

「奥さんの容態がいよいよ危なくなってきた、夜もおちおち眠れなかったらしいよ。寝なかつたらこの集合的無意識世界に来て、奥さんの寿命を稼ぐために働くこともできないじゃん。寿命残高がどんどん少なくなつて焦つたんだよ」

あつけらかんとシビアな話をするカイに、タイジは目を丸くする。「そういう事情知つてて積極的に狩りに出るのか、おまえは」
タイジは思わず口をつぐむ。双眼鏡から顔を上げたカイの表情は、異様なほど冷静だった。

「タイジさん。ボクらが扱つてるのは、お金じゃないんだよ。命だよ。ブレイカーはみんな、客つていう他人から命を削り取つても生きようとしてるんだよ。客にだつてそれぞれ事情があるの、分かりきつてるのにさ」

それと財務課長狩りとは何も変わらないよ、とカイは続けた。

「タイジさんは、まだ生まれてないから。死んで別れたくない大事な人がいないから、そんなこと言えるんだ。けど、ボクは……ボクだけじゃないよ、ブレイカーたちはみんな……」

カイの唇がぎゅっと結ばれる。タイジは急いで、カイの頭をなで回した。

「悪かつた。そうだよな。おまえらには生きのびたい理由があるんだもん」

こくんとうなずいてから、カイは手の甲で頬の辺りを拭っている。「成り行きでここにいて俺とは違うんだよな」

もしかして今朝、駄賃に寿命三日分を巻き上げた俺が財務課長を追い詰めちまつたのか。なら、やつを追うのはカイや生きのびる強力な動機を持つブレイカーに譲つて、俺は引つ込むか　タイジがそう考えていると、カイが憤然として言い足した。

「それにさ、ブレイクはお嬢様の犠牲の上に成り立ってるんだよ。それを忘れて一人で寿命を好き勝手しようなんて、お嬢様に対する裏切りだよ。ひどいよっ」

そつだ、お嬢は寿命を取り引きできる代償に、触れた相手の感覚、記憶、感情を流し込まれてしまう宿命を負わされてる。ブレイカーの身代わりにそれを背負ってんのに、財務課長はお嬢にそれを押し付けたまま逃げようとしている　鎌を握るタイジの手に、ぎゅつと力がこもった。

「狩るぞカイ、恐怖政治だ。神に見放されたブレイカーのオアシスを踏みにじるやつには、死の制裁を」

「ラジャー！」

…… 3 …… b r e a k i n . . . 侵入する

「ついで来てるか、カイ……ん？」

振り返ったタイジの視界に、すでにカイはいなかった。どうやら、財務課長を追い詰めているあいだに振り切ってしまったらしい。戻ろうか迷ったタイジだったが、前方でぱきりと枝を踏みしめる音がして、そつちへと走り出す。

「あん？ この小道は……」

急に現れた大理石の小道に、タイジは見覚えがあった。支店長室の、お嬢のベッドへ続く道。どうやらジャングル経由で支店長室へ戻ってきたらしかった。

「この忙しい時に金……じゃない、寿命にもならないこと言いつけられたら、かなわねえな」

と、タイジは下僕にあるまじきことを呟く。

財務課長が、敵の本陣である支店長室に逃げ込むわけがない。それこそ飛んで火に入る夏の虫。そろりと迂回しようとしたタイジの耳に、悲鳴が飛び込んできた。

「お嬢？」

一瞬固まっただけから、タイジは小道を走り出した。林を抜けると、見慣れたキングサイズベッド。そこから引きずりおろされたかのようになりにへたり込むお嬢、そして財務課長。

「どうしてなんだ。どうしてあいつが死ななきゃならない？ どうして俺がこんな思いをしなきゃならない？ 不公平だろう！ 世の中、何の苦労もしなくたって長生きするやつらがいるってのに」
財務課長がタイジに気づき、言葉を切る。

今朝まで気弱なサラリーマンにすぎなかったその目は絶望的に血走り、髪はぐしゃぐしゃだった。逃亡の途中に脱いだのか脱げたのか、財務課長はTシャツ一枚に泥まみれのズボンでお嬢の両腕をつかんでる。

「俺は知ってるぞ。支店長はこの下僕に十八年も寿命を貸してやってんだろ。下僕に貸してやれるなら、財務課長の俺が少しくらいもらったっていいだろう。答える、支店長！ あいつに寿命やつてくれよ。頼むよ……」

お嬢は財務課長を見上げて大きく目を見開き、唇を震わせたまま硬直していた。蒼白なその顔に張り付いているのが圧倒的な恐怖と衝撃なのに気づくと、タイジは力まかせに財務課長を蹴り飛ばした。「ここにいやがったか、虫ケラめがあ！」

財務課長が吹っ飛ぶ。タイジはお嬢の前にひざをつき、凍り付いている瞳を覗き込んだ。

「しっかりしろ、お嬢」

「さわらないで！」

瞬間的にお嬢は身を引く。ベッドのふちが背にぶつかると、それに沿ってさらにずるずると後退する。

「さわらないで、さわらないで、さわらないで……」

立ち上がるうとしても、お嬢の脚は言うことをきかないようだった。

生まれたての小鹿か、アンタは 何度も腰を抜かすお嬢に、タイジは両手を挙げて触らない意志を示した。

「何を好き好んで、俺がアンタに触らなきゃならんよ。初めて会った時に言つたら、チェンジさせるって。それよか、こいつどうすんの？ 支店長の指示は？」

へたり込んだまま喉元のブラウスをぎゅっとつかんで、お嬢は何度も息をついた。タイジの言葉が少しずつ耳に入っていたのか、ゆっくりにらみあげる。

「この鎌でサクツと成敗しちゃっていいのか？」

「……虫ケラ未満の下僕が、虫ケラを裁けると思ってたの」「あ、やっぱそうなのね……」

お嬢はタイジの手から大鎌を受け取り、それにすがるようにして立ち上がった。胸を一段とふくらませて大きく深呼吸する。床に倒れ込んでいた財務課長に、鎌をズイと突きつけた。

その瞳にいつも不遜さが戻ってきているのを確かめて、タイジは内心胸をなでおろす。

「財務課長、君は永久追放。ブレイクで稼いだ寿命はゼーんぶ没収。奥さんは今夜が峠になるんじゃない。君が不公平だと文句を言った神様にでも、慈悲をお願いしてみたら」

：：：： 4 : : : : break the faith inte
n t i o n a l l y . . . わざと約束を破る

「支店長に用事？ 入れば。ケツむき出しで寝てるけどな」

夜、新たに財務課長に就任したブレイカーが支店長室を訪ねてきた。が、タイジの答えを聞くと困りきつてもじもじする。

「呼んで来てはもらえないかな？ ごあいさつしたいのだが」

「寿命三日分くれんなら考えてやってもいい。コメツキバッタの小

切手、不渡りになっちゃったのよ。後任のアンタが責任取ってくれない？」

こうしてまんまと新財務課長の小切手をせしめ、タイジは支店長室へ入る。

「支店長、次の財務課長が来てるぞ」

「うるさいのー……」

珍しいことに、お嬢はケツを出していなかった。毛布を頭からかぶって丸まっている。

こりゃこたえてんな。アイツから流れ込んできた感情がよっぽど不快だったのか。前財務課長の絶望や怒りにあてられちまったか

タイジはため息をひとつつくと、勢い良く毛布をひっぺがした。

「やーん、もうー！」

毛布の下ではやっぱりケツを出していた。しかしお嬢はお尻でなく顔を隠す。泣きはらした目をしているのを、鋭い狐目は見逃さなかった。

タイジの手はお嬢に伸ばされかけて、心得という見えない壁に阻まれる。さわんないで、と言った姿が脳裏をよぎった。

「起きてくれよ、お嬢……」

俺に同調して泣いたお嬢だ。もしかしたら、裏切った前財務課長にまで泣いてやったのかもしれない。一寸の虫ケラにも五分の魂、と情けをかけたのか。いやいや、いくらなんでもそれはアホすぎる。アホすぎると思うが、こいつのアホは底なしだし　ずかずかとベッドに上がると、タイジはいきなりお嬢の胸をわしづかみした。

「起きろお嬢、搾乳すんぞコラあ！」

「きゃーっ！　なあにこの、エロ下僕ーっ！」

「アフロにされたの、タイジさん。バカだねー」

黒こげで支店長室から蹴り出され床に倒れたタイジに、カイがもの珍しそうな視線を向ける。

「もつと大局的な見地をお願いしたい。お嬢が雷を落とせるなんて聞いてなかったわ。仕置き代行するおまえもファイもいねえから、制裁できまいとタ力をくくった俺もアホだったが……」

「お嬢様はこの世界では神様みたいなもんだよ」

カイはしぼったタオルでタイジの顔からすすを拭き落としながら呆れる。

「だったら、財務課長にもさっさと雷落とせばよかったじゃねーか……」

「だからー。お嬢様はわざわざ、寿命半年を稼ぐチャンスをみんなにあげてるんだよ」

狩猟の指揮を楽しんでるようにしか見えなかったけどな 悪態をつき、ぶすぶす煙をあげているシャツを脱ぎ捨てる。タイジは、カイがふと神妙な顔をしたのに気づいた。

「あのう、タイジさん……ごめんなさい。ボク、悪いこと言っちゃった」

「なんだ？」

「タイジさんだって、生きたくってここにいるのに」

しゅんとしおれているカイ。タイジは二、三回瞬きしたあと、壊れそうな心臓が眠る小さな胸に軽く拳を当てた。

「懸賞寿命、山分けしような」

えっ、とカイは弾かれたように顔を上げる。

「おまえと二人であそこまで追い込んだらーが。いらねえとか言ったらおまえ、ケツの穴から手突つ込んで奥歯ガタガタ……」

「えーっ、腸って何メートルもあるんだよ、知らないの？ 物理的に無理じゃん」

寒い。またしても寒い。支店長も支店長なら、秘書も秘書だ。こいつらなら地球の温暖化に対抗できるかもしれない。地球に優しい天然素材とでも銘打って、地球サミットに送りつけてやるうか。匿名の返品不可で、もちろん送料は受取人払いだ タイジがみみっちいことを考えていると、ばったんと支店長室のドアが開いて、お

嬢が姿を見せた。

「カイ、出かけるよー！ バス回させて」

お嬢はアフロのままのタイジと目が合うと、思いつき顔をしかめた。

「もう。ファイみたいにスマートに立ち回ろって気がないんじゃないーい？ タイジは」

「すいませんね」

「開き直ってるしい。ほんっと下僕のくせして、生意気だったら」

ぼかんとしてタイジとお嬢のやり取りを眺めていたカイが、ぼんやり呟く。

「お嬢様、落ち込んでたんじゃないんですか？」

「なあに、それ」

今度はお嬢がぼかんとし返す。大した役者かもしれない、この女とタイジは密かに舌を巻く。

「バースー」

せっかちなピンヒールがとんとんと床を叩いて、いらだちを表明する。はい、とカイは慌てて走っていった。お嬢はタイジの向かいに腰を下ろして、あふうと大きなあくびをする。

「お嬢。財務課長捕獲の懸賞金、カイと山分けするわ」

あくびしている口に手を当てた格好のまま、お嬢はぱちくりした。

「君、山分けしてる場合？ 借金返す気あるのかなあ」

「う……」

このペースでは到底、期日までに返済できそうにない。うめいて顔を背けてから、そういえば、とタイジは思い当たる。

十八年七ヶ月の借金は、タイジに貸し出された寿命分だけだ。あの時、お嬢は五割増しで請求するとか言わなかったか。ファイも、お嬢は寿命ハンターだとか評してなかったか。このままだとお嬢の取り分はゼロだ。全くもうけになってないじゃないか。そう不審がるタイジのまじまじとした視線を見つけると、お嬢はもう一度顔

をしかめた。

「タイジ。今度触つたら去勢して宦官にしちゃうから、覚悟しなさい」

「安心しろ。乳が出ないのはもう確認した」

次の瞬間、ピンクのピンヒールがタイジの眉間にめり込んだ。

タイジ、現在三ヶ月。借金、十八年七ヶ月。返済、もろもろ三ヶ月+違反者狩りによる三ヶ月。彼はノルマを達成して、生まれてくることができるのか。

…… 1 …… break a tie . . . 均衡を破る

俺はお嬢を過大評価していたのではあるまいか。過大どころか妄想。歪曲。JAROに訴えられそうなくらいに 立ちほだかる巨漢にファイティングポーズを取りながら、タイジは自分をこの状況に追い込んだ張本人のことを考えた。

お嬢が宿命に一人健気に耐えながらアホ面かぶってるなんて、俺の誤解もはなはだしかった。本当のアホでなけりゃ、こんなこと思いつくか。

やっぱりあいつは脳が梅干、いやいや梅干の天神様程度にしかないガキだ。恐らくその種もカップピカピに乾いてて、そこから毒素が漏れ出している。だからあいつはアーパーなのだ。いつかきつとその毒が全身に回って死んじまうに違いない。

「アミグダリン、青酸配糖体。成人の場合、青梅を一日に三百個などの大量摂取をしなければ致死量には至りません」

ならば三百個以上に相当する強力な天神様なのだ。お嬢の頭を両手でつかんで揺さぶったら、カラカラとさぞ小気味いい音がするだろう。

「心得その一、お嬢さんに触れてはいけないと言ったでしょう、タイジさん」

「はっ、遅いぜ。こないだ胸をもんでやった……あん？」
「ばちこーん。」

一人の世界から引き戻されたタイジは、その瞬間に直立時体高三メートル、体重六百キロを超えるヒグマの平手を浴びた。

「試合中に選手の集中を乱すなんてアリなの？ アンタ審判でしょ、審判。がつぺむかつく」

ファイに対するタイジの文句や抗議は、死語でないと聞いてももらえない。とっさにも死語がすんなり出てくるようになってきた自己嫌悪に軽く浸りつつ、タイジは吠えた。

「結局南極ぶつちぎりで優勝したのですから、いいではありませんか。お置ききですよ、集中というよりは不届きなことを考えていたように見受けられましたので」

ああ、梅干な お嬢主催イベント『君こそ金太郎』、すなわち対ヒグマ相撲で最長土俵滞在時間を記録、優勝したタイジはふくれ上がった頬に氷を当ててくれたファイをにらんだ。プラチナブロンドにグリーンアイズのファイは容貌の色素同様、涼やかに素知らぬ顔だ。

「こちらが優勝賞金の寿命半年分の小切手と、副賞の金太郎前掛けとなっております。百パーセントシルクですよ、いかがですかこの手触り。ルーマングム」

「ダイヤモンド製だろうと、断固いらん。いらねえ賞品作るなんて寿命の無駄遣いだ、もつたいたい」

「もつたいたいと言いながらジャンルに捨てるほうが、よほどもつたいたいオバケです」

集合的無意識世界の二画で運営されている悩み事解決所・ブレイクにおいて、通貨は寿命のみなのだ。うな井一丁寿命一時間分、といった具合である。ダイヤも金塊もアクセサリ以外の意味を持たない。

しかも前掛けには、に「金」でなく、「命」と刺繍されていた命を取り引きするブレイクらしいその賞品はすでに、赤い色に興奮した猿たちにもみくちやにされている。

「それにしても、寿命がかかるタイジさんは強いですね。銭ゲバと言いましょか、カネゴンと言いましょか」

「ぶっ、こちら毎朝のワニの散歩で反射神経が養われてんだ。動

物相手でもケンカ上等、赤テープよ」

おつとまずい、ファイの顔見てると通常会話でも死語が出てきまう。これほど習得しても嬉しくない知識つても珍しいもんだ。そう考えて眉をひそめたタイジに気づいたのか、ファイは日焼けした顔を傾けて朗らかにほほ笑んだ。

「タイジさんがいらしてからというもの支店長主催イベントが急に増えて、楽しませて頂いてますよ。死語のスパーリングパートナーもできましたし」

「はつきりさせとく、どっちも仕方なくやってんの。心では泣いてんの。お嬢は賞金目当てで死に物狂いのブザマな俺の姿を、指差して笑いたいんだろ……」

実際笑い転げていた姿が、ヒグマに殴られお岩状態だったタイジの狭い視界にも映っていたのだ。

だがイベントは好都合だ。ブレイクに就職して一ヶ月。今回の賞金でトータル、寿命一年半の借金を返済できることになる。契約では七ヶ月間で十八年七ヶ月を返済せねばならない。単純計算だと一ヶ月あたり寿命二年以上の返済になるが、出だしとしてはこんなもんよ。寿命半年分の小切手をポケットにねじ込み、タイジは満足してうなずいた。

「お、カイ」

支店長秘書室の入口に、いつの間にかカイが立っていた。タイジはにんまりする。お嬢と並んでタイジの死活劇を手を叩いて喜び笑うガキが、ヒグマ対決を見逃して今頃やって来たのだ。

しかし、タイジの笑顔はすぐに引込む。カイは血の気のない顔をして、震えながら立ち尽くしていた。

…… 2 …… break the link …… つなが

りを断つ

「心臓の提供者が現れて、緊急手術で、さっき麻酔かけられたところで……」

肉体を伴った通常の生活において、カイは心臓の持病を抱えている。ドナーを待つあいだに寿命が尽きそうだったカイを、お嬢が付き人に拾ったのだ。そのカイにとうとう心臓移植手術が行われるらしい。

タイジは心の中で姿勢を正す。その横で心身ともに常に姿勢の正しいファイが、立ちっぱなしだったカイをソファにそっと座らせた。「そっか、向こうでは手術室なんだな」

カイの視点はかたくなに手元に落とされ、頬は緊張に白くなっている。タイジはそれをペチペチ叩いた。

「がんばれよ、カイ」

答えずに、カイは無言でうなずいた。そこへ、支店長室のドアがガチャリと開く。

「おっはよー、エブリバディ。今日も元気に、お客の寿命をぼったくろー。バス回してっ」

空気読め。というタイジの壮絶なにらみで、ようやくお嬢は秘書たちと下僕の異変に気づいたようだ。

「なあに、暗ーい顔して。誰かのお葬式？」

冗談つてのは時に、致命的に残酷だよな　ため息をつきつつ、タイジはカイの手術について説明する。が、お嬢はふうんと唇を突き出しただけだった。

「あっそ。じゃあカイの代わりにタイジ、バスに乗って。いないよリマシってこと、そろそろ証明して」

「おい待てよ、お嬢！　カイに何か……」

背を向けたお嬢の肩をつかもうとしたタイジの腕に、すかさず竹定規が打たれる。定規でタイジの腕を押さえ込んで、ファイは静か

に首を振った。

お嬢に触らないこと。お嬢に逆らわないこと。お嬢の心を乱さないこと。秘書および下僕の心得を思い出し、タイジは迷う。

「ごめんね、タイジさん。いいんだ。あっちの事情はこっちに持ち込まないのが、ブレイクの暗黙のルールだから。ボクがいけないんだ……」

命に関わる事情を抱えて寿命を稼ぎに来る、悩み事相談所員・ブレイカーたち。おのおのの事情を気にしだしたら、報酬に客から命を削り取るこのシステムに罪悪感を持つようになり、業務を果たせなくなる。寿命を稼げなくなって自分の首を絞める。

そうして自滅することが分かっている者たちは、通常生活の事情を決して話そうとも、聞こうともしないのだ。

「それがどうした。俺の事情なんか、社内中に知れ渡ってるぞ。君に授乳してあげたい」なんて手紙が届くくらいだ」

「里親の名乗りですか。おめでとうございます」

「めでたかったかもね。五十過ぎのオカマブレイカーじゃなけりや」
「苦虫をじゃりじゃりかみしめるタイジに向けて、ファイは心外そうに目を丸くする。」

「タイジさん。大切なのは愛ですよ」

「生まれる前だけで十分なの、非凡な人生は」

「おそーい、その下僕！」

遠くからお嬢に呼ばれ、タイジは行くかためらった。が、ファイとカイ、新旧の支店長秘書に強くうなずかれ、渋々お嬢のバスに乗り込んだ。

「カイの手術が成功したら、君を秘書に格上げするから」
ナビ代わりである救援信号レーダーの画面を見ながら、お嬢はさりと言った。

「早く人間になりたいでしょー？」

「いや人間だから、すでに。じゃなくて、どういうことだよ。カイは？」

「解雇」

あまりのあっさり加減に、タイジは啞然とする。

「だって、ここで寿命稼がなくなってもよくなるじゃない？ 喜びたまえ、秘書なら下僕と違って給料も出るんだから」

棚ボタな話らしい、と頭では理解していた。しかしタイジはすつきりしない。

「あー、そりやどうも……けど、カイの意向は」

「あのね。十八歳未満でブレイカーとして採用できないのに、寿命を欲しがってる子は星の数ほどいるの。あたしの一存で雇える秘書も下僕も、今で精一杯」

タイジに十八年七ヶ月を貸し付けたことに対する社内の不満があることは、タイジも知っていた。前財務課長が横領を働いた際、はつきりと不平を口にしていたほどだ。

「だけど可愛がってんだろ……」

お嬢は両手を腰に当てて振り向いた。呆れきった顔をしている。

「カイは何人目の秘書だと思ってるのー？ 二十二番目。数字で言えば二十一の次」

「いや、数の数え方くらい俺も知ってるし、大体それって何の説明にもなってるな……」

「おだまり、下僕。ちよつとくらい人間語がわかるからって」

だから人間だからすでに タイジのささやかな抗議を、お嬢は冷たい目でさえぎった。

「組織の歯車はいくらでも替えがきく。っていうか、組織はそうじやなきゃいけないのー。それに寿命を需要のない人間に供給するよりは、需要のある人間に供給する方が社会的に合理性があるんじゃないー」

お嬢の言っている理論は分かる。だが……くそっ、梅干脳みそに言い返せないなんて、俺は梅干以下か？ カリカリ小梅ちゃんか？

お嬢の態度は何か違う気がするのに　どろりとした気分の悪さばかりが、タイジを支配した。

…… 3 …… b r e a k i n t o t e a r s . . . わ
つと泣き出す

翌日。お嬢とタイジの乗ったバスが戻ると、カイが駆け寄ってきた。ドアが開くのを待ちきれずに足をばたばたさせている。その興奮した様子、そしてそもそもカイが無事にそこにいるという事実は、報告の前にその内容を語っていた。

「手術、うまくいったって！　今んとこ、経過も順調だって」

「そっか。見かけによらずしぶといからな、おまえ」

タイジはカイをヘッドロックして締め上げる。痛いよー、と笑いながらはしゃいでいたカイは、ステップを降りてきたお嬢を見ると慌ててタイジの腕をすり抜けた。

「あの、お嬢様。あのっ」

どもっているカイに、お嬢は花の咲いたような笑顔を向けた。

「おめでとー、カイ。がんばったね」

「……うっ」

とたんにカイは喉をひくつかせた。丸眼鏡の向こうに涙が盛り上がる。

「こっ、これもお嬢様のおか、おっ、おか、おかげで……くひっ」

「んもー。男の子が泣かないのー」

「お嬢、それジェンダー差別」

人間語はおるか、社会学まで解する下僕に気味悪そうに眉を寄せたから、お嬢はカイに命令した。

「タイジに仕事を引き継いでおきなさい。カイには今週いっぱい
で辞めてもらっちゃう」

お嬢の言葉は、絶対零度の強力さでカイの涙を凍らせた。

「でも、ボク……」

「もうここにいる必要ないもんねー」

ふざけているようなお嬢の口調が、カイの台詞を摘んでしまう。

「タイジさんの調教もまだ……」

「ファイがいるもーん」

「けど、けど」

食い下がるカイの肩に置かれたのは、いつの間にか背後にいたファイの手。お嬢さんに逆らわないこと。無言の圧力を感じたのか、カイはぼう然としてお嬢を見上げた。その横顔がタイジの胸に亀裂を走らせる。

「おまえは納得してんのか、ファイ」

珍しくファイは笑っていない。それだけで、ファイの表情は恐ろしく冷たく見えた。

「お嬢さんは、一人でも多くの子供に寿命を手にするチャンスを与えたいだけです。カイだって、それは分かっているはずですよ」

カイは黙ってうつむく。

「ブレイクは仲良しクラブでも、お遊びサークルでもありません。まして、ボランテニア団体でもありません。個人の感情が介在する余地はないんです」

感情が消えたような碧眼は、タイジからカイへと転じた。

「それに、これはカイのためでもあります。命を稼ぐ必要のない人間は、ここではねたまれ、疎まれるだけです。カイがここにいる必要はありません」

「でもっ」

悲愴に叫んで、カイは一步を踏み出す。はずみで、その肩からフ

アイの手が外れた。タイジは腰巾着ひよわ少年の思わぬ反抗に驚く。「でも、ここじゃなきゃお嬢様にもファイさんにも会えない。あっちじゃ会えないもん！ そんなのやだよ……お給料は全部、寿命基金に寄付しますからー！」

モシモシ、俺を忘れちゃいませんか。とタイジは目で訴えてみたが、忘れられた下僕は忘れられたままだった。そうか虫ケラ未満でも人間じゃなくても、存在を認めてもらえるだけ幸せなんだなと、タイジはレベルの低い悟りを開く。

「お嬢さんを困らせるものじゃありませんよ、カイ」
「うわーん」

号泣を始めたカイの肩にもう一度手を置いて、ファイが優しく諭している。

「ここはわたしが引き受けます。お嬢さんはお部屋へ」
ひらんと手を振って、お嬢は黙って支店長室へ歩き出す。待てよ、と言おうとしたタイジの視界の隅にファイが竹定規を握るのが映った。

お嬢に逆らわないこと 知るか、くそつたれ。ガキを泣かしておいて、偉そうに命の取り引きだと？ お嬢は頭のネジがゆるいんじゃないのか。脳みそ梅干女のくせに社会的合理性だの需要と供給だの、そんなごもつともな理屈を並べ立てるなんぞ似合わないにも程があるわっ タイジは、お嬢の前に立ちほだかった。

…… 4 …… break over . . . 防御線突破

「ボランティアじゃないんなら、どうして俺の借金に自分の取り分を加えなかった？」

タイジの寿命の借金十八年七ヶ月は、お嬢が貸し出した元本のみにすぎない。利子としてお嬢が得るものは、反抗的な下僕以外何もない。秘書に寿命ハンターと評されたお嬢らしからぬ契約なのだ。

「事情を聞かないのがルール、そのためにお嬢が他人との接触をシヤットアウトしてんなら、どうしてカイを雇った？ どうして俺を雇った？ 思いつきり事情に肩入れしてるからだろう。矛盾してんだよ、アンタ」

暴言に対して繰り返されたファイの竹定規を、タイジは研ぎ澄まされた反射神経でかいくぐった。何度もよけられて、ファイは驚きを隠せずにいる。

タイジは、唇を引き結んでいるお嬢の鼻先に指を突きつけた。お嬢はそれをにらみ返してくる。

「タイジ、今度触ったら去勢して宦官にするって」

「宮刑上等、宦官上等。けどな、権力目当てに志願してチヨッキンしちゃうやつもいたのよ。皇帝や後宮をアゴで使いたくてな」

下ネタは苦手だ、と言いたげにファイが肩をすくめて一歩下がる。「この世界の皇帝であるアンタが俺の話聞くようになるんなら、喜んで去勢されようじゃないの。どうせ肉体の実在しない精神世界なんだからさ。いいか、そのつもりで聞けよ。アンタは卑怯だ」

お嬢の返事を待たず、タイジはたたみかける。

「シラ子の時と同じなんだろ。解雇したことにする方が、あきらめつくからだろ。それを合理性とか寿命に困ったやつがとか話をすりかえやがって、こざかしいわ。寒気するわ。チキンスキンスタンダッブよ」

「タイジさんってばファイさんに汚染されて、お嬢様にまで死語を使ってる……」

「がびーん。汚染とは何ですか、せめて影響とか触発と表現して下さい」

タイジの興奮ぶりに涙も止まったらしいカイト、すでに見物モードのファイがのんびりしゃべっている。

「確かに、カイにはここにいない必要がない。でも動機も覚悟もあんだろ。拒否されて泣かされて、それでもアンタを慕ってるカイを切るのか。秘書が変わるたびそんなこと繰り返すのは真性のバカだけだぞ、ドアホウ」

「説明しておきますとね、カイ。タイジさんの中では、バカとアホは違うんですよ」

「なんか、聞いているボクたちの方が照れてきますよね」

ブラウンの瞳のふちに殺気と涙がたまるのを、タイジは横柄極まらない態度で見下ろした。

「カイを解雇するなら、後任には別の誰かを雇え。俺はカイの代わりになる気はない。俺は頭ユルユルなお嬢の下僕として雇われたんであって、高慢ちきなロボット支店長の下僕になつたわけじゃ」

「ばちこーん。」

一人鼻息荒く語っていたタイジの頬に、思いつきり平手が打ち込まれた。

ひっぱたいてから、平手の主・お嬢はびつくりした顔をして自分の頬を押さえる。

平手の瞬間に痛覚を共有したからか。いや、みずから他人に触れたことに自分で驚いているのか。ヒグマよりよっぽど強烈な一発に腰を抜かしながら、タイジも驚愕してお嬢を見上げた。

その視線と視線がぶつかる、お嬢は怒る場面だったことを思い出したようだ。かげろうが立ちそうなくらい、肩からお怒りオーラを沸かします。

「下僕の分際で、平気で言いたいこと言っ……信じらんない。これじゃ何のために触るなって言ってるのかわかんない」

お嬢は眉間をふるふるさせて、低く唸る。

「タイジなんて大っ嫌い。カイには残ってもらいます。タイジなんて絶対ぜーったい、秘書なんかにしてやんない。そんなに下僕でい

たいなら下僕でいさせてあげる。すりきれるまで、うっん、すりきれてもこきつかってあげる」

「いや、下僕でいたいってわけじゃ……」

「それにね、報酬を上乗せするのは忘れてただけ。ヒグマ相撲の賞金、ゼーんぶもらうから」

「うえええっ？」

半年分が。ヒグマ相手にもぎとった寿命半年分が　タイジは返済済み寿命の数字が一年半から一年へ減る、チャリーンという軽薄な音が聞こえた気がした。

「それでも足んない。来週の全社員総出の討伐演習逃亡犯役として、三日三晩狩られちゃって。それから再来週……」

延々と無体な命令を並べ立ててから、お嬢は足音高く支店長室に戻って行った。ばったーん、と激しくドアの閉まる音がビリビリ空気を震わせた。

「忘れてたなら、そのまま見逃しといて欲しかったわ……」

タイジはうなだれて、ふと、お嬢にはたかれた頬を触ってみる。

渾身の一発は痛かった。けど……悪くなかった。タイジは痛みが引いていくのがもつたいたいように感じながら、そう思った。

お嬢がバカでなくアホを選択した一瞬、支店長でなくお嬢を選んだ一瞬、さわらないでと叫んだはずのお嬢が我を忘れて殴りつけた一瞬。それが見られたのなら、タイジは半年分の寿命も惜しくなかった気がしてくる。

「殻を割って味わう天神様は、毒までまるごと美味だったようですね、タイジさん」

いやにおっとりした声で呼ばれて、タイジはファイの仁王立ちに気づいた。優しい微笑を浮かべているにもかかわらず、その手にはしっかりと竹定規が握られている。

「それにしましても下僕ふせいが、あまりに態度しだったのではありませんか？」

タイジは尻餅のままあとじさる。

「ヤーキーズ」ドッドソンの法則をご存知ですか？ 問題解決への強すぎる、あるいは弱すぎる欲求は成績を低下させます。下僕の正しい業務遂行を喚起するには、そのミジンコな意欲を上昇させる必要があるようですね 体罰で」

「ま、待て。死語で話せば分かる。待つてくれ、今とっさには出てこないだけで……」

「そうはいかの塩辛です。さ、踊って頂きましょうか」

誰か、俺を叩き起こしてくれ。個人表層意識へ引っ張り上げて、このくだらない悪夢から助けだしてくれ タイジの背中は大理石の冷たい壁に阻まれる。

「タイジさん、ありがとー」

喜びいっぱいのカイの声を聞く余裕もなく、タイジは脱兎のごとく走り出す。

くそつ、これもお嬢のせいだ。あいつがバカだから、ついプツンきちまったんだ。ああ今なら死語も出てくるのに、どうも昨日から戦闘中に梅干を嘆いてばかりだ。そう悪態をつきつつ爆走していたタイジの足が、ふとゆるむ。

おかしくないか？ 俺はファイに梅干の話をしたか？ 無意識に口に出しちまってたのか？ それともあいつ、もしかして 振り返ったタイジの視界に、プラチナブロンドをなびかせた爽やかな男ひゅん、と竹定規が空を切る音がした。

「砂にして差し上げます……！」

「ばちこーん……。」

下僕たるもの我が命我が物と思わず、御下命如何にても果たすべし、死して屍拾う者なし 頼への通算三打目の衝撃波とともに、タイジはそう教え込まれたのであった。

タイジ、現在四ヶ月。借金、十八年七ヶ月。返済、もろもろ一年＋ヒグマ相撲優勝による半年・利息半年。彼はノルマを達成して、

生まれてくることが出るのか。

…………… 1 …………… break his heart . . . 失恋
させる

ワニ ラララ 沼の王者ワニ 凶悪ワニも一目置いてる ワニの
女王シラ子さま ヒューヒュー

白く輝くその鱗 カモーン さあひざまずけ さあたてまつれ
ウオウウオウ

「好物をさしあげろ、イエスそれは引きのいい人間！ ……こらシ
ラ子、ほんとに食うな。よせよ、あはははは……おい、何メン
手切ってた、おまえら」

謎の即興を熱唱していたタイジは、アルビノ・アリゲーター、シ
ラ子の牙の間からカイとファイを見上げた。

「……ワニに食べられて喜んでる」

「大切なのは愛ですよ、カイ」

「愛よ、愛」

普段はファイの言葉に懐疑的なタイジだが、今回は悟りきった目
で同意を示した。

「俺が生まれる時にここでの記憶を失くしてもシラ子、おまえのこ
とだけは覚えておくからな。ミシシッピまで探しに行ってやるから
な」

「うわあ、ワニに頼りしてる……」

「ぞっこんラブですね。こうなりますとお嬢さんでなくて、シラ子
さんの下僕と申しませうか」

笑ってシラ子を沼へと送り出してから、タイジは真面目な顔で二
人へ向き直った。

「俺はシラ子に恩義がある。あの広大なジャングルでさまよってい

た俺を、シラ子はここへ連れてきてくれたんだぞ」

「似たような話を知っておりますが、そちらの恩義は三日も経たずにお忘れになったようですね。さて」

「ファイは腕時計を確認する。」

「約束がありますので、わたしはこれでドロンします」

颯爽と歩き去るファイの後姿へ、カイが首をかしげる。

「ファイさんって最近、よくいなくなるんだ。どこ行ってんだろ」「社内恋愛でもしてんじゃねえの?」

興味なさそうにその話題を一蹴したタイジだが、いきなり形相が変わった。沼のほとりで、シラ子が別のアリゲーターとたわむれていたのだ。

「シラ子に近づくな、おんどれあ！ やめてよして触らないで、垢がつくだろ！」

激昂して走り出そうとするタイジを、カイが後ろから慌てて止める。

「タイジさん、シラ子だって仲間とレスリングくらいするって。それに死語使わなくてもいいんだよ、ファイさん相手じゃないんだから」

「そっ……そうか。レスリングか」

怒りの余波でまだヒクついている頬で、タイジは無理に保護者の笑みを作る。

「そうだな、たまにはシラ子も仲間とのスキンシップが必要だな。」

よし、俺はセコンドにつく。カイ、おまえはレフェリーだ」

「ボク、お嬢様にオレンジしぼってあげなきゃ……ぐええ」

オレンジのかわりに、帰ろうとするカイの首がタイジの腕にしぼられた。

「おっしやシラ子、バックマウントだ。ガードされんなよ。ふっ、鉄拳じゃよくアリゲーターをくれてやったものよ。知ってるか、右

ひざの連続技だ」

「実技で教えないでー！」

セコンドがレフェリーに技をかけてもいいものか。そんな疑問にもカイの悲愴な哀願にも気づかず、タイジはセコンド業務に熱中している。

「いいぞシラ子、チョークスリーパーに持ち込め。よおし、そのま
まフィニッシュだああ！」

「やめてよタイジさん、苦しい、苦し……？」

カイは、急にゆるんだタイジの腕から這い出す。固まっているタイジに不思議そうな顔が向けられた。

「タイジさん……？」

「カイ……あれがレスリングじゃなくて交尾に見えるのは、俺だけなの……？」

細い首を伸ばして、カイは沼のほとりを見やった。

「あつ、ほんとだ！ ワニの交尾見るの初めてだよ、ボク」

無邪気に観察しているカイに、タイジがよろよろとすがりつく。

「それに……それによ。ンがついてんのが対戦相手じゃなくてシラ子なのは、俺の目の錯覚よね……？ 頼む錯覚と言って！」

カイは丸眼鏡の位置をしきりに微調整し、しげしげ確認している。

「錯覚じゃないよ。へー、ああやるんだー。すごいな、あそこだけ別の生き物みたい」

「そこなのか少年。驚くのはそこなのか？」

「あれっ、タイジさんが灰になってる……」

…… 2 …… break the ice …… 氷のよう

に冷たい雰囲気をはぐす

「シラ子がオスでもメスでも、どっちでもいいじゃーん」

もつ何度目か分からぬ台詞を、カイは呆れきって繰り返した。とたんに、親の仇だつてこつはにらまれないであろう形相でタイジが詰め寄る。

「よかあないわ！ シラ子のやつ、別の意味でフィニッシュじゃがつて。うつつ。お気に入りのキャバ嬢がいて通つてたら、実はオカマパブだったみてえなもんだぞ！ おまえに分かるか、俺のこの傷心が」

「ぜーんぜん分かんないし、分かんなくつていい」

すでにシラ子オス発覚事件に飽きているらしく、カイはつまらなそうに足をぶらぶらさせている。

「ひどいつ。この世に正義はないのかつ」

タイジは長髪を振り乱して嘆く。

「正義が問われる場面じゃないと思うんだけど」

「当たり前だ。俺が問いたいのは性別だ」

「ボク、錯乱してる人見るのも初めてだなー」

そこへ革靴の足音も軽やかに規則正しく、ファイが秘書室へ戻ってきた。

「お客様ですよ、カイ、タイジさん。こちら監査室のエリトさん」

髪をきっちり撫でつけ、嫌味なほど隙なくスーツを着込んだエリートサラリーマン風男性が二人を見下ろす。ファイなら『舶来物の三つ揃えをお召しのヤンエグ』などと形容しそうだ。が、タイジの視界には、ろくろくその姿は映つていなかった。

「君がお嬢様の下僕とかいう男か」

エリトはかき乱しすぎてぼさぼさの頭のまま呆けているタイジに、汚いものでも見るかの目を向けている。

「全くお嬢様にも困つたものだ、我々への相談も報告もなく勝手に採用したりして」

「ああシラ子、気温があと少し高ければ。ワニは卵が孵化する時の

気温で性別が決まるのに。三十一度より寒いとオスばかり、高いとメスばかりになるんだぞ。暑ければおまえはメスで生まれたのに…

…」

一瞬の沈黙。

「何なんだね、この男は」

「下僕です」

カイは生真面目に答えたが、それがエリト氏の神経を逆なでしたようだ。こめかみがピクツと波打つ。

「意識が冥王星にワープしてしまっているようですね。大目に見てやって下さい。お嬢さんでなくシラ子さんの、いえいえ恋の奴隷ですの」

「……ふざけているのか、君たちは」

はつきりと不快そうなエリト氏に、いいえ、とファイは一流コンシエルジエのように優雅な業務用スマイルで答える。実際ファイは事実を述べただけなのだが、その余裕がエリトにはしゃくに障るようだ。こめかみの波が荒立ってきた。

「何かお飲みになりますか？ ヒーコー、レーコー、レスカと純喫茶並みに揃っておりますが」

「わたしをバカにするのもいい加減にしたまえ」

とんでもハツブン、とまたしても端正な笑顔を崩さぬファイ。カイは確信犯を見る目つきで先代を見やった。

「お嬢様にお会いしたいのだが」

仮眠してらっしゃいます、というカイのおずおずとした返答に、エリトは大仰に首を振ってみせた。

「いいご身分だ。お嬢様に伝えておいてくれたまえ、お遊びが過ぎる本社に降格させられぬよう、自省されるようにとね」

ファイは先ほどから変わらぬ穏やかさで返した。

「出直して、ご自分でお伝えになった方がモアベターです。次期日本支店長を虎視眈々と狙っていらっしゃるエリト様なら、それくらい苦言を呈する勇氣をお持ちでしょう」

さすがにぼうつとしていたタイジも、氷河期並みの冷気で我に返る。笑顔のファイと渋面のエリトの間にクレバスより深い溝が生まれているのは、会話をろくろく聞いていなかったタイジにもよくわかった。

「……わたしが知らないでも思っているのか、ファイ君。君がさつきまで会っていたのが、本社の人事担当取締役だということ。君こそ何か企んでいるんじゃないのか」

「わたしはわたしの道を、ただ歩いているだけです」

「その道で、わたしの道を邪魔しようと思っっているのだろう」

「何をいう早見優。おポンチなあなたの道は、わたしなどには関係アチャコです」

ファイは疑惑をかけられたことに嘆くような素振りをしたが、そのくせ、おまえなど敵ではないと宣言しているのだ。カイが怯えたようにタイジにすり寄ってくる。タイジも思わずその手を取った。

「ふ……ふん、それならいいが」

しかし当のエリト氏はファイの猛毒をわかっていないようだった。バカめ。うーむ、ひよつとしてファイが死語を使うのは、死語を理解しない相手に面と向かって嫌味を言うためだったのか？ 外国語でも方言でもないのに通じてないってすげえ。実は死語って便利なんだな……と感動さえ覚えてかけて、タイジは慌てて首を振る。

これはファイの策略だ。俺と死語の発掘・普及作業をしたいから活用してみせてるんだ。惑わされるな俺。負けるな俺。この死語の生き字引に取り込まれたらアウトだ。ああすでに毒されている……タイジはアリジゴクの巣のふちで流砂につかまったアリの気分になった。

歩き去るエリトの後姿をアリジゴク・ファイはやんわりと見送っている。氷河期が終わりを告げ、カイがほっとしたように息をついた。

「ムカつく人ですね。ボク嫌いだ」
「そうですか？ ああいうギリギリしたのも、時には必要ですよ。
ガツガツしているボンビーなら、常時いらっしやいますが……」
「俺を見るな」

…… 3 …… b r e a k h i s i l l u s i o n . . .
幻想を破る

カイが思い出したようにファイを見上げた。

「そついえばファイさん、どうして本社の取締役なんかに会って
たんですか？」

「お嬢さんの代理ぞな」

カイはその答えを何の疑問もなく受け入れたようだったが、タイ
ジは引つかかるものを感じていた。ファイは支店長の前秘書で秘書
室長的な役割を担っているとはいえ、支店長代理ならば副支店長が
務めるのが道理のように思えたからだ。

こいつは実は食えないやつなのかもしれない　タイジはファイ
に注意フラグを立てた。

「気のせいかもしれないが、ファイおまえ、俺が考えてることによ
たらと鋭すぎる時がないか？」

「ボクだって分かるよー。タイジさん、思ってることそのまま行動
に出てるもん。シラ子がおスでシヨックだった、とかさ」

「言つな。言わないでくだせえ、お代官様」

タイジは頭を抱えてカウチでのたうつ。

「タイジさん、大切なのは愛でしたよね」

ゲイじゃなかるうか、ファイの野郎。オカマブレイカーにもそう

言って理解を示しやがって 胸の中でタイジは毒づく。

「どうしてそんなにシラ子の性別にこだわるのー？ メスじゃなきゃいけない理由ある？」

バカにしたようなため息をつくカイに、タイジは食ってかかった。「当たり前だボケ！ 俺はホモじゃねえんだ。もっぺんアリゲーターを食らいたいか？」

慌てて背後に逃げ込んできたカイを、ファイはまあまあとおっとりなだめる。

「あまり聞かないでやって下さい。タイジさんがシラ子にメロメロなのは、無自覚な代償行動なんですから」

代償行動 ある欲求の達成が何らかの障害によって難しい時、すなわち欲求不満状態の時に、その代替となる目標を達成することによって、当初の欲求の部分的充足を図ろうとする行動。

「つまりタイジさんのモノホンの恋路には障害があるので、代わりにシラ子さんとよろしくやっているということですよ」

タイジの口がぼっかりと開かれる。

「行き倒れているのを拾われたのは同じですからね。勘違いもしません」

「だからメスじゃないといけなかったんだー。タイジさんって面白いな」

「面白いつて、おい……俺には話が見えないんだが」

「だから無自覚と言ったでしょう。さてタイジさん、そろそろ社員参加の逃亡犯狩り演習が始まりますよ。犯人役として三日三晩逃げ切ったら寿命半年分差し上げますので、それで利息の足しにして下さい」

タイジはうめいて、ずるずるとカウチに沈んだ。

「ただし捕獲されたら、賞金は捕まえた人のものです。毎日クロ子さんたちの散歩でジャングルを探検しているタイジさんですから、

逃げ切るのは余裕のよっちゃんだと思いますが」

くそう、借金だけでも首まわんねえのに高利子つけやがって。ざる豆腐の角に頭ぶつけちまえ、あの脳みそクサレ梅

「アガッ」

口に突っ込まれた竹定規に、タイジの呪詛は最後まで達せずには終わった。

「何も言っただろ、この毛唐！」

「タイジさんの思考など、聞こうとしなくとも丸聞こえです。おや、噂をすればシラ子さんがいらっしやいましたよ」

シラ子、の一言にタイジはたちまち遠い目をする。

ああ俺のシラ子、おまえはどうしてオスなんだ。このしいたげられた下僕生活唯一の慰め、それがおまえだというのに。こんな無慈悲なことあつていいのか 憂い満面で振り返ったタイジの目の前にいたのは、きよとんとしたお嬢。

「なんだ、お嬢か」

とたんに我に返り、ケツと息を吐くタイジ。お嬢はすつと目を細め、おもむろに社内放送マイクを握った。

『演習を始めるです。敵は秘書室にあり。泣かぬなら殺してしまえ、可愛げのない無礼な恩知らず下僕』

「めちやくちゃ字余りだぞ……つと、うわあああ」

とたんに黒マントに大鎌を装備した大集団が地響きたてて押し寄せ、タイジは転がるように逃げ出した。

四日後。ニシキヘビを解体してその胃から救出されたタイジは、一応姿をくらましていたということで、寿命半年分のお情けをもらったのであった。

タイジ、現在四ヶ月。借金、十八年七ヶ月。返済、一年+ジャングル逃亡劇による半年・利息半年。彼はノルマを達成して、生まれ替えることができるのか。

..... 1 break his back . . . 骨を折る、懸命に働く

「このままじゃ生まれられない。ブレイカー業務もさせてくれ」

パンサーカメレオンを肩に乗せたお嬢は、地道とは疎遠の下僕・タイジの言葉に大きな眼を丸くした。

「アンタの利息だけで今月は終わっちゃまった。このペースじゃ返済できないのよ。下僕とはいえブレイカーとしても雇われてんだから、そっちでも稼ぎ……おい、そいつを近づけんな」

タイジは露骨に嫌そうな顔をして、全身うすピンクの爬虫類から目を背ける。

「えー。この子ピンクパンサーっていう稀少種なのに。ね、カレンちゃん」

稀少。その言葉にタイジはぴくりとした。超レアなアルビノ・アリゲーターを溺愛していたタイジとしては稀少程度じゃもはや物足りないものの、それでも心を動かされる。シラ子に失恋した、というか一方的な幻想を打ち砕かれたタイジは、シラ子に代わる対象を探していたのだ。

カメレオン、からメと才を落とすだけの、またしても安直なネーミングだな。だが胎児だから、とそのまんまタイジにされた俺よりは凝ってる。こんな所でも俺はペット以下の安い扱いなのかとタイジの唇の端は苦々しく引きつる。

いつものことだ、そろそろ慣れよう。代わりに人間として大事なものを失うような予感がするが。と気を取り直して、タイジは出目の爬虫類を眺めた。カレンとなると普通はメスを想像するものだが。「俺は騙されない、今回は先に聞いておく。そいつはオスなのかメ

スなのか」

「知らない」

「そこが一番大事だろうがああ！」

なぜだ。なぜこの連中はそろいもそろって、オスメスでもどっちでもいいとか、大切なのは愛とかほざくんだ　タイジはがつくりと膝をつく。

確かに俺自身、どうしてそれほどメスにこだわるのか分からないが、体のうちからフツフツと湧き上がるメスへの欲求は乾くことを知らないのだ……ハッ、やっぱ溜まってんのか俺……アニマル相手にさえ……どんよりしたタイジの目に、お嬢のピンクのピンヒールが映る。そこから伸びる、なめらかな白い足。

「無理無理、ありえないから。食うなら梅干より獣の方がマシだから」

「……おなかすいてんの？　タイジ」

ある意味な。と、タイジはフツと乾いた笑いをもらす。

不意にその耳に、聞きなれない動物の鳴き声が入ってきた。お嬢も不思議そうに見回したあたり、ペットではないようだ。音源をたどると、それは支店長室と秘書室を隔てるドアの向こう。

ドアを開けた二人の足許で鳴いていたのは、人間の赤ん坊だった。

「いつの間に産んだのよ。なるほど乳も育つわけだ、出ないけどなぐへ」

ドアで殴られ、タイジはノブのヒットした脊椎が破碎されたかと思っ

近頃、秘書でなく道具を利用して制裁することを覚えやがって。豆腐な脳みそでも、類人猿程度の進化はしているらしい。となると、次に覚えるのは火の使い方だな。と、四つん這いで腰をさすりながらタイジは嘲笑する。

カイもファイも個人の世界で目覚めているようで、秘書室は赤ん

坊を除き無人だった。がらんとしたフロアに赤ん坊の泣き声がこだましている。

「タイジ。その子で相談業務の練習して」

「はあっ？」

お嬢は、稀少種だというピンクパンサーよりよっぽど見慣れないものを見るような目つきで、赤ん坊を眺めている。

「ほらー、赤ちゃんは赤ちゃん同士ってことで」

「アンタいつも俺を人間だとさえ思っていないくせに、都合のいい時だけ認識すんな！」

赤ん坊と言っても相手は二ヶ月か三ヶ月か、生後間もない感じである。前世の知識として言葉を持っている胎児の自分とは違う、コミュニケーションなんて取れるか、赤ん坊のトラブルなんてクソかメシぐらいしかねえだろ、アンタがどうにか とまくしたてたタイジだが、無情にもその鼻先でドアは閉められてしまった。

あまり逆らうと後が怖い。ファイも怖い。ファイというか竹定期が怖い。先日は先端に画びょうが仕込まれていた。八つ当たりしようにもカイもない。

タイジは恨みの形相で赤ん坊を見下ろした。

「くそつ。てめえ寿命残りまくってんだから、たっぷり報酬しぼり取ってやるわああ」

∴∴∴ 2 ∴∴∴ b r e a k t h e m o m e n t u m . . .
勢いを止める

「わたくしが至りませんでした。どうかこの愚かな下僕めにお力をお貸し下さい、支店長様」

一時間後、タイジはお嬢の爪先で土下座していた。

「なあに、這いつくばって。コンタクトでも落としたのー」

わざとらしすぎるだろ、お嬢。コンタクトのいらぬカラダを貸し付けたのはアンタだぞ　　という言葉、タイジはぐぐつとの奥に押し戻す。

「さきほどの赤子の件にございます」

タイジなりに手を尽くしてみたものの、赤ん坊は泣きやむ気配すら見せなかったのだ。あまりに泣かれ、こいつどっかヤバいんじゃないかとタイジは焦っていた。

「えー。あたし、赤ちゃんなんてどうすればいいのか知らないもーん。ノー・アイディア」

それか。ブレイカー業務の練習台とか言い訳して、俺に赤ん坊を押しつけた真の理由はそれか。タイジは額を床にすりつけたまま、小さく舌打ちする。聞こえていたらしく、ピンクのヒールがタイジの後頭部へ空き缶つぶしの勢いで叩き込まれた。

「大体、なんでブレイクに赤ん坊がいるんだ……」

床で衝撃の逃げ場がないぶん、ダメージは強烈だ。脳しんとうにピクピクしながらも文句が言えるのは、ここ二ヶ月の過酷な労働の成果であろう。

「母親のブレイカーが連れてきてたんでしょー。自分が夜中に集合的無意識界で働いてるあいだに、自我レベルで泣かれたら困るからじゃなーい？　ついでに、面倒になったからここに置いてっただんしょー」

ついでで捨てていいものなのか。俺だって迷惑だ。しかもこいつはオスだ。早いところ母親を見つけ出して、さっさと返却しちまいたい。それにはまず泣きやんでもわらねえと　　タイジは何とか起き上がった。

「お嬢、得意だろ。こいつ抱いてみて、とりあえず何で泣いてんのか調べてくれ」

触った相手の感情を流し込まれる、お嬢の宿命。お嬢は知りたく

ないもの知らされてしまうのを恐れて、他人に触れようとしない。だが俺が初めてお嬢に会った時、その宿命を利用して事情を読み取ったじゃないか、とタイジはそこに望みをかけたのだ。

「えー……」

案の定、お嬢ははつきりと嫌そうな顔をしている。

「お嬢しかできねんだぞ。お嬢だけが頼り。お嬢様様」

慣れぬヨイシヨに頬が引きつる両者。

「お嬢最高。お嬢優しいな。お嬢、神様仏様。お嬢……えーと」

「ストープ！ タイジがそんなこと言うの気味悪い！」

悪寒が駆け上がったらしく、お嬢は首をすくめてぶるつと身を震わせた。タイジの心にもないお世辞を聞かずに済むのなら、というあからさまに消極的かつ投げやりな態度で赤ん坊を抱き上げる。いかにも慣れない手つきだ。難しい顔をしながら、ぎこちなくあれこれ抱き直す。

「こんな感じの抱き方が楽みたい。んで、ゆるゆる歩いて欲しいみたい」

タイジがお嬢の指示通りにすると、赤ん坊はするすると泣きやんだ。

「おお、すげー！ 泣きやんだわ、ほれ！」

魔法みたいだと感動しながら、タイジは熱心に歩き回った。

「助かったわー、いやマジすげーよ、お嬢。おまえ感謝しろよ、お嬢に……おい寝るのかためー。こんだけ人を騒がせといて寝るのか。いや寝てくれ、とつと寝ちまってくれ、はいおやすみなさいよー」

「……タイジ」

拗ねたような怒ったような口調で呼ばれて、赤ん坊から目を上げる。タイジには、お嬢が心なしか赤い頬をしているように見えた。

「人懐っこい笑顔を見せちゃいけないって命令してあるでしょ」

そんな顔したか？ だけど言い争ってまた赤ん坊が泣き出すのだけは避けたい、ここはおとなしく言うことを聞いておこう。タイジが慌てて厳しい表情を作ると、お嬢は安心したように肩を落とすし

た。

「その子のトラブルはあたしが解決しちゃったんだから、タイジ失格。代わりにその子の母親に対してブレイカー業務しなさい」

「ぬはっ？」

ひと安心していたタイジだが、瞬く間に平和な気分も吹っ飛ぶ。あつたりまえでしょー、と言われてタイジはため息をついた。

「んじゃ、こいつ連れて社内回ってくるわ……」

「必要なーい」

意外な返答だった。出て行こうとしていたタイジの足が止まる。

「何だそりゃ。母親見つけないで、どうやって説得しろってのよ」

「タイジ、わかってない」

さつきまでと打って変わって、お嬢は冷えた、悟ったような目をしていた。

…… 3 …… break the skein . . . 混乱
を解決する

「ブレイカーの相談解決っていうのは、答えと一緒に考えてあげることじゃないのだ」

踏ん切りをつかせてやること、決意させてやること。正しい方向に導いたり、理想的な答えを教えてやつたりすることではない。たとえそれが犯罪や、人道的に許されないことであろうと。正しい導きが欲しいなら、神に助けを求めればいい。

「でもここは集合的無意識、人間の世界」

倫理的に見れば歪んでいる理論や動機にうなずいてもらうことで、合理化や正当化をはかる人もいる。相談内容が何にせよ、当人が答えを確定するために、ブレイカーはその後押しをしてやるのが役目なのだ。

「殺人や、こんな……育児放棄であつてもか！」

詰め寄るタイジを、お嬢は少しも動じずに見上げた。

「そういう人たちはね、そうやってブレイクに相談するたびに、報酬として命を削られていくの。そういう生き方をすればツケは回ってくる。それでいいの」

「わかんねーよ！」

「わかんなくていい。わかんないなら、タイジは下僕オンリーでいい。どうせあと四ヶ月くらいしかないんだし」

言い捨ててくるりと背を向けたお嬢の語尾が震えていたように聞こえて、タイジはハツとした。頭に昇りかけていた血が冷たく引いていく。

「シラ子を十歳まで育てたつてことは……お嬢は十年、ブレイカーやっつてんだよな……？」

「……だつたら、なあに」

お嬢は振り返らない。赤ん坊を抱く前に枝に移したカメレオン・カレンをまた肩に乗せている。

「それでも割り切れてないのか？ 生きるために仕方なくブレイカーやっつてんのか、支店長のお嬢でさえ」

倫理観と罪悪感への背徳。寿命のためにそれを受け入れ続けねばならないとしたら……神はどうして、ただでさえ不運なブレイカーたちに、こんな試練を課すのだろう。タイジは命の代わりに、彼らがかかりにかけねばならないものの重さを思い知らされる。

お嬢は一体どうしてそこまでしてブレイカーをやっつてんだ。お嬢が寿命を欲しがる理由は何なんだ　タイジはブレイクに雇われて二ヶ月、初めてそれを疑問に思った。

「お嬢は集合的無意識から個人の世界に消えたこと……実生活の方

で目が覚めてたことって、ないよな。ここでケツ出して昼寝はするけど……ひよつとしてお嬢のほんとの体って、ずっと眠ってる？」にらまれてからタイジは、心得その四、お嬢さんの実生活について聞かないこと　という、いつだかのファイの指南を思い出す。「タイジは知らなくていい」

これで話は終りだ、という意志を示す強い口調だった。タイジにはそれが、ブレイカー業務を覚えなくていいという意味なのか、お嬢の実生活を探るなという意味なのか、わかりかねた。

両方かもしれない。だが俺は、心得なんぞとつくに破ってる。お嬢に触れるな、お嬢に逆らうな……いまさらもうひとつ破ったところで、どうだつてんだ。俺は知りたい、知らなきゃいけないような気がする　タイジが口を開きかけた時、支店長室のドアが激しくノックされた。

号泣しながら許しを請うた若い女性ブレイカーは、タイジから受け取ったわが子を腕にしっかり抱きしめた。ひざについて詫びの言葉を繰り返す女性の前で、お嬢は高く腕を組む。

「無意識界で捨ててみて、気が済んだ？」

「はい、お嬢様」

ムチ打ちになるんじゃないか。タイジが恐れるくらい、女性はかくかくと激しくうなずいた。

「じゃ、リアルで捨てる気はもう一切起きない？」

「はい、お嬢様」

何とお嬢の目的はそれだったのか　やられた、とタイジは思った。母親を探しに行く必要はない、お嬢はそう言った。それはわが子を捨てるという行動と結果について、母親が実際に体験することで答えを見つけ出させるためだったのだ。

タイジが母親を探し出して説教したところで、母親の中に渦巻く不満は他人によって押さえつけられたに過ぎず、不完全燃焼のまま

残る。そしてそれがいつか爆発し、集合的無意識界だけでなく実際にも、育児放棄を執行してしまつたかもしれないのだ。

本人の気が済むようにさせてやる、その後押しをする、お嬢はまさにブレイカー業務を遂行したことになる。

さすがダテに十年ブレイカーやってないわ。すげーぞお嬢。梅干を干し柿くらいに訂正してやってもいいくらいだ。喜べ、シワ数大幅アップだぞ。乾きもんだけどな。タイジにしては大きな譲歩であつた。

「タイジが面倒みたんだから、タイジに御礼してもらいます」

「はい、お嬢様」

「報酬は親子で合わせて二年分」

「はい、お嬢……さ……」

勢いで返事をしかけて、母親は固まっている。タイジも凝固して、二人してまじまじとお嬢を見つめた。

二年の報酬なんて法外もいいところじゃねえか。いやいやここは法律なんてないお嬢独裁政権なんだつた。報酬は交渉次第なんだつた。それにしてもボツタクリすぎやしねえか、お嬢。ファイに銭ゲバと言わしめた俺でさえ、そいつはやりすぎだと思つぞ。タイジ内の『お嬢・実はいいやつかもしれないゲージ』が、ひるひると音を立てて急降下していく。

一方のお嬢は悪びれた様子もない。そして静かに言い渡した。

「命を稼ぎにきてるはずのブレイカーが、その命を粗末にしようとした。二年分を稼ぎながら、ブレイカーたちとその子に償いたまえ」
母親は素直にうなだれる。

「はい……お嬢様」

…… 4 …… break loose …… 解き放たれる

「あのさーお嬢。俺、別になーんも面倒見てねーし。結局解決してやったの、お嬢だし……報酬、いらねーわ」

母子が帰ると、タイジは頭をかきながらぼそぼそ言う。

「おばか。それじゃあたしが借金回収できないじゃなーい」

一蹴された。が、稼がせてもらった感を拭えないタイジは、釈然とせず首をひねる。

「それよりブレイカー業務は向かないみたいねー、無駄に熱血空回り下僕。おとなしくヨゴレ仕事で稼い……」

「いや。やるわ」

アホみたいに口開けんな おっと脳みそ梅干、もとい、干し柿のアホなんだから仕方ねえか。さっきまで堂々と年上の女を叱りつけていたのと、ほんとに同一人物かアンタは。タイジは幼い表情をするお嬢を呆れて眺めた。

「二年もらっても、やっぱペース遅いし。それによ、その……俺は知らなくていいっての、ちよいとシャク……つつつか、かなりシヤクだし」

「……やる気になっちゃってんの？ なんなの？ 不吉ー」

からかうつもりなら許してやる。だが本気でおぞましそうな顔をするな、とタイジは拳を震わせる。

「まあ寿命回収できるならいいけど うきやあぁっ！」

「やだやだやだやだ、取ってタイジ、カレンちゃん取っちゃって、早くー！」

いきなり大騒ぎ شدしたお嬢は、肩に乗ったカメレオンから必死に顔を離そうとしている。

「へっへっへー、フンでも引っかけられたか？」

「いやーん、今すぐ取って、そのレオンちゃんここにやっちゃっ

て！」

お嬢の切羽詰った形相にニヤニヤしていたタイジだが、後も怖いことだし、と素直にカレンを肩から取り上げた。レオンちゃんと呼ばれた、カレンよりもう一段ピンクが鮮やかなパンサーカメレオンと同じ枝に移動してやる。

「ん？ カレンのやつ、さっきと色が変わってねーか？ そうか周りの色に合わせて……」

言いかけて、タイジは黙る。

黙る。

黙る。

ややあつて、ぼつりと呟いた。

「オイお嬢。カレンはメスだったのな。レオンと交尾してやがるぞ。色が変わったのは発情したからだだったのか、婚姻色ってやつだな……ちくしょう、なんだってこないだから爬虫類の交尾ばかり……」

…お嬢？」

背後がしーんとしているのに気づいて、タイジは振り返る。

お嬢はひざを抱いてしゃがみこんでいた。腕から顔を上げたお嬢の頬は、ピンクパンサー・カメレオンのように染まっている。濡れたブラウンの瞳が、何かを訴えながらタイジを見上げていた。

「お嬢、どうし……た……」

もしかしてアレか　タイジはお嬢の瞳にしばらくたように動けなくなる。

こいつはいわゆるウルウルの瞳ってやつか。ひよつとしてお嬢のやつ、カレンから発情でオスを求める気持ちをしこまれちゃったのか。だからこんなもの欲しそうな、フェロモンな顔で見つめちゃってんのか。

「タイジ……」

ヤバい、これはヤバい　タイジの心臓が一気に喉元に跳ね上がる。

お嬢は完全にソノ気だ。しっかりしろ俺、相手は一応上司だぞ。

しかも脳みそ干し柿だぞ。うわ、どうしたことだ視線が外せない。外せないどころか胸の谷間とかスカートの隙間とか、そんなとこさまよってどうするよ。頼む俺の血、一ヶ所に集中しようとするな。ありえねーだろ、ありえねーって。

無自覚の代償行動なんですから。

あぁつくそ、何で勝ち誇ったようなファイの顔が思い浮かんだりするんだ。わかった、わかったよ、俺も気づきましたって、俺はシラ子をお嬢の代償にしてたってことだろ。だからオスだと判明してシヨック受けてたんだろ。だけどお嬢ってのは無理ありすぎるだろ、だってお嬢だぞ、下僕の俺をコキ使って笑ってる悪魔の手先みたいな女だぞ。

だめだ別のことを考えるんだ俺、干し柿干し柿干し柿干し柿……

「タイジ、やっぱおなかすいてんの？」

「干し柿干し柿干し……んっ？」

我に返るタイジ。噴出していた汗が額を流れ落ちていった。いつしかぎゅっつつぶっていた目を恐る恐る開けると、お嬢が怪訝そうだな、どこか気味悪がっているような顔で覗き込んでいる。

「あぁ、ある意味な……へっ？」

タイジはしげしげとお嬢を見つめ返す。お嬢は制服のジャケットを着込みながら「さー、お仕事お仕事」なんて張り切っている。さつきまでのあふれ出すような色気がどこにも見当たらない。紅潮してもいない。

「なあにボンヤリしてんのー。集合的無意識界で白昼夢に入らないでよねー、ややこしいから。バス回してきて」

あれ？ 発情しちゃってなかった？ 一瞬にしていつも通りってどういうことだ。幻でも見てたのか俺は 狐が女をたぶらかそうと化けて出たような容姿のタイジ。そのタイジは狐につままれたように首をひねる。

「バ・ス」

もう一度せかされて、タイジは言われた通りふらふら部屋を出よ

うとした。

「……なー、お嬢……」

その足を止めて、タイジは聞いてみる。

「なあと、雇い主の前でトリップしちゃってるアブない下僕」

「こいつら、持ってみる気はねえ？」

そう言っただけで、タイジは、いまだ交尾中のカレンとレオンを指差す。

結果、タイジは雷という超暴力的な方法によって再びアフロにされ、支店長室から蹴りだされたのであった。

タイジ、現在五ヶ月。借金、十八年七ヶ月。返済、もろもろ一年
+ 育児放棄騒動による二年。彼はノルマを達成して、生まれてくる
ことが出来るのか。

…… 1 …… break a taboo . . . タブーを
犯す

「なあ、ファイ。お嬢ってほんとは何歳？ 何でブレイカーやってんのか知ってる？」

カレン ピンクパンサー・カメレオンのメス のくるくると巻いた尻尾に沿って、タイジは「の」の字を書いていた。だらしなくカウチに寝そべり上の空でそんなことを呟く部下の顔を、出勤してきた前支店長秘書は可愛い弟を見守る目で覗き込む。

「タイジさん」

「んにゃ……」

恋の下僕はカレンの尻尾をぼんやりと見つめたままである。

「火葬、土葬、鳥葬、どちらがお好みですか？ この集合的無意識界で死ぬことはありませんから、いずれにせよ生きてままといつことになります」

「あー…… どれがいいかな……」

寝ぼけた子供がトイレを探すような虚ろさで、超低速思考の中を漂うタイジ。その視界には至近距離にあるファイの思案顔が、白金と小麦色の染み程度にしか映っていない。その染みが首を振る。

「重症ですね。心得破りの仕置きと気づきもしないとは、まいっちなぐ」

「仕置き……」

その言葉に、タイジの表情が急に曇った。

「最近さ、お嬢おかしいのよ。寝てる所に入ってくと、えっちーとか叫んで仕置きされんのよ。今まではさ、堂々とケツ出して寝たくせに……俺、何かした？ 胸もんだのはだいぶ前の話だしなあ

……」

「はー、と肺の容量いっぱい吐息が押し出される。」

「やっぱあれなの？ 身分違い？ 下僕なんか箸にも棒にも？ 借金あるしな。ウザがられてんだわ。仕置き、えらい気合入っちゃってんだもん。雷なんかもうキョーレツでビリビリしちゃってこっ、血湧き肉踊るみたいな」

「用法が間違っております。さて」

仰向けの腹の上に載せていたカレンをひょいと取り上げらると、それがスイッチだったみたいタイジは飛び起きた。

「丁寧に扱えっ、身重なんだぞカレンはっ！」

「そのカレンさんとベビーさんたちのスウィートホームが危険に晒されているとなったら、どうします？」

怪獣襲来の急報を受けた正義の味方みたいな衝撃顔をするタイジ。「逃亡犯狩り演習の折、タイジさんはニシキヘビに飲まれてましたね。C地区を根城にしているはずのニシキヘビがなぜかF地区にいたから、不覚をとったとおっしゃってましたが」

東京が怪獣によって焼け野原にされた、と報告を受けた正義の味方みたいな沈痛顔をするタイジ。

「そうなのよ、近頃ジャングルの治安が乱れてんだわ。そうだ、ヘビもカメレオンの天敵だったな。あいつらがでかい顔して歩き回ったら、カレンたちの身に危険が及ぶ」

「蛇足ですがヘビは歩き回りません。それで、タイジさん。原因を調べて対策を施して、カレンさんに安心して育児に励んで頂こうじやありませんか」

地球の未来は君の双肩にかかっている、と上司に肩ポムされた正義の味方みたいな精悍顔をするタイジ。

「俺にできることはないの、隊長」

「ジャングルの全面積を測量してきてちょ。ヘビたちが移動するよな原因があるはずだ」

「アイアイサー！ 隊長はここでカレンを守ってやってくれ」

覚悟を決めて出勤の構えを取る正義の味方みたいな緊張顔をする
タイジ。

「頼まれたとしてもそんな泥仕事には同行しませんから、ご安心を」
「行ってくる。俺を信じて待ってる、カレン！」

ぐおっ、という擬音が当てられそうな勢いで走り出すタイジの背
中に、ファイの感心したような声が追いかけてきた。

「ノリノリですよ。なんて扱いやすい人なんでしょうねえ、二代目
代償・カレンさん。お嬢さんの気持ちがわかります。タイジさん相
手には思考を読む力など、宿命と感じなくなります」

第九代支店長秘書イオタ、および第十九代タウが作成したジャン
グル地図と比較した。結果、タウ時代には拡張さえ見せていたジャ
ングルが、現在は四分の一も消失していることが判明する。

「そうか、それで縄張りが乱れて治安が悪くなってんだな」

正義の味方は疲れを知らない。五日間ぶっ続けの測量を終えて帰
還し休みもせずに、熱心に地図に顔を寄せている。

「ジャングルが消えた原因は何だ？」

「……タイジさんがそれを聞きますか」

へっ、と間の抜けた答えをしたタイジは、ファイの緊迫した目線
にぶつかって戸惑う。いつものらしくらりと笑顔で処理するファイ
だけに、タイジはそれが想像以上の重大問題であることを感じ取っ
た。

「下僕さん、心得その三は」

「お嬢の心を乱さないこと」

一秒でも遅れれば竹定規が唸る。タイジは即答して胸を張った。
が、ファイには満足していないように肩をすくめられてしまう。

「ブレイクやジャングルが集合的無意識界に物質的に存在できる理
由は？」

「支店長であるお嬢の思い込みの強さ」

「よってお嬢さんの心が乱れると？」

「ブレイクは崩壊して、ブレイカーは寿命の短い者から死んでいく……」

敵と思って倒したのが実は裏切った仲間だった、と告げられた正義の味方のような愕然顔をするタイジ。

「これはその予兆だったの？」

「もつと根源的などころに気づいて頂きたいものです。すなわち、お嬢さんがなぜ心を乱されているのか」

タイジさんがそれを聞きますか。ファイの言葉がタイジの脳裏をぐるぐると走り回った。

「俺……俺？ 俺がお嬢を……困らせてんの？ 惚れたりしたから？」

すべておまえが発端なんだ、怪獣を呼び寄せたのも、あいつが裏切ったのも、と上司に指摘された正義の味方のような絶望顔をするタイジ。

「お嬢さんが困っているかはさておき、可能性が一番高いのはタイジさんの存在でしょう。倍率ドン、さらに倍してもいいです」

どさりと音を立てて、タイジはカウチに腰を落とす。

「タイジさん。言いづらいことですが、秘書室長としてはつきりお伝えしておきます」

ファイはタイジの視界に回りこむ。怯えたような切れ長のタイジの目を、ファイの碧眼は逃がさなかった。

「わたしは選択を突きつけられれば、タイジさんよりお嬢さんを。」

お嬢さんよりブレイクを選びます。あなたとお嬢さんにどんなに恨まれることになろうとも、です」

バラに壊す

要するにあれだ。気の迷いつてやつだ。

全部俺の勝手な勘違いだ。お嬢はアホだ。スケープゴートなんて演じちゃいない。宿命を自分で背負っておきながら手に余らせてる、ただのバカなガキだ。

暇なもんだから余興を探してたところに現れたのが俺だった、ってだけだ。命が危ういことにつけこんで、詐欺まがいなやり口で下僕にしたんだ。寿命を餌に好き勝手に振り回しちゃ、這いずり回る俺を笑ってただけなんだ。

命が何より大切みたいなことを偉そうに語るくせに、俺に対しては人間どころか、生き物としての尊厳さえ認めようとしないし。俺が身を削って何かを成し遂げても、屁とも思っちゃしないし。ふっかけてきた利息だつて暴利もいとこだ、その支払いに手間取ったせいで俺が生まれられなくなったら、なんて考えてもいないし。外道よ外道。

ブレイクを存続させることができる力を持っているからって、わがまますぎだろ。カイを泣かせた時だつて、謝りもしなかった。そうそう、そうだ、客だった俺を平気で轢いたり踏んだり、あの時だつてこれっぽっちも悪いなんて思ってたに違いないわ。

それにきつとあれは見かけを偽ってるぞ、ブレイカーは十八歳以上が基本だからな。十年ブレイカーをやってたんだから、少なくとも二十八。なのに十六歳の顔を装ってるなんて痛すぎるだろ。ほんとはブスで胸もないんだろ。どんなに溜まってても自分の右手の方がマシなくらいなんだ、絶対そうだ。

そら、もうお嬢なんて何とも思わない。横暴な上司、ぼつたくりの債権者、それだけだ。嫌いこそすれ、好きになる理由なんて一切ない。

お嬢には二度と触ったりするか。それが下僕の心得だからな。流

し込んでしまったら困らせるような感情があるわけじゃない、単にそれが決まりだからだ。タイジは、そう結論付けた。

…… 3 …… b r e a k a s t o r y . . . 口火を切る

「お嬢、これ借金の払い。三年分」

月末。タイジから小切手を渡されると、お嬢はじーっとそれを見つめた。

「なーんか最近、やけにマメマメしくブレイカーやってるみたいじゃないーい？ 滅多に秘書室でも見かけないくらい。どうかしちゃうたのー？」

「別に。さっさと返済ししようって決めただけ」

「ふうん」

探るような目つきから視線を逸らし、タイジはそのまま支店長室を去ろうとした。

「あ、そうそう。カレンちゃんが産卵したみたい。見るでしょー？」
タイジとお嬢の眼前で交尾していたカレンとレオン。タイジには、それがはるか昔のことに思えた。タイジはこの一ヶ月以上、集合的無意識界にいる間は昼夜を問わずひたすらブレイカー業務に打ち込んでいたのだ。正直、タイジはカレンが卵を持っていることなどすっかり忘れていた。

「興味ねーわ」

半身だけ振り返ってタイジが言い捨てる。お嬢の唇から笑みが逃げ去った。

「……タイジ？」

「俺、仕事あるから」

背中を注視されているのを知っていながら出て行く時は、どうしてこんなに足が重いんだ。足だけじゃない、重力が二倍になったみたいに空気がのしかかってくる。早くここから出なけりゃ、押しつぶされそうだ。タイジは気力で秘書室へのドアを目指す。

「覚えなくていいって言ったのに」

からかっているようなお嬢の口調は本心なのか、心配を隠す演技なのか。判断できないし、判別しようとしちゃいけない。お嬢のことは考えちゃいけない、とタイジは自分に言い聞かせる。

「良心に背くような相談に、痛みを感じずにいられるタイプじゃないってわかっているんだから。ブレイカーには向いてないんだから。下僕してればいいのに」

ひとつゆっくりと深呼吸する。タイジは念入りに笑顔を作って振り向いた。

「そお？ 俺、けっこう才能あると思うんだわ。十八年後にはまたここに舞い戻ってブレイカーするんだし、場数踏んでおかないとな」

「踏んだって生まれる時に全部忘れちゃうじゃない、おばか」

お嬢は呆れている。タイジが頬に刻んだ苦笑は本物だった。その苦味は口内だけに留まらず、タイジの胸まで侵食する。

「それもそうだな」

身を転じ、まわりつく重力を振り切って、タイジは支店長室を出た。

「ジャングルの消失に歯止めがかかりません。山田かつてないほど縮小しています」

二回目の測量が行なわれた。前回の測量結果とつきあわせながら、ファイがかすかに眉を寄せる。タイジが、そうか、と返すとしばらく気まずい空気が漂った。

「俺以外の原因ってことは？」

「ないと言い切れませんが、他の要素が見つからないのです」

ファイは黙って、竹定規で自分の肩をとんと叩いている。ジヤングル縮小が発覚して以来、それがタイジに振るわれたことは一度もない。下僕は下僕の分をわきまえていたし、何よりブレイカー業務に没頭していてヘマをやらかす時間的余裕さえなかったのだ。

「とにかく俺は借金返済に集中するわ。早いところおふくろの腹に戻って、分娩の準備体操でもしとかなないと。俺が消えりゃ、これ以上お嬢を困らせることもないだろうし」

「そうですね。お嬢さんの方から債権放棄して、タイジさんを自由にすることはできませんから」

「なんでよ」

やれやれ、と言いたげに肩がすくめられた。

「タイジさんがそう教えたのではありませんか。お嬢さんは愛しい者が去る後姿を見るくらいなら、自分から背を向けてきました。お嬢さんの病気の治療法が発見されない限り、お嬢さんはここに縛られ続けるからです」

病気……だと？ ファイがお嬢の実生活をバラしてる。心得破りには容赦ない罰を与えてきたはずのこいつが タイジは体罰である竹定規での殴打より、よほど強烈な打撃をくらった気がした。

「お嬢さんは本当に十六歳です。六歳で自分が現代医学では治しよつのない病気であることを知り、ブレイクに相談しにいらしたんです。そして前代の支店長に、今のカイと似たような待遇で雇われました」

だから。だから社内での不満があろうと、監査室に文句を言われようと、お嬢は秘書や下僕を独断で採用したりするのか。自分がそうやって拾われたから。タイジはお嬢に貸し出された自分の掌を凝視する。

「前支店長は、お嬢さんに類まれな才能があることを見いだしました。夢想がちな思春期の少女が、オカルト的な超常現象を引き起こすほどの精神力を発揮することはよく知られていますね」

不治の病床に伏す少女は想像の中でしか、遊ぶことも恋すること

も、生きることさえも許されなかったのです、とファイは続けた。

「それまでのブレイクにはジャングルなどなく、簡素な社屋があるだけだったそうです。ブレイカーに安定した安息の地を、という前支店長の説得で本社は十歳のお嬢さんを支店長に据え、今の広大な日本支社が生まれました。その頃から、お嬢さんの体は昏睡状態が続いているそうです」

棒立ちになっっているタイジを眺め、ファイはうつすらとした表面的な笑みを浮かべている。

「本社の人事取締役から直々のリークです。お口にチャックですよ」「なんで……いまさらグラスノスチ」

死語での抗議が決まらないことは重々承知ながら、タイジは低く唸った。お嬢を忘れようとしているのを知っているくせに、残り火に薪をつぎ足すような真似を　タイジの目が虫眼鏡なら、ファイの眉間は点火しているだろう。そんな勢いでにらまれても、ファイは平然とタイジを見返した。

「わかりませんか、タイジさん。あなたはお嬢さんに対するブレイカー業務をチョンボしているんです」

これまた埋葬済みな死語を掘り起こしてきたな。さすがは死語のゾンビ使い。意味は失敗だったっけか……失敗？　え、とタイジは間の抜けた声を漏らす。

「タイジさんがお嬢さんにホの字なのが、お嬢さんの心を乱しているのではありません。ジャングルがいまだに消えていつているのが証拠です。あなたは原因をつきとめ、何としてもお嬢さんの心を落ち着けねばなりません」

すつと息を吸い込むと、ファイは冴えた碧眼でタイジを射抜いた。同時に周囲を圧倒するオーラが場を支配し、その威容にタイジは思わず息をのむ。

「本社からブレイク日本支社の存続安定化の全権を任されている者として、命じます。お嬢さんに対するブレイカー業務成功に全力を尽くすこと」

わたしが知らないとも思っているのか。君がさつきまで会っていたのが、本社の人事担当取締役だということを。君こそ何か企んでいるんじゃないのか。いつだかの、次期支店長を狙う監査役室エリトの言葉がタイジの脳裏に蘇る。

おポンチなあなたの道は、わたしなどには関係アチャコです。

そういえばファイさん、どうして本社の取締役なんかに会ったんですか？

お嬢さんの代理ぞな。

あの頃、ジャングル消失がまだ明らかになっっていなかったあの頃から、ファイはすでにお嬢の異変を感じ取っていたのか。本社と連絡を取り、この事態に備えていたのか。タイジは知らない者でも見るかの目でファイを呆然と眺め回した。

「報酬は十二年　タイジさんの残りの寿命借金、全額です」

タイジ、現在七ヶ月。借金、十八年七ヶ月。返済、もろもろ三年＋ブレイカー業務による三年。彼はノルマを達成して、生まれ続けることができるのか。

……1……break a road……道を切り開いて進む

本社からブレイク日本支社の存続安定化の全権を任されている者として、命じます。お嬢さんに対するブレイカー業務成功に全力を尽くすこと。報酬は十二年　タイジさんの残りの寿命借金、全額です。

「そう言われてもよー……何から手をつけりゃいいのよ？」

タイジは一人きりの秘書室でカウチに沈んでいた。ばりばり後頭部をかくと、狐の尻尾状の髪がびよこびよこ揺れる。

「原因が俺って言われても。最近は心得守ってるじゃん。触ってもいないし、逆らってもいないし」

俺が何かしてるか、と面と向かって聞くのもますます動揺させるかもしれないしな。育児放棄してみた母親みたいに、ほっといて勝手に落ち着いてくれりゃ万々歳なんだが　タイジは首を振ってそれを打ち消す。

「その前にブレイクが消滅したらシャレにならんわ」

結局、密かに探りを入れに、支店長室へおもむくことにした。

「お嬢？」

ケツ出して寝ているところに踏み込むと仕置きされるようになったので、タイジはベッドから少し離れたジャングル内から声をかけてみる。

「……なあに」

ぼんやりした返事が戻ってきて、タイジは歩を進める。お嬢はヘツドボードに背をもたせかけ、両脚を投げ出していた。

そういえば昼寝じゃなくて、こんな風にポーツとすることが増

えたな。気合が抜けてるようじゃ、そりゃジャングルも消えるつてもんだ。勤労意欲のない俺が身近にいたせいで、お嬢のやる気をそいでたのかもしれない。タイジは納得してうなずく。

「あのさ、カレンの卵。どうなったかなーと」

「ぱちくりとされる。興味ねーわ、と言ったくせにそりゃ唐突だよな。タイジは慌ててヘラツと笑って言葉を継ぐ。

「やっぱ思い直したんだわ。ほら下僕として、お嬢のペットの世話はしないと。ブレイカー業務に目覚めてみればさ、下僕仕事も真面目にやんなきゃー、なんて反省したりして」

お嬢は無言で薄気味悪そうな顔をする。

「なんつーの、サワヤカナ汗？ 労働のヨロコビ？ 寿命の収穫をお嬢にカンシヤしながら目覚めるスバラシイ朝……」

「棒読みもそこまでフラットじゃなーい……」

「覇気のない突っ込みにタイジは詰まった。

「で、でも借金返す気は満々よ。お嬢は十年もブレイカーやってりゃ、そりゃ飽きも来るかもしれないけど」

「なあに、それ。飽きてなんかいませーん」

怒ったように断言されて、タイジはぽかんとした。

「へっ？ そうなの？ やる気減退してんじゃないの、俺が怠けたせいで」

「寝言は個人的無意識世界だけにして。で、卵ならあそこ」

「卵だあ？」

「何のこつちや、とあたふたするタイジは、お嬢に心底気味悪そうな目で眺め回された。

「カレンちゃんの卵、見に来たんじゃないのー？」

「そうだった。そんな言い訳を使って、お嬢を探りに来たんだった。タイジは急いで卵があるという地面に走り寄る。

「そっ、そうそうそうそう。たまごたまご。わーい、かえるのはいいつかない」

幼児番組のお兄さん並のテンションでヨロコビを表現してみせた

が、お嬢には通じなかったようだ。冷め切ったブラウンの目に、タイジのわざとらしい笑顔は凍りつく。

「楽しみにしたってしょうがないでしょー。孵化するのに半年くらいかかるんだから。タイジ、その頃にはもうここにいない」

「……お嬢」

「なあに」

「お嬢」

「なあにつてば。オウムや九官鳥のペットなら足りてるのー」

タイジはお嬢から視線を外さないまま、ベッドのふちに腰を下ろす。

「もしかして、俺がいなくなるのが不満？」

「ぱちぱち、と大きな瞬きが起きた。」

「見せ物がなくなるのは、つまらないかもー」

なくなる、なのか。いなくなる、じゃなくて。俺はモノなのね。

いやいや、いまさらこの扱いに落ち込んでる場合か。タイジは挫けそうになった気力を立て直す。

「寿命欲しさにブザマな姿をさらす見せ物としての、下僕の俺じゃなくてさ。他にもあるでしょ」

うーん、と首を傾げるお嬢。ないのか？ 思い当たらないのか？

演技じゃないとしたら、そんなに考え込まれるのはシヨックだぞ

と、タイジはお嬢の意外と演技派な一面にすがってみる。

「俺は、他のブレイカーと違うだろ。少なくとも十八年間は、寿命の心配とは無縁で暮らせるじゃん。ファイみたいな障害も、カイミみたいな病気もないわけよ。お嬢はそれが……気に入らなかったりするんじゃないの」

お嬢の口は、はあ？ の形で二秒ほど固定された。

「そんなの、タイジを拾った時からわかりきってることじゃない。後からねたむくらいなら、はじめっから寿命貸したりしないで、そ

の場で打ち捨てるもーん」

確かにこのアホ面には、ねたむというドロドロした感情は無縁そうではある。タイジは妙に説得力を感じてうなずいた。

「じゃあさ、俺の何が不満なの」

「不満だなんて、だーれも言っただけ。満足とも言っただけ。すげえ余計な一言ができてきた気がする。クラリとするタイジ。

「それより、さっさと返済することにしたんでしょー。このペーすじゃ完済は望むべくもなーし。まだねたむ価値もなーし。はい、お仕事お仕事」

…… 2 …… break in a storm . . . 嵐
の中休み

「うつつ。なんか、一日も早くいなくなっただけいいんじゃないかかって勢いで追い出された」

「泣き虫毛虫は挟んで捨てたいところですが、そうもいきません。タイジさんにはこの件に専念して頂きます。返済済みの借金は六年でしたね。解決できずにブレイクが消滅した場合、タイジさんは生まれても五歳強しか生きられませんよ」

ぴしぴし、と軽く竹定規で打たれても、タイジはカウチにうつ伏せで沈み込んだままピクリともできずにいる。

「それでもいいわ。あっちにはお嬢がいるわけじゃないもん」

「やけのやんぱちですね」

ああこれ、命が欲しくてあがいてるブレイカーの前じゃ禁句だったな。ぼんやりとそう考えてから、タイジはふと自分の言葉の意味に気づいて自嘲に笑う。

「情けねーな。俺、あきらめついてないんだな」

ブレイクがなくなったら大勢のブレイカーたちが命の路頭に迷うつてのに、俺は自分のことばかりだ。お嬢を見習え、ブレイカーのために一人で宿命を背負ってやってんじやねえか。他人のために犠牲を払ってんじやねえか。お嬢にできることが、どうして俺にできない？

お嬢は他人との接触をことごとく断ってる。つまりは人間不信だ。もし好きな男ができたって信用できないんじや、あきらめるしかないだろ。俺もお嬢が好きなら、お嬢と同じだけの痛みを味わうべきだ。お嬢をあきらめて、それでも生きていく人生を選択する。それでやっと俺は、お嬢と同じラインに立てる。お嬢をわかってやれる。なのに、俺は生まれる瞬間にそれを全部忘れることになる。お嬢がずっと抱えていく痛みを俺も抱えていられるのは、長くてあとたったの三ヶ月。痛みだけじゃない、俺はお嬢の存在さえ忘れる。お嬢を好きになった自分自身の気持ちさえ、きれいさっぱり。

最初から、実るはずがなかった。きつとどこかでわかってた、だからシラ子やカレンに代償を求めたんだ。かなうわけがない気持ちに直面するのを恐れていたから。でもやっぱり好きだと思いついた今、俺は俺なりに決着をつけよう。

俺はお嬢を忘れてしまう。それまでに俺がしてやれることと言ったら 肉体のある現実世界で昏睡状態にあるお嬢が、せめて精神世界で生きていけるように、ブレイクを存続させてやること。たとえ宿命を負っていても、お嬢はここで笑ってた。好きなペットや部下に囲まれてた。生き生きしてた。

神に見放された者たちのオアシスを守る、それも大義名分ではある。だけど俺は、お嬢を忘れてしまう償いに、せめてお嬢の居場所を守ってやろう。不治の病でも昏睡状態でも、お嬢がお嬢として生きられるように。

そういつかけがえのない生のチャンスをお嬢にもらった俺も、その恩に報いて、俺として生きてかなきゃ。

「悪いな、ファイ。変なこと言つて。俺、頑張るわ。なんか……今まで成り行きと惰性で、借金返さなきゃってそれだけで下僕やブレイカーやってたけど。初めて、本気」

カウチから起き上がって、タイジは髪を結いなおす。お嬢がくれた容姿を、きちんとしたくなくなった。ファイもそれを見透かしたように、襟元を整えてくれる。

「助力は惜しみませんよ、タイジさん。ネバーギブアップでピシバシやって下さい。ぶっちゃけ、バックアップはパーペキです」

「バックアップ？」

ファイは共犯者のような密やかな笑みを浮かべている。

「お嬢さんの精神状態の乱れでブレイクが存続の危機にさらされた場合、わたしは本社から強権発動を許されています。わたしが一時的に支店長を務め、お嬢さんが安定するまで持ちこたえてみせます」
何だつて 極限まで顎を落とすタイジに、涼やかな声はお構いなしに降り注ぐ。

「もちろんお嬢さんのように、ちょちょいのちょいとはいきません。ジャングルは無理でしょうし、社屋も相当貧相なものになるでしょう。ですが、ブレイカーたちが寿命を稼げる環境だけはつなぎとめるよう、スタンバっております」

あぐあぐ、とタイジは何度か空気を嚙んだ。

「おまえ……おまえ、悪魔と取引したのか？ このスカポントン！
ブレイクの消失をギリチョンでつなぎとめる、それだけのために」

「ちゃんちゃらおかしいですね。悪魔と取引などしていません」

胸ぐらにつかみかかろうとしていたタイジの手は、すかっとう宙を切った。

「……あー……えーと、わけわかめなんだが」

「神も悪魔も集合的無意識から生み出された、ユングの言う元型の

タイジはだんだん、にらむ気力もなくなってきた。

「裏方が性に合う人間というのもあるんですよ」

「裏方つつつか裏工作だろ」

悪魔が実在するのなら、そいつはきつとファイの顔をしている。こうして人のよさそうな笑顔で近づいて、相手を意のままに操っては喜ぶひねくれ者の根性悪

「アガツ」

竹定規を口に突っ込まれて、タイジは呻いた。

「おわえ、ひほおひほうほ……」

しゃべれずに、タイジはぺっ、と竹定規を吐き捨てる。

「ニヤロメっ。前からおかしいと思ってたんだ。おまえ、命を扱う代償に」

にっこりと、ファイはタイジのいうところの悪魔の笑いを満開にした。

「はい。思考の強制的読解で取引しました。まあ、タイジさん相手には無意味に等しい宿命ですけどね。そんなわけですので、後はバッチおまかせ。タイジさんは気にせず、お嬢さんのオアシスを守ってあげて下さい」

要するにファイが常に一枚うわてなのだ。あきらめて息をひとつつき、わかったと返事をしかけて、タイジはふと気づく。

「おい、タコ助。それなら、お嬢の思考も読めんだろ。お嬢が何で情緒不安定なのか、とっくに知ってんじゃない」

「ワタシ ニホンゴ ワツカリマセーン」

首をしめあげようとしたタイジの手をかいくぐって、ファイは肩をすくめる。

「わたしが無償でタイジさんに対するブレイカー業務をしてさしあげたことを、理解して頂きたいですね。最初から理由を教えていたら、タイジさんはブレイク存続に本気と書いてマジにならなかったでしょう」

「ふっ、そんなバナナ。人間は対価を求める生き物だ、と断定した

本人がどの口で無償だあ？」

こいつは絶対面白がってたんだ。俺がお嬢をあきらめようとしたり、お嬢が生きられるように努力しようとか決心したりする過程を逐一覗いちやあ楽しんでたんだ。こいつならそれがお代としゃあしゃあと抜かすに違いない。タイジが肩で荒い息をついていると、案の定、ファイはケロリと言つてよこした。

「はい。胸キュンな展開でしたよ、タイジさん」

…… 3 …… b r e a k w a t e r . . . 破水する

「げっ、くそ。目が覚めそうだわ、俺」

ポアしてやる。無意識界は肉体を伴わないから息の根を止めることは不可能だが、殺してやる。と鬼の形相でファイを追いかけ回すタイジに、慣れた浮遊感が降りてきた。集合的無意識界から自我へ、つまり目覚めた状態へと移行するシグナルだ。

「この恨みは生まれるまで覚えててやるからなーっ」

ゆっくりと姿を霧のように消されながら、タイジは吠える。

「何の緊迫感もない脅し文句ですね。さよなら三角また来て四角。早いお戻りをお待ちしております」

早いお戻りって、集合的無意識界がデフォルトみたいな言い方だな とぶつくさ呟きながらも、タイジは和やかな気持ちに気づいていた。

ブレイクでの下僕生活やバカバカしい騒ぎに、いつの間にやら本気になった。生きる気にさせてくれた。その世界で待っていると云ってくれる仲間、そして守ってやりたい女の子。

おふくろの子宮も悪くない。ここがパラダイスと思っていた時期

もあつた。のんびり羽を伸ばしてごろごろしていられるこの場所が

この、場所が 唐突に、タイジは凄まじい圧迫感に襲われた。狭い。今までも徐々に狭くなってきてたが、それでも水に浮いているような感覚がある程度には、隙間があつた。なのに今は肉壁が俺を押しつぶそうとしてみるみたいだ。一体何が起きてるんだ。タイジが必死にもがいていると、肉壁越しに慌しい足音が聞こえた。

「先生、破水してます」

「何だって、早すぎる。まだ三十週過ぎたところじゃないか」

タイジの背筋を、恐ろしい寒気が支配した。

「破水した」

支店長室へドアをぶち壊さん勢いで飛び込んで、一言そう告げるタイジ。その勢いに反して、お嬢は冷静にタイジの股間を観察した。

「俺じゃないわあ、ドアホウ！」

お嬢を守りたい などと殊勝な決心はどこへやら、タイジはマツトレスに強烈な蹴りを入れた。

幸い、医者たちは自然分娩を試みていた。押し出そうとする子宮壁に必死で抵抗すること数時間、タイジは疲れ果て、ようやく眠りに落ちて集合的無意識界に戻ってこれたのだった。

「おふくろだ。俺、あと何時間かで生まれちゃう」

あと何時間かで、お嬢にブレイクを残してやるチャンスを失う。

急がなきゃ タイジはお嬢に詰め寄つた。

「お嬢、気づいてんのか？ ジャングルがどんどん消えてる。お嬢の精神状態が不安定だから、物質として固定されていないんだ。このままじゃブレイクが危ない。教えてくれ、何でお嬢は」

タイジは言葉を切る。お嬢にはタイジの声が届いていないようだ。ベッドにぺたんこ座り込んだまま、愕然としてタイジを見上げている。横領を働いた前財務課長に絶望を流し込まれた時と、同じ表情だった。

「お嬢」

真つ青なお嬢の顔を覗き込んで、タイジは何度も呼びかける。が、ブラウンの瞳は何か切れてしまったように動きを止めている。

触ってないよな、とタイジは自分の手を確認した。大丈夫だ、俺は何も流し込んでない。お嬢の反応は、純粹にお嬢の感情だ。純粹に衝撃を受けてるお嬢の　　衝撃？　自分が不安定なことを知らされて？　それとも……それとも俺がいなくなるから……？

「なあ、お嬢……」

「失礼します」

タイジが問いたださそうとした時、支店長室のドアがノックされた。返事を待たずに入ってきたのはファイだ。急ぎ足で、珍しく緊張をみなぎらせている。タイジはそれだけで何が起きたのか、ファイが予想し備えていた時が来たのを察した。

「お嬢さん。たった今、支店長室と秘書室を除く、ブレイク日本支社すべての敷地が消滅しました」

ゆるゆると、お嬢はファイへ顔を向けた。だが何を言われているのか、わかっていないような放心ぶりだ。

「本社からの特命のもとに、ただちにあなたの日本支店長の職を解きます」

心が動きを止めてしまったようなお嬢の前で、ファイは迷わなかった。お嬢らしからぬ無反応に対して感じているであろう心配も、心痛も見せなかった。

この男は断言していた。タイジよりお嬢を、お嬢よりブレイクを選ぶと。それによって、神に見放された　　違う、寿命に見放された者すべてを守ろうとしているのだ。タイジは密命を帯びたのがファイであった理由に納得する。

「お嬢さんが社屋を再建できるようにするまでは、わたしが支店長の任を代行します。……タイジさん」

それまでの厳しい顔をふっと緩ませて、ファイはいつものようにゆったり笑った。

「我々のお嬢さんを、どうぞよろびくお願いします」

タイジ、現在七ヶ月。借金、十八年七ヶ月。もろもろ六年を返却済。残りはブレイク存続安定化の成功報酬。彼はノルマを達成して、生まれてくるのが出来るのか。

..... 1 : : : : break in the weather .
・天候の急変

タイジはそれまで、ブレイクをひとつの小国だと思っていた。支店長室と秘書室のある大理石の御殿、数百人のブレイカーたちが忙しく出入りする巨大な社屋、それを取り囲む広大なジャングル。

それが今や集合的無意識界という果てしない闇に浮かぶ、消えかけている小島であることを知らされた。ジャングルは支店長室の周囲をわずかに残すのみ。動物たちはお嬢のペットであるワニが三匹とカメレオンが二匹、他に気配はない。社屋はファイが辛うじて固定している簡素な建物に縮小され、ずらり並んでいたバスも見当たらない。代わりにブレイカーが乗っているのはママチャリである。

「白ヘル着用って、どこの田舎もんだファイの野郎」

日本支社の突然の凋落に驚き慌てていたブレイカーたちだが、ファイの冷静な指示のもとに、再び営業に出始めているようだ。救援信号を発する客たちのところへと、チャリを漕ぎ出す姿が見られた。タイジはそれを確認すると、支店長室へと引き返す。

「みんな、どうしてる？」

お嬢も茫然自失の状態から我を取り戻していた。顔色はいつもに増して白かったが、ブラウンの瞳には生気が戻ってきている。タイジが当座の危機を脱したブレイクの現状を説明すると、お嬢は黙ってひとつ、バツが悪そうにうなずいた。

ブレイクはファイがつなぎとめてる。俺はお嬢を助けなきゃ、何か声をかけてやらなきゃ　だがタイジの脳内倉庫において、慰めの言葉は在庫ガラガラだった。

「もうすぐいなくなっちゃうんだね」

必死に在庫を漁っては捨て、拾っては放りを繰り返していたタイジは、先にお嬢にしゃべられてしまう。俺の役立たず。と一瞬にして深く自己嫌悪に陥ろうとして、タイジはお嬢のさびしそうな口調に気づく。

目を上げると困ったような、はかなげな笑顔があった。お嬢がこんなにはつきりと弱々しい表情を見せたことはなく、そのせいかいつもよりずっと小柄に、そして大人びて見えた。

守ってやらなきゃ。その思いがどんどん胸腔を埋めていく。タイジは在庫を探すのも忘れて、ベッドの上をお嬢のそばへにじり寄った。傷一つない滑らかな膝も遠慮がちに寄り返してくる。お嬢は二人のわずかな隙間を、その距離を目測しようとするみたいにじっと見つめていた。

「……いなくなるってわかってたのに、何で好きになっちゃったのかな」

「え」

今、何で。いや、聞こえてたが……え？ タイジはまじまじとお嬢を覗き込む。

「ねえ、タイジ。あたし今、ちょっと困っちゃってるの。話、聞いてくれる？ ……聞いてくれるだけでいい」

うんうん、と現実感のないままタイジはうなずく。

「ちゃんと報酬も支払うから」

…… 2 …… break a seal . . . 封印を破る

ほんとのこと言うとね、始めは面白がってただけだった。好みの顔作って、はべらせて遊んじゃおうかなって。やーん、怒らないで。

だってもうあたしだけじゃ使い切れないくらいの寿命、稼いじや
つてあるんだもん。だけどブレイク辞めたつて、あたしの体はずー
つと眠ってるから行き場所がないじゃなーい？ それにこれだけの
規模の日本支店を維持できそうな人、ほかにいないし。辞める理由
もなく続けてて、ちよつと退屈してたの。

カイは素直ないい子だし、ファイは取り澄ましててイジリにくい
じゃない？ でもタイジに会った時、あーこういうひねくれ者をつ
ついて遊んだら楽しいかもつて……怒らないでつてばー。

だけど下僕にしてみたら、ぜんっぜん思い通りになんないの！
やる気はないしー、口答えするしー、触るしー、平気で心得破つて
デカーい顔してるんだもん。困った子拾っちゃったなーつて思つて
ただけど、なんか……なんか、だんだんそれが嬉しくなつてきち
やつたみたい。

あたしが触つちゃダメつて言うのはね、言動不一致な人が多すぎ
るから。可愛いね、小さいのに支店長なんて大変だねつて頭をなで
てくれる人も、心では何でこんなガキの下で働かなくちゃいけない
んだ、自分は現実だけで不幸なのにどうして無意識界でまでみじめ
なんだ、つて思つてたりするの。そんなのばかりで、イヤになつ
ちゃつた。

タイジはさ……そう思つてても、隠さなかつた。それに口ではあ
たしのことおばかにして、邪険にしてたけど。胸掴まれた時は、な
ぐさめようとしてくれてるのわかつた。あたしがひっぱたいした時も、
タイジはあたしのこと心配して叱つてくれたの伝わつてきてた。

ひっぱたいしたのなんて、何年ぶりだったかなー。前はね、人の裏
表が見えちゃうたびに、ひっぱたいたり泣いたりしちゃつてた。そ
のうち、それさえもなくなつてたの。だつてめんどくさいじゃな
ーい？ 疲れるだけだもん。

タイジひっぱたいした時、あたし怒つてるフリしてたけど、混乱し
てたのかも。だつてどうしていまさら、こんな風に誰かに振り回さ
れてるんだらうつて。で、好きなのかなーつて思つた。

カレンちゃんに発情うつされちゃった時ね、あのね……一瞬、タイジにどうにかされちゃってもいいって思っちゃった。目の前にいたのが、たまたまタイジだったからじゃなくて。タイジだから。フアイでもカイでもダメ。

だけど、タイジはいなくなっちゃう人だもん。あたしは治療法が発見されない限り、ずっと昏睡状態のまま。タイジは記憶まっさらの赤ちゃん。もう絶対会えることのない人だもん。

だから好きってこと、ずっと黙っておこうと思ってた。でもやっぱりタイジいなくなったら、つまんないよ。そんなことでウジウジしてて、ブレイク壊しちゃった。おばかな支店長だね。

：：： 3 : : : b r e a k a n u n b r o k e n h o
r s e . . . 荒馬を乗りこなす

「また会えるだろ、お嬢。俺の寿命は十八までじゃん。十八になったらまたブレイカーに採用してくれんだろ。俺はお嬢を忘れてると思うけど、殴ってでも思い出させてくれ」

お嬢も俺を好きでいてくれた タイジはのぼせつつ、早口でまくしたてた。

「居場所教えてくれれば、実際に会いに行くわ。昏睡状態だって、会うには会える」

喜んでくれるかと思ったのに、お嬢はぶんぶん激しく首を振った。

「やーだ。だって何年も自分の姿見てないもん！ほんとこんな顔じゃないと思うし、寝たきりだからガリガリだろうし、そもそも十六も年上……ちょっとお、何で考え直すみたいな顔してんのー！」

そうかやっぱり外見は偽ってんのか、と目をすがめたタイジは枕で殴られる。

「それに、タイジを再雇用する気はないもーん」

「うええっ？ 花の十八歳で死ねっての？」

話が違う。食い下がるタイジに、ポイと紙片が手渡された。お嬢のサイン済み小切手だ。

「聞いてくれたから、報酬」

そんなのどうでもいい　と思いつつ、寿命貧乏の習性でしつかり額面を確認してしまうタイジ。何度も見て見間違いでないことがわかると、激しくのけぞった。

「寿命……きゅ、九十年っ？」

「長生きしすぎ？」

声が裏返るタイジと逆に、お嬢はケロリとしている。

「長生きとかつて問題じゃねーだろ、いらんわ！ 寿命稼ぐ必要がなくなったら、ここに帰ってこれなくなるだろうが！」

「戻ってこないで」

氷水を浴びせられても、ここまで硬直できない　タイジはたっ

ぷり時間をかけて固まってから、そう思った。

「……はいつ？」

「タイジ、向いてないもん。下僕もブレイカーも。そんなのと無縁の生活でいいじゃない」

拒まれてる。会いに戻ってくる、会いに行くって言ってるのに、拒否されてる。タイジは胸に冰山を抱えている気分になった。

「何だよ。俺は会いたい。お嬢だってほんとは……」

「わざわざ手放してるんじゃないから。タイジには寿命の心配なんてしないで、普通の生活して欲しい。非凡な生活は生まれる前だけで十分だって、タイジも言ってたでしょー」

そんなことも言った。タイジは走り書きされた「九十年」に視線を落とす。

確かに常識で考えればどうかしてる。十八歳のある日突然に夢で

呼び出されて、君の寿命は尽きかけていると言われる。記憶に残ってもない十六歳年上の女性に、会う約束をしたと言われる。俺はそれを信じるだろうか。もし信じたとして、もう一度好きになるだろうか。

俺は守る確証のない、すごく残酷な約束をしようとしてるんじゃないか。気を持たせるだけ持たせて、十八年後にそんなの知るかとおっさり破棄するかもしれない約束を。

そうしてお嬢を傷つけるくらいなら、九十年の寿命を受け取ってここで全部終わりにしてやるほうがいいのかもしれない。果たされないであろう約束より、いい思い出にしてやるほうが。それでお嬢が割り切って心の安定を取り戻し、ブレイクを元通りに再建できるなら。お嬢がそこで今まで通りに暮らしていけるなら。

お嬢はそれを望んでいるのか。だとすれば、お嬢に対するブレイカー業務は、小切手を受け取れば完了する。答えを与えるのではなく、踏ん切りをつけさせてやるのがブレイカー業務だからだ。成功報酬として俺はファイからの十二年、お嬢からの九十年でどれくらい長生きすることができる。ブレイクで寿命の心配しながら働く日は、二度と来ない。

考えを保留する時間はない。いつ目覚めて、生まれて、すべてを忘れてしまつかわからないのだ。このうまい条件付の妥協案を受け入れるなら今しかない。今しか。

「ブレイカー業務が何だっつてんだ、くそったれ！」

タイジは盛大に小切手を破った。それでも気分はおさまらず、これでもか、これでもかと細かくちぎる。さらに床に投げ捨て、足先で踏みにじった。

「ちよつとお、タイジ……」

「もう我慢なんかすんな！ 似合わねんだよ！」

憤慨して制止しようとしたお嬢に、タイジは腕を回す。驚いてい

る頬にキスを浴びせる。

「失敗してやる。ファイの依頼もお嬢の依頼も踏み倒してやるわ。そうすりゃ俺は五歳までしか生きられない。俺が可愛けりゃ五歳で迎えに来やがれ、このアホ！」

「なあにそれ、すつごく可愛くないー！」

真つ赤になつてじたばたするお嬢。だが本当に嫌ならば、雷を落とすはずだ。タイジはお嬢を組み敷く。

「おばかつ、ふつきれなくなるでしょー！」

「ふつきるなつつつてんだ、ボケ！」

「アホとかボケとか、うるさいのー！」

しょうがねえだろ。こんなアホ、好きにならずにいられなくなるこんなアホ、他にいてたまるか。頼んだぞ五歳の俺、こいつをしつかり好きになれよ。タイジは脳の一番奥に言い聞かせる。

「むー……なんか、好きなのがおばかにしてるのか、ひねくれた感じがするんだけどー」

おっと、抱きしめてるんだから伝わってるわな　タイジはにやりとする。

「好きだ、お嬢。アンタもそうなら迎えに来い。相手はたかが五歳だぞ、お嬢ならお手のもんだろ。俺に惚れさせてみやがれつてんだ。夢でデートつてもオツじゃん、それまでにラブホでも建てとけ。

アンタの好きな、ピンクとハートだらけのとびつきり悪趣味なやつ「信じらんない！　ひどーい、ロマンチックのかけらもないー……」

「俺たちに最初からそんなもんあったか？　轢いたのは誰だ、踏んだのは誰だ、下僕にしたのはこのアホだ」

お嬢は涙ぐんでいる。こぼれてしまふ前に、タイジは目尻にキスをした。

「五歳のいたいけな俺を見殺しにしたりしないよな？」

タイジの切れ長の瞳はいたずらっぽく笑ってみせる。続いてその手は五歳児が、ましてや妊娠七ヶ月、まさに生まれようとしている

胎児が行なうはずのない動きを始めた。

「えーっ、やだやだ、ちよっと待って……」

その抗議は唇で強引にふさがれる。

「あいにく、待ってる時間なんかはないのよ。俺もっ、あらゆる意味で出ちやいそっ」

タイジは周囲のジャングルが急速に元の姿を取り戻していくのを見ていた。青々とした葉の上を水滴が転がり落ち、色鮮やかな蝶が舞い始めるのを見ていた。おそらくブレイクの社屋も再建されているだろう。寿命に見放された者たちの、そしてお嬢のオアシスにまた命が吹き込まれたのだ。

五年だけ留守にする。でもその後はお嬢と二人、ずっとこのオアシスを、不遇な者たちの箱舟を守っていくのだ。肉体の存在しない精神世界だからなんだってんだ、これぞ究極のプラトニック・ラブと、タイジは実際プラトニックとは正反対な行為をしながら悦に浸る。

五年間会えなくなるブラウンの瞳を、タイジはじっと見つめた。お嬢もタイジの頬に指を沿わせ、潤んだ瞳で見つめ返してくる。そこに、好き、とはつきり書いてあるのを読み取って、タイジは満足にほほ笑む。お嬢はもう、人懐っこい笑顔を見せるなどは言わなかった。

「……お嬢」

「なあに？」

「去勢しなくて、良かったろ？」

結局、雷は落とされた。

..... 1 break out cheering...
歓声を上げる

「まったく、何ですか。小さな子供の前でそんな」

「仕方がないだろう母さん。聞かれたんだから」

きかなきゃよかった、と少年は思った。五歳児の何気ない質問で、祖母の雰囲気が悪くなったからだ。

「この子の名前の由来が神のお告げだ、とは聞いてましたけど。そんないかがわしい神様だったなんて、今までおっしゃらなかったじやありませんか」

少年の祖父が語ったところによると。脳死状態だった少年の母親が帝王切開で彼を産んだその晩、祖父の夢枕に一人の少女が立ったのだという。年のころ十六、七。グラマーな体に制服のような濃紺の洋服を着て、茶髪にリボンを結んだ美少女だったそうだ。

少女は神様としか思えない尊大な態度で、祖父にこう命令したという。

『その子をタイジと名づけなさい。そしたら五歳でポックリ死んじゃう前に、拾いに行つてあげてもいいかなー』

「そんな不真面目な神様がいるわけないでしょう！」

「しかし五歳でポックリなんて不吉な予言をされたら、言われた通りに名づけるしかないだろう！」

不真面目な神様に不吉な予言をされ仕方なくその名を選んだことを、本人の前で声高に話すほうが問題ではないか。という点に気づきもせず、夫婦は言い争いを続けている。

「いやきつと神様だ。絶対に神様だ。白い動物を従えていた。白い動物は神の使いだと言つじやないか」

胸を張る祖父に、祖母が何の動物です、と詰め寄る。とたんに威勢を失い背を丸めながら、祖父は小さく答えた。

「わ……ワニ」

「なんつて、信憑性のない」

「だけどな、母さん！」

少年は自分の一言で、両親代わりの祖父母がけんかを始めたことに責任を感じていた。どうしよう、と思うがどう止めに入ればいいのかわからない。

こまったなーめんどうくさいなーと思案にくれているうち、ソファの隅で、少年は眠りに落ちた。

どこまでも真っ暗闇だった。まだ暗闇が怖い五歳児としては、おどおどしてあたりを見回す。すると、はるか向こうに光の点が現れた。少年の心細さを察したかのように、光はどんどんこちらにやってくる。近づくにつれ、数も色も増え始める。

あれはなんだろう。おばけじゃないといいけど 少年はまだ輪郭のはつきりしない光源に、じっと目を凝らしてみる。

「クリスマス・ツリー？」

しかし二等辺三角形ではなく、長方形をしている。

「かんばん？」

しかし野太いエンジン音が聞こえている。

「トラック？」

しかしやたらとピンクが多い。

「バ……バス？」

ようやく謎の光の正体が全貌が見えてきた。ピンクとレモンイエローとハートで埋め尽くされた、観光バス。少女趣味というよりグロテスクという形容が当たっている。

少年はえげつない装飾の車を呆然と見上げていて、そして思った。なんだかみたことがある、と。これにのったことがある。こ

れをまっつたような、でもにげだしたいような、ふしぎなきもち。
バスはぼかんとしていた少年の鼻先で急ブレーキをかけた。プシ
ユーツと空圧式のドアが開き、そこから誰かが飛び出してくる。紺
色の服。茶色い髪。ピンクのリボン。だれだろうと思う間もなく、
少年はその人に抱きしめられた。

「タイジ！」

：：： 2 : : : : b r e a k t h e i m p a s s e . . .
こう着状態を打開する

「いきなりひつぱたかなくても。ほらー、タイジさんってばすつかりムクれてますよ、お嬢様」

「だつてえ！」

バスの中で、タイジ少年は頬に氷を当てられていた。当てているのは十五歳くらいの線の細い少年で、今時それはないだろうと思われる丸眼鏡をかけている。

お嬢様と呼ばれた女性は顔立ちからすると二十歳前後だが、その幼い表情と仕草で三歳は下に見えた。

「タイジってば『なにしてるんだろうこのオバサン』って、そんな感じだったんだから！ あ、あたしが、このあたしが感極まって抱きついてあげたっていうのにいー！ おばかー！」

レースのふりふりしたハンカチで怒涛の涙を拭いながら、女性が叫んでいる。タイジはムツと頬をふくらまし、小さな指をきつぱりと女性に向けた。

「このオバサンぶった。ぶったんだよ！ パパにもぶたれたことないのに！ ぶったらブタによくにてるー！」

「お父上はタイジさんが生まれる前に亡くなってますから、ぶたれるのはそもそも不可能ですけれどね。お嬢さんは覚えてなくても、死語は覚えてるんですね。わたしはマンモスうれピーですよ、タイジさん」

タイジは声の主を見上げた。バスの天井につつかえるであろう長身を屈めた、金髪のガイジンである。ガイジン慣れしていないタイジはびくつとしたが、どういうわけか、そのガイジンは流暢な日本語を操っているようだ。

「結局南極、帝王切開だったそうですね。自然分娩より苦しい時間が減ったおかげで、わずかに前世の知識が残っているのかもしれないですね」

「なんであたしより死語を優先的に覚えてるのー？ タイジのおばかっ！ おばかーっ！」

「狐顔じゃないけど、小憎らしさが全面に出てるって点は変わらないよよねー」

まじまじ観察してくる丸眼鏡を、タイジはじーっとにらみ返す。

「どうやら彼らが自分を知っているらしい、ということには気づいていた。しかしタイジには覚えがないのだ。」

女性がハンカチの向こう側から、人形みたいなブラウンの瞳でタイジを覗き込んできた。

「殴ってでも思い出させてくれ、って言ったのはタイジなんだからねっ」

「そんなの、しらないもん」

「ふっきるな、俺が可愛けりゃ迎えに来いって言ったんだからねっ。可愛くないけど。相変わらず、ぜんっぜん可愛くないけどー！」

「なんだよーオバサン！」

「お嬢様、すっかり落ち込んで支店長室でふて寝しちゃってます」
「すったもんだの末、タイジはバスで妙なところに連れて来られて

いた。広い広い石の床に高い天井、ゆったり配置されたソファ。向こうの方にはアマゾンみたいな林が見えている。

カイと名乗った丸眼鏡にもらったジュースとお菓子で、タイジはすっかり機嫌を直していた。入り込んできていた猿たちにクッキーを投げ与えて喜んでいる。

「タイジさん。お嬢さんはまだ二十一ですよ。あなたの亡くなったお母さんよりヤングです。せめてお姉さん、と認識してあげて下さい。できれば、お嬢と呼んで差し上げましょうね」

ファイと名乗ったガイジンがにっこり笑って、タイジに話しかけてきた。その肩に立てかけられた竹定規を発見して、タイジの顔が一瞬のうちに引きつる。ファイはその様子を見逃さなかった。

「ああ、恐怖の記憶というのは意識の奥底に刷り込まれているものなんでしょうね」

のんびり言いながら、ひゅんと竹定規を唸らせる。タイジは青くなってソファの上を後ずさった。

「さあタイジさん。お嬢、と呼んでみそ」

「や……やだ」

ひたり。と、竹定規の先がタイジの喉元に押し付けられる。小さな喉がごくつと鳴った。

「三度は言いませんよ、困ったちゃん？」

「お……おじょう」

泣き出しそうになりながら、タイジは小さな声でそうしぼり出した。

「ファイさんって、笑顔でサディストですよ……」

カイがあきらめたように首を振る。その隙にもぞもぞと竹定規から逃げ出したタイジはふと、部屋の隅にいる動物に目を留めた。

「かみのおつかい」

怪訝そうにタイジの視線を追ったカイが、あー、と顔をほころばせる。

「シラ子だよ、覚えてない？ タイジさん、可愛がってたんだよ…

…オスだとわかるまでは」

かふーっとあくびをするアルビノ・アリゲーターを、幼い瞳がじ
っと見つめた。

「おじーちゃんがいってた。しろいどうぶつは、かみさまのおつか
いなんだって」

「あれはアルビノって言って、色素が……もー」

「よくご存知ですね、タイジさん。そうなんです、白い動物は神の
使いと言われているのです」

ファイの大きな手が、なぜかカイの口を覆っている。じたばたす
るカイをタイジの視界から遠ざけて、ファイはぺらぺらしゃべりだ
した。

「シラ子様はお嬢さんのペット。すなわちお嬢さんは、神の使いと
言われているシラ子様のご主人様。ということは、お嬢さんは？」

「……かみさま？」

「ファイさんってば、また誤解を植えつけるような誘導を……もー
もー」

タイジはぼかーんとしてシラ子を見下ろしている。そこへ、ファ
イが敵かに言い渡す。

「神様に逆らってはいけません。神様の心を乱してはいけません。
わたしたちは神の下僕、心得は守らなくては。わかりますね？」

さわさわさわさわ、と竹定規がタイジ少年の首筋を這う。下僕だ
の心得だの五歳児には理解できない単語が出てきたものの、タイジ
は本能に近い脅威を感じて、がくがくと頷いた。

「では、神様のご機嫌を麗しくして差し上げてください」

…… 3 …… break soon ……まもなく、夜明け

タイジはバナナの幹の裏から、こつそりとベッドの上のお嬢を窺った。

さつきはぶたれて怒っていたが、泣かせたらしいことには一応、わるいなーと感じていた。毛布をひつかぶって未だにくすくすん言っているのを聞いてしまうと、罪悪感もひとしおである。しかも相手はどうやら神様である。ご機嫌を損ねると長生きできませんよ、と何だかやけにリアルに言い聞かされたのもあって、タイジは支店長室へやってきたのだった。

「ごそそと広いベッドの上に這い上がり、タイジはぼんぼん、と毛布を叩いた。

「おじょう、ごめんね」

泣き声がやむ。ややあって毛布のふちから、泣きはらした目が覗いた。

「ファイが、タイジってなまえくれたの、おじょうだって。ほんとは？」

濡れた大きなブラウンの瞳はきよとんとした。そして、もぞもぞと毛布から出てくる。お嬢はタイジの前に、子供みたいにぺたんと座った。泣き顔のまま、へにやつと笑う。

「うん、ほんと」

「じゃ、やっぱりかみさまなんだ」

「神様？」

お嬢はひよい、とタイジの耳をつまんだ。迷わなかった。しばらくして、ぷつと吹き出す。

「ファイってば……」

「なまえくれたから、おれいに、げぼくになってもいいよ」

「……下僕の意味、わかんないで言ってるでしょー」

タイジはこくんと首を縦に振った。

「そついえっていわれたんだもん」

竹定規効果は絶大であった。指先越しに記憶を探って全てを知っ

たお嬢だが、そうする必要もないタイジの素直な答えにくすくすと笑い出す。

「オツケー。十八歳になったら正式にブレイカーにしてあげる。それまで、君はあたしの下僕」

「うん、いいよ」

お嬢が機嫌を直したことを察知して、タイジ少年もにこにこし始める。自分がどんな恐ろしい契約をしてしまったか、どんな扱いを受けることになるか、知らぬが仏である。

「あたしとの契約は絶対、あたしが法律だからね」

「うん、いいよ」

「そのうち、恋の奴隷にしちゃうからね」

「うん、いいよ」

全く意味もわからないままホイホイと安請け合いしてから、タイジはアツと声を上げた。

「わかった!」

「なあに、何か思い出した?」

いそいそと乗り出すお嬢に、うんうん、と少年は興奮して詰め寄り返し、元気に叫んだ。

「うめぼしのうみぞ!」

「ファイ、カイ! それ、みっちり調教しといて!」

支店長室から黒こげで蹴りだされた少年を、ファイとカイは唇に安心したような笑みを含ませながら見下ろした。

「それ、だって。やっぱりモノ扱いが似合いますよね、タイジさんは」

「3K下僕の星のもとに生まれついてますからね。これでいいのだ」
寿命に見放された者たちのオアシス、命の箱舟、悩み事相談所・ブレイク。ジャングルと少々癖のある人間に囲まれたその支店長室は、今日も賑やかなようである。

...
...
t
h
e
e
n
d
...
...

..... 1 : : : : break into a grin . . .
突然ニヤリと笑う

「君は五歳で死ぬ運命なのだ」

「えー、やだ。なんで？」

カタカタカタカタ、とピンクのピンヒールが小刻みに大理石を打っている。タイジ少年はそのヒールが自分を踏みつけるのではないかという生々しい予感、いや既視感に近いものを察知して、また一歩後ろに下がった。

ここは集合的無意識界に設立された悩み事相談所ブレイク日本支店、支店長室。ジャングルの小道を抜けると忽然と現れる大理石の床に、巨大な天蓋つきベッド。その脇で、お嬢とタイジはにらみ合っていた。

「あたしが九十年あげるって言ったのに、君が断ったんだからね」

「バツカじゃないのー」

「だから断ったのは君だつてば！」

「そんなの、しらないもん」

この何日か不毛に繰り返された会話に、タイジ少年はすっかり嫌気が差していた。死にたくなければ働けと言われても、命の期限が迫っている実感など爪の先ほどもない。しかも近付くなりタイジをひと飲みにした白いワニを散歩させる、ときた。少年にとっては、死にたくなければ死に行けと理不尽を言われているのと同じである。

ぶーと頬をふくりますタイジの向かいで、お嬢はああもっ、とふわふわ茶髪の豊かな頭を振った。

「下僕になるって約束したでしょー！」

「やっぱやめとく」

「やめらんないの。やめる権利はないのー!」

問、五歳児が不満を募らせるとどうなるか。答、走って逃げ出す。タイジはくるりと背を向けると、秘書室のドアめがけてダッシュをかけた。

「もうやだ、かえるーっ!」

「タイジのわからずやーっ!」

と逃げ出してみたはいいものの、タイジ少年は家に帰る方法を知らなかった。この数日、気が付くところへ来ていて、気が付くと家の布団にいるのだ。どうにか家に帰ろうと周囲にいる人間に「みどりようちえん、どっちですか」「くりっこうえん、しってる?」などと聞いてみても、いつも「ここにはないんだよ」と諭されるばかりである。

仕方なく秘書室でブラブラする羽目になる。しかし話し声と足音が近付くのを耳にして、タイジは急いでカウチの下に潜り込んだ。そう、理由は不明だが、なぜかタイジ少年に底なしの恐怖を抱かせる竹定規。その使い手である外人が、丸眼鏡少年を伴ってやって来たのだ。

「もうすぐエリトさんがいらっしやる時間ですね」

「えー、監査役室の威張った人? ボク、あの人苦手です。何の用なんですかー」

「もちろん、タイジさんの件ですよ」

自分の名前が出て、幼い潜伏者はピクリとする。

「このままじゃまずいですよね。働く気になる前にタイジさんの寿命が来てしまったら、シヤレになりませんよー」

かと言って安易にタイジさんに寿命を与えたら、ブレイカーの反感を買ってしまう。貸し付けても、寿命が残り少ないとわかっていないタイジさんは働かない。これまた社内に言い訳がきかない。し

かし働く気になるのを待っていたら、寿命が来てしまつかもしれない。と話がふりだしに戻るのを、タイジは床に這いつくばりつつ聞いていた。

「お嬢さんもすっかり不安定です。社員の間ではノーモア・ママチヤリ、と銘打った署名運動が起きているとか。もしまたブレイクが消失したら、今度はラツタツタにしましょう」

「不評だったのは自転車じゃなくて、交通安全ってでっかく書かれた白ヘルですよな？」

カウチの下で身を縮めるタイジの目の前で、磨かれた革靴が歩みを止めた。

「前はタイジさんが一応働いていましたから、無茶な下僕契約でもまだお目こぼししてもらえました。けれど今回は分が悪いようです。この採用は規定違反だ、責任を取って支店長を辞めるとか、エリトさんはハツスルして下さるでしょう」

「うえー」

五歳児タイジには、ファイの発言を完全には理解できなかった。

それでも話の流れとカイのいかにも嫌そうな口調から、自分が困った事態を引き起こしているらしいことはうすうす感じられた。

わるいことしてないのに、またおこられるのかな。タイジがそう考えた瞬間、すぐ近くにあった大きな革靴の爪先が、ついと驚いたようにタイジの方へ向き直った。

しまった、みつかつちゃったかな。息を詰めるタイジ。

「どうかしたんですか、ファイさん」

「いえ、何でもありません」

答える革靴の主の声は、急に楽しげになったように聞こえた。

・散々やつつける

「相変わらずだな、ここは。蒸し暑い、騒がしい。この非建設的な環境は、社員の士気に悪影響を及ぼすんじゃないのかね」

お嬢様は仮眠してらっしゃいます。というカイの言葉を聞いた途端に、エリトの嫌味が始まった。もっとも、「追い返しちやいなさい、M型ハゲがシラ子にうつる！」などと秘書室中に響き渡る大声で居留守を使われれば、嫌味の一つも言いたくなるというものだ。オールバックのエリトがそのMの山すそをピクピク震わせているのを、タイジはそつと覗き見た。

「お言葉ですがエリトさん、日本支社の成績は世界中でも指折りのふんぬっ」

不服を申し立てようとしたカイの爪先に、竹定規が沈んだ。目と鼻の先でそれを目撃してしまったタイジは、その痛みを実体験したことがあるような激しい同情を覚える。

「いえいえ、おっしゃる通りです。ええ本当にチョベリバナ労働環境でまいっちんぐ。やる気ナツシング。わたしはもう、モーレッツにデューダしたくて仕方ないのです」

あれ、とタイジは意外な展開にばちくりした。竹定規で神様、すなわちお嬢への忠誠を誓わせたファイが、お嬢を裏切るようなことを口に出しているのだ。

「ほう、君はやつと自分の愚かさを自覚したようだな。秘書室長に愛想を尽かされるとは、いやはや、日本支店長も落ちたものだ」

エリトも驚いたようだったが、味方登場が嬉しいらしい。ソファにどっかと腰を据え、得意気に高く脚を組んでいる。

「お聞き及びでしょうがお嬢さんは以前にモーシオンをかけていた、タイジというとっちゃん坊やを再雇用なさいました。下僕の意味も知らない彼を、口約束で拘束しています。彼には就労の意志など、抜け落ちた髪の毛一本ほどもありません。おつと失礼、これっぼつち

もありません」

髪、というところで、エリトの眉がピクリと反応している。その不機嫌指数が急上昇していくのは、少年タイジにもありありとうかがえた。

「日本支店長としての責任を監査役会にかけねばなるまい。非生産的な熱帯雨林。公私混同で社員の士気を乱すズサンな経営。暴言、傲慢、職務怠慢！」

拳を振り上げてエリトが熱く語っている。

「五年前に日本支店消失の失態を犯した時点で、クビにすべきだったのだ。くだらん男一人に惑わされて、大勢の社員を死なせるところだったんだからな！」

「もちのろんです。あのアベックはアバンチュールに大フィーバーで、わたしなどてんでこまいでmk5でした」

「ぬ……ぬぬ……」

カイの足先が継続してウリウリされているのを、タイジはじつと見つめていた。小さな拳がぎゅうと握られる。

「まったく非常識もはなはだしい！ 子供のお遊びで経営されては困る。君たちはよくも、あの馬鹿娘につきあえたものだ。安心したまえ、私が日本支店長になった暁には、最先端の経営理論に即した合理的手法で利益を追求」

「なんだよーハゲ！」

カウチの下から飛び出したタイジは、その勢いそのままエリトにタツクルをかました。

「このハゲハゲハゲハゲはげちゃびん！ おじょうのわるくちはゆるさない！ おじょうは、なまえくれたんだから。かみは、このよでいちばんだいじなんだっ」

「なっ、何だ君は、離れたまえっ。それに髪のことを言うのはやめんかっ」

タイジはお嬢を神様だと誤解させられている。エリトがそう知る由もない。

「ゲボクくらい、しってるもん！ おじょうをいじめるな！ なんだよー、おじょうが、お嬢がどれだけ頑張って支店長やってきたか、知りもしねえでくつちやべりやがって」

少年らしからぬ気迫で、タイジはエリトのネクタイを締め上げる。ぐええ、と鶏の断末魔のような悲鳴が上がった。

「ああ、お嬢はアホよ。それも救いようのないアホだ。けどな、それを俺以外のヤツに言われるとムカつくんだわ。軽くシメ殺したくなるね。ああでも無意識界じゃ死ぬこたねえから、安心して死んでくれ」

「ぐ……ぐううう」

エリトの顔が赤黒くむくれていく。だがじたばたと苦しげに振り回される手足は、タイジ少年を捕まえることができずに宙をかく。息苦しさと恐怖でエリトが涙目でも、頭に血が昇りきって戻ってこないタイジは容赦しなかった。

「カイ、バリカン持って来い。罪滅ぼしにつるっぱげになっちまおうよ、エリトさんよ。そしたら二度と髪のことなんぞ気にする必要ないわけよ。んー親切だな、俺」

「ぐう！ ぐぐうぐうっ」

「おいカイ、早く持って来い。違反者狩り用の鎌でもいい……」

バリカンの不着にイラついて、タイジは後ろを振り返る。そこには喉の奥まで見渡せるほどパツカリ口を開いたカイと、にこにこしているファイ。

「……ん？」

「ぐぐぐぐう……ぐ」

「……んん？」

首を傾げるタイジに、ファイがひらひらと手を振った。

「おかえりんご、瞬間湯沸かし器・タイジさん」

..... 3 break is over... 休憩はもうおしまい

「クビだっ！ おまえのような暴力不良少年は、今すぐ！ この場で！ ただちにクビだ！」

襟元にくつきりついた赤いあざをさすりながら、エリトが吠える。唾が降ってきそうな至近距離だ。神経質に上ずったかすれ声で怒鳴られて、タイジは面倒そうに耳へ小指を突っ込む。

「俺、明日にでもポックリかもしれないねーんだけど、いいの？ いたいな少年の前途を絶っちゃっても」

「どのツラ下げていたいけなんだ！」

「このツラ」

べー、と舌を出すタイジ。エリトは血走った目でギラギラとタイジを見下ろした。

「会議にかけてやる。おまえも支店長もクビにしてやる。後で泣きついても知らんぞ！」

「アハ。それって、今泣きついたら許してくれるってこと？」

がふがふ、とエリトが空気を噛むのを、タイジ少年は完全に馬鹿にした顔で見返す。

「許さん。断じて許さんっ」

フンツと鼻から息を吹き出すと、エリトは足音高く出て行った。けったくそ悪い、とぶつくさ言いながらタイジはカウチにふんぞり返った。

「あいつまだ支店長になるの、諦めてなかったのか。五年も監査役室にいる時点で昇進コースから外されてるって気づけよ、哀れだわな。カイ、塩だ塩。たっぷりまいとけ……なにヨロめいてんのよ」

「……どこから見ても五歳児の少年から出てくるスレた発言に、三半規管を攻撃されてて……」

「まあまあ」

ぼんぼん、とファイがなだめるようにカイの肩を叩く。

「もつと驚いてくれる方が残っているじゃありませんか？」

薫風のように爽やかなファイの視線を追って、カイの目は支店長室にたどり着く。カイはぱっと丸眼鏡を輝かせた。

「そうですね、タイジさんの記憶が戻ったこと、お嬢様に早速お知らせ……」

駆け出そうとしたカイだったが、その場で派手にもんどり打った。ファイの竹定規がさりげなく進路を妨害したようだ。

「こんな楽しいイベントを、みすみすおシヤカにしないで下さい」

口調こそ丁寧だが、カイを見下ろすドライアイスな碧眼からは「余計なことすんじゃねーぞ」のスムーズがあふれ出している。タイジは怯えきった同志・カイを、五歳児の非力ながら引っぱり起こしてやった。

「やっぱおまえが影の番長だわ……」

「何をおっしゃるウサギさん。感動の再会を演出してさしあげようという、涙チヨチヨ切れる親心ですのに」

「ファイ、タイジに寿命貸すことにしたから。今は無理。話がわかる年齢になったら、また迎えに……何やってんのー？」

いきなり支店長室からお嬢が出てきて、タイジはファイの長い脚に蹴り倒された。ソファの背でお嬢からは見えない場所に、足先でねじ込まれる。タイジは革靴の先でぐいぐいと顔を変形させられながら、顔と足とでこうも人格が違うやつもそういるまいと思う。

「エリトさんにはお帰り願っておきました。タイジさんの借金の手続きはお任せ下さい」

「サンクス。カイ、バス回して。だいじょぶー？ 何かフラフラしてない？ ちょっと散歩でもしてきたら」

「そう言っただ地雷原を歩かされたのを、ボクは一生忘れません……」

タイジが留守している間に、カイがお嬢の暇つぶしにされていたらしい。タイジはこのままソファに埋もれていた方が幸せなんだろうか、と悩んでみたりする。

「カイをいじめても楽しくないんですよ、タイジさん。カイは屈辱に歪んだ顔をしてくれませんかからね」

ペろん、とタイジの頬から靴底を引きはがして、ファイは涼やかに笑った。

「おい。本気なのかこれ」

「当たり前前田のクラッカーです」

お嬢とカイが仕事に出かけ、秘書室にはファイとタイジ少年ふたりきり。ファイが差し出した寿命借用書に、タイジの目が皿になる。

「貸出寿命年数、百年。利率、十日で一割って……そんなバナナ。十日ごとに借金が十年増える計算だぞ！ 過労死したって払えるか！」

「無意識界では過労死できませんので、ご安心を。ああそれからお間違いなく、単利ではありません。十日後の借金残高は百十年に。二十日後にはその百十年の一割が加算されるので、百二十年でなく百二十一年どえーす」

「余計悪いわ！」

ビシ。と鋭い音がした。額を竹定規で打ち据えられて、タイジは声もなく痛みにとたうつ。

「エリートさんは本気で、お嬢様とタイジさんをクビにしにかかってきますよ。あれでも監査役ですからね、我々は劣勢です。生き残るには、これしかありません。よくご覧下さい」

遠ざかるうとする意識を無理矢理たぐり寄せて、タイジは借用書にボケた焦点を合わせる。反応が遅れば第二弾が繰り出されるのは、たとえ意識が遠ざかっても体が覚えている。

『ブレイク日本支店長は自身の寿命残高から、タイジに寿命百年を

貸し付ける。利率は十日に一割とし、利息は全額、寿命基金に寄付するものとする。ブレイク日本支店長はタイジがこれを完済するまで、タイジのブレイク日本支店での就労を義務付ける』

「お嬢じゃなくて、ブレイク日本支店長ってしつこく書いてあるのは何だよ」

「ブレイク日本支店長との契約なので、仮にお嬢様がクビになってもこの契約は有効なんですよ。タイジさんがクビにされることはありません」

就労を義務付ける、という部分をなぞりながらファイが解説した。

「でも、お嬢のクビは危ないままじゃん」

「エリトさんは寿命を稼ぎに来ているブレイカーではなくて、雇われ管理職なんですよ。給料は歩合でなく定額制、寿命残高は十年もないでしょうね。エリトさんが支店長になってもタイジさんに百年を貸し付けるのは不可能なので、こちらは契約不履行で支店長責任を追及できます」

竹定期が自身の寿命残高から貸し付ける、という文を示した。

「エリトさんがどうにか借金で百年をかき集めて契約不履行を免れども、タイジさんから支払われる利息は一秒たりともエリトさんには渡りません。エリトさんは自分の借金とその利息の支払いに追われることになります。あのタカビーな性格ではブレイカー業務を始めても、稼げるとは思えませんね」

それから、とファイは文面の続きへ定規を滑らせる。

「タイジは、ブレイク日本支店長自身の寿命残高が三百年を越えないうちは、債権放棄を要求できない。また財産保護のため、ブレイク日本支店長側から債権放棄を提案することはない』」

「つまりエリトさんから債権放棄して契約を打ち切り、タイジさんをクビにしようとしてもできないのです。タイジさんから債権放棄を要求させるには、エリトさんは三百年を用意しなければなりません。恐らく不可能でしょう。ですがお嬢さんなら寿命富豪ですから、ダイジョーヴ」

「そうか、お嬢なら三百年の残高があるんだな」

一見ただの借入書が実は、お嬢とタイジの解雇およびエリト日本支店長就任を阻止する強力な材料になるのだ。さすがブレイクを体を張って守った男、やっぱりファイは頼りになるわ　タイジは感心して呻いた。

「さ、エリトさんが監査会議の召集などかけないうちに、サクッとサインしてちょんまげ」

「あいよっ合点承知の介！」

タイジは元気良くサインする。それを受け取り、ファイはにっこりした。非常に満足げに、にっこり　タイジの胸に不安を呼び起こすほど、にっこり。

「……エリトが支店長にならなかつたら、それはお嬢と俺との契約になるんだったな？」

借金をネタにありとあらゆるヨゴレ仕事をさせられた記憶が、タイジの脳裏に押し寄せてきた。エリト危機を脱したらすぐに契約破棄してもらわねば、俺の待遇は今まで以下　タイジはガシツとファイにすがりついた。

「お嬢の寿命残高は三百年、あるんだよな？」

「ん〜どうでしょう？」

ノオオオオオオ、という絶叫がジャングルに響き渡った。

タイジ、現在五歳。借金、百年。利息、複利で十日に一割。彼の債権放棄要求が受け入れられる日は来るのか。はたまた、完済できる日は来るのだろうか。

…… 1 …… break a law …… 犯罪的行為をする

タリツタリ〜タリ〜タリツタリツタリツ、タリツタリ〜ラリラリン。

タイジの頭蓋骨は、ピンクパンサーのテーマソングのコンサート会場と化していた。お嬢の留守に支店長室に忍び込んだタイジ少年は、バナナの幹の裏から無人を確かめる。部屋ではお嬢のペットであるピンクパンサー・カメレオン、カレンがのんびり杖を揺らしているだけである。

「許せお嬢。残高を確かめただけなんだっ。三百年あるか知りたいただけよっ」

本人に届かぬ言い訳は、罪悪感軽減の試みにすぎない。それを呪文のように呟きながら、がさごそとベッド脇のサイドボードや籐のチェストを探る。

タイジの考えはこうだ。

お嬢の寿命通帳に三百年以上あれば、タイジはすぐに債権放棄を要求できる。だがなければ、寿命借金百年を十日に一割の超暴利で返済しなければならなくなる。

タイジが寿命を稼ぐために駆けずり回る無様な姿を見ては、腹を抱えて笑っていたお嬢だ。ついさっきファイが代行して締結した借金契約の内容を知ったら、寿命残高が三百年を越えないようにやりくりしてしまうに違いない。

だから契約内容を知られる前に、契約破棄の書類に何とか言いくめるめてサインさせてしまおうという算段だ。

しかし通帳は見つからない。うーむと悩んでから、ふと思いつく。

女は下着の奥に秘密のブーツを隠すことが多いらしいではないか。タイジはウキウキとクローゼットを開けた。

「何だこりゃ、ピンクのフリフリだらけじゃねーか。パタリ かア
ンタ」

見た目がほとんど変わらぬ服を、ずらり何十着もそろえている国王。そっくりだわ。

だ〜れが殺した、と今度はパタリ 音頭を脳内で踊りながら搜索を続行するタイジ。不意に下着をかきわけていた手が、あまり表面積のない一枚を発見した。

「おい、このキワどいぱんつは何よ。殿下……じゃない、お嬢のヤツ、これはいてケツ出して寝たりしてたんじゃねえだろうな。カイはもう立派に発情期だぞ。誘ってるも同然 はっ」

タイジの背中を、冷たい汗がタリ〜ンと流れる。

まさか。まさかお嬢のヤツ、俺がいない五年間にカイで欲求不満を解消してたりしないだろうな。暇つぶしの相手だけじゃなくて、もしや夜の相手までさせてないだろうな タイジが青くなって棒立ちになっていると、がちやりとドアの開く音がした。

「救援信号がここから発信されてたんですか？」

「カイも見たでしょー。なんか、借金苦で泥棒に入った先で恋人が寝取られてるのを目撃しちゃったみたいな、不幸の匂いプンプンな信号だったじゃな〜い？」

「目が輝いてます、お嬢様」

お嬢とカイだ。話し声が近付いてくる。タイジは棒から少年に戻り、慌ててクローゼットを閉め、ベッドの下にスライディングした。「あふ。誰もいな〜い」

間一髪、至極残念そうなお嬢の声。タイジはほっとして、持っていた布で額の汗を拭いた。持っていた布で お嬢のキワどいぱんつで。

: : : : 2 : : : : b r e a k i n t o a c o l d s w
e a t . . . 冷や汗をかく

五歳児の少年が、盗んだばんつを汗で濡らし、ベッドの下に潜んでいる。

まずい、これはまずいぞ俺。お嬢に変態扱いされる。申し開きしようにも、通帳を探してたなんて口が裂けても言えない。記憶が戻ってるのがバレたら、さらにヤバい。何で黙ってたのよー、とワニ園にブラジリアンキックで蹴り落とされるのは間違いない。頼む、頼むから出てっくれ。タイジは念力が飛びそうな必死さで祈る。「お戻りでしたか、お嬢さん。少し休憩なさっては？ お茶をお持ちしますが」

「ありがとう、ファイ」

タイジの意図とは逆に、念力でファイを呼んでしまったらしい。いやきつと蚊が汗に寄るように、ファイはタイジの冷や汗をかぎつけてくるのだ。そして甘美な他人の不幸を、ブランデーグラスを揺らすような優雅さで味わうのだ。

タイジは音のない舌打ちをする。ファイは近くにいる人間の思考を聞くことが出来る。カウチの下に潜んでいたのを、その力で見抜かれてしまったばかりなのだ。

逆に言えば、何も考えなければ見つからない。よし、無我の境地だ、俺。心を空にしる。何も考えるな何も考えるな何も考えるな…って、何も考えるなって考えてる時点で無の境地じゃねーよー。タイジは泣きたくなくてきた。

今だけは見逃して、許してちゃぶ台。助けてポパイ。もうしません、絶対です、命賭けます。鳥肌を震わせつつ、タイジは死語連発でお願いしてみる。

「はい。何も考えず、ゆつくりなさって下さい」

含み笑いしているのが見えるようなファイの台詞は、明らかにお嬢とカイでなく、タイジに向けられていた。

サンキューベロマツチヨ……とタイジが強制一方通行の思念を飛ばすと、ファイの足音が去っていった。

ほっと息をついたタイジだが、その時、目線上にカメレオン・カレンがいることに気づいた。大理石の床を、おぼつかない足取りでまっすぐ向かってくる。まっすぐ、体を見事な婚姻色に染めて、つまり発情しつつ　タイジの手にするピンクのぱんつを指指して。

一難去つてまた一難。

違う、違うんだカレン、これはピンクパンサーカメレオンじゃない、ピンクぱんつだ。似てるけど違う。発情するな、ぱんつに発情するのは人間だけでいいのよ。

カレンはぐりぐりよく動く目を、不信そうにタイジへと向けた。

えっ、俺？ いや俺は発情してないぞ、今は。今はな。コラ、いそいと近づくな。俺が見つかったまうだろうが　カメレオンと低俗なアイコンタクトを続けるタイジ。

目力で押し返そうとにらんでも、ふーふーしてみても、またしてもタイジの意図とは逆にスピードアップして寄ってくるカレン。もう距離がない。タイジには本気で、カレンにファイが乗り移っているのではないかと思えた。

ダメだ終わった、俺の新しい人生は痴漢と嘘つきの汚名で幕が明けるのだ　タイジが絶望しかけた時、お嬢ののんきな声がした。

「カレンちゃん、枝はこっちー」

タイジの鼻先から、お嬢の手がカレンをさらっていった。気づかれずに済んだらしい。タイジは安堵に脱力し、つついまたお嬢のぱんつで額を拭う。そこへ、今度はカイの不思議そうな声。

「お嬢様、どうしたんですか？　顔が赤いで……す」

「カイ……」

「おじよっ……」

「オオオオオッ。タイジはベッドの下でムンク「叫び」の顔になる。」

「そつだ、発情したカレンに触ると、お嬢は発情をうつされるんだ。間違いない今、ソノ気になっている。」

「二難去つてまた一難。」

「お年頃カイと二人きり。恋人の長い不在。開放的ムード満点の、南国リゾートの天蓋つきベッド。上司と部下禁断の、だからこそ魅惑的な恋の香り」

「お嬢さん、お茶が入りましたよ。カイもどうぞ」

「おおっファイ、ありが十匹。ぎりぎりセーフよ。お嬢とカイがニヤンニヤンしちまうところだったわ。タイジがベッドの下から飛び出しかけたところへ、ファイが戻ってきた。」

「あっありがとうございますう」
「妙に甲高く上ずったカイの声。スケベなこと考えたな、後でシメてやる。タイジはぎりぎり奥歯を噛む。」

「……タイジは？」

「ぼつん、とお嬢が呟いた。ベッドの下から見えるピンクのピンヒールは、爪先でぶらぶらと揺らされている。」

「姿は見えませぬ」

「絶妙に危ないことを言うファイ。」

「ぶつん」

「はうつ。興味なさげな返事を装うお嬢がいじらしくて、タイジは吐息だけでジタバタする。」

「どうしたものでしょうね。お嬢さんの涙で枕がカビたというのに」
「なにっ タイジの耳がダンボになる。」

「カビてないもーん」

「泣いたことは否定しなかったぞ。あああお嬢泣いたのか、寂しくて泣いたのか。」

「言い寄ってきたハンサムボーイをひっぱたいて、あたしは可愛くない子が好きなのってタンカ切ってましたね」

「ひっぱたいたんじゃないわ、足蹴にしたんだもん」

アホウめ、お嬢に言い寄ったりしたら、命がいくつあっても足りない……って俺もか。可愛くない子が好きなのって、さすがワニヤカメレオンを愛する変わり者……って俺か、可愛くない子って。子って何よ、そりゃ今は五歳児だけど。

いやいや大事なのは、お嬢が浮気しなかったってことだ。俺って五年もいなかったのに。五年あったら二万九百回、ホテルでご休憩できちゃうんだぞ。ウルトラマンを八十七万六千回呼べるんだぞ。

「お嬢様っ」

ガタンと椅子が大きな音を立てる。いきなりカイが思いつめたように叫んだ。

「タイジさんはもう……あぢぢぢぢぢぢーっ」

「およよ、すんまそーん、手が滑ってしまいました」

ばしゃー、と派手な音がして紅茶の雨が降っている。見かねてタイジの記憶回復を白状しようとしたカイに、ファイの強制的口封じが執行されたようだ。

「あはは、熱そうな感じ出てたー」

「熱いんです!」

笑ってるよ。楽しそうだよ。やっぱ下僕は、債務者の立場はいかん。何をさせられるかわかったもんじゃないわ。ウンウンと頷いていると、ファイのおっとり穏やかな声があった。

「いいんですよ、お嬢さん。そのハンカチは、カイの紅茶を拭くためにあるんじゃないわ」

「え」

「枕にキノコまで生えたら困りますからね」

「タイジ?」

ずりずりとほふく前進でベッドの下から這い出したタイジに、お嬢はあんぐりと口を開けた。

「えっと」

タイジはモジモジ正座してうつむく。

俺ってば、お嬢が五年も待っててくれたのに何やってんだ。借金契約で頭がいつぱいになって、こそこそ隠れたりして。二人がクビにならないためだと説明すりゃ、お嬢だってわかってくれる。エリト危機が去ったら、すぐに債権放棄してくれる。それを疑ってんだ俺。情けない　タイジは唇を噛む。

記憶が戻ってるって、ビシッと話そう。好きだ、一緒にブレイク守ろうって言おう。ファイヤカイとも協力して、エリトの魔手からこのオアシスを死守するんだ。俺たちなら出来る。

「ごめんね、魔が差しました」

「ふうん……」

お嬢がゆっくり足と腕を組む。良くない兆候だ。と思いつつ、タイジはお嬢の滑らかな腿とスカートの隙間のなまめかしい競演を盗み見たりしてみる。

「潔く自供しに出てきたのは、認めてあげてもいいかな」

ああ、大津波が来る前に潮が引くのは、こんな感じなんだろうな。タイジにはやけに静かなお嬢の口調が、地獄の門が開く音に聞こえた。

「でもよりによって、そのぱんつは許せな〜い。タイジ帰ってきたらこうと思って、お取り置きしてあるのに。他のだったら、雷一発で許してあげたかもね〜」

「えっ？」

お嬢の冷たい視線を追ってみると、終点はタイジの手の中のピンクぱんつであった。タイジはそこでようやく自供というのが記憶回復の隠蔽でなく、ぱんつ窃盗で誤解されていることに思い当たる。お嬢はタイジの記憶が戻っていることに気づいていないのだ。

レンデンレンデンレンデンレンデン、とジョーズ接近中の効果音とタイジの鼓動が同調しだす。

「これは……これは違う」

すーっと、お嬢の目が半分の細さになった。おもむろに立ち上がって、雷雲を呼ぶ人差し指を立てる。その姿はまさに、天上天下唯我独尊。無意識界の神様が判決を言い渡した。

「ギルティ」

「ほんとに違う……」

「あなたっ。タイジが白目剥いてますよっ」

「なにっ、引きつけか？ 寝ていて気絶するなんて」

「ここ数日、おかしな夢ばかり見るらしいんですよ。ジャングルの神様の奴隷にされたとか。幼稚園でいじめられてるのかしら」

叩き起こされたタイジ少年はその夜、なぜか眠ることを断固拒否したという。

タイジ、現在五歳。借金、百年。利息、複利で十日に一割。彼の債権放棄要求が受け入れられる日は来るのか。はたまた、完済できる日は来るのだろうか。

…… 1 …… Break it up, will you?
う? . . . それくらいにしたら?

タイジは愛しい肩に腕を回して囁いた。

「俺たちの未来と希望は、あの太陽より輝いてる」

相手は醒めた、というよりむしろ無感情な目を向けてきたが、タイジは気にしない。気にしちゃいけない。ズバツと太陽を指差して、元気に叫ぶ。

「さあ、あそこへ向かって、二人で全力前進だ！」

ズルーツ、ズルーツ、ズルーツ、ズルーツ……。

「タイジさんが、またシラ子を代償にしてる」

アルビノ・アリゲーターと歩幅を合わせて地を這うタイジに、背後から哀れみに満ちたカイの声が降り注いだ。

「昇華の方が正しいのではないでしょうか? びんびんの青少年が、煩惱のエネルギーをスポーツに振り向けて充足させるのと同じ行動です。これもまた青春の蹉跎」

応えるファイは馬鹿な子ほど可愛くてしょうがないといった、微笑ましさにしむ口調である。

「あー、溜まつてるんだ。それにしたって、あの沈みかけた弱々しい太陽より輝いてるって言われても、希望が迷惑しますよねえ」

「ふふつ。微かに残ってる希望ほど、残酷なものはないんですよ」

「ボク、時々ファイさんが怖い……」

ほふく前進体形、つまりシエーの形で止まっていたタイジは、キツと二人を振り返ってにらんだ。

「おまえらに俺の気持ちかわかるか! お嬢にはエロガキ呼ばわりされるわ、ほんとのこと言うタイミングは逃すわっ」

しかもさつき、お嬢がケツ丸出しで寝てるのを目撃してしまった。体は五歳児、性欲はオトナ。頑張りたくても物理的に無理、秘密的に無理。有名アニメの某名探偵コナも、きつとこんな切ない悩みを抱えているに違いない。と、タイジは下世話な同情を試してみる。

「昇華活動はそれくらいにして、泥だらけの服を何とかしてちょ。お呼びがかかってますよ、タイジさん」

「へ？ 呼んでるって、お嬢？」

いいえ。と首を振りながらファイは、心待ちにしていたショーの幕開けを迎えたような笑顔をした。

「タイジさんとお嬢さんの下僕契約に関する監査会議です。事情聴取で我がエリトさんがお待ちぞな」

……… 2 …… break a siege …… 包囲攻撃
網を破る

議長と名乗った本社監査室長は、大手フライドチキン・チェーンの店先で微笑む好々爺そっくりの老人だった。クリスマス前になると膝まで股上があるサンタコスプレをさせられる、アレである。

タイジの実態が大人であることを知っているのは、ファイとカイのみ。他の人間にはタイジはただの、少々生意気そうな五歳児に映っている。お守りにどうぞとファイに渡されたカレンを肩に乗せたタイジに、カーネル似の老人は孫を見るような優しい顔つきをした。「おや、それは君のペットかね。名前は？」

「……カレン」

ほお、とにこにこするカーネルの隣にタイジの天敵はいた。エリトは既に勝ち誇ったように鼻の穴を広げている。飛び散る目線の火

花。もしこの部屋にガスが充満していたら、間違いなく大爆発だ。触るな危険の二人に気付かぬ様子で、さて、とカーネルがゆつたり切り出す。

「タイジ君。君は自分がどうしてこの会社にいるのか、分かっているのかね？」

来た来た　　タイジは普段は猫背気味の背筋をビシッと伸ばした。「はいっ。下僕としてお嬢様に仕え、大好きな人達のために一日でも長生きしたいからです！」

高校球児の選手宣誓もかくやといった、元気と清潔さ。ぐーたら下僕の対極ともいえる爽やかな返答に、エリトの顎がガツクンと落ちた。エセ球児はしてやったりとほくそ笑む。

タイジの狙いは、下僕を正しく認識していることを伝えた上で、働く意志を見せること。お嬢もタイジも追放されるべき存在ではないとカーネルに印象づければ、すべては丸く収まると踏んだのだ。

それに　　タイジはポケットの上から、ファイが代理締結したお嬢との寿命借金契約書を押さえる。それに、ファイの助力は有難いが、お嬢を守るのはまず俺でありたい。これぞ男の意地。

カーネルはでっぷりとした首の肉に顎を埋めて頷いた。

「では下僕とはどういうものか、知っているのかね？」

「はいっ。滅私奉公、心身ともにお嬢様に捧げ尽くす使用人です。下僕の心得その一、お嬢様には決して触れないこと。心得その二、お嬢様には決して逆らわないこと。心得その三……」

淀まずに心得を列挙する五歳児に、カーネル以下監査会議員たちは感心しきりである。一人エリトだけが呆気に取られ、続いて慌てだした。その青筋が立った額を、タイジは悠然と眺め返してやった。どうだ見たかエリト、俺の超頭脳プレイを　　タイジのにやり笑いが、エリトを刺激したらしい。

「違う！　皆さん、騙されてはいけない。このタイジは少年のフリをして中身はワニより凶悪凶暴、先日もわたしに馬乗りになって首を締め上げたのだ！　ほら、ほら、ほうらー！」

ぐいぐい、と襟をねじ開けて、エリトはまだあざの残る首筋を晒して見せた。

「この男は支店長とグルになって、わたしを排除しようとしている。そつだ、あの馬鹿娘に入れ知恵されたんだ。そつに違いない」

馬鹿娘、でタイジのこめかみがピクリと痙攣する。それを見つけたか、エリトの表情に余裕が舞い戻った。立ち上がり、冷笑しながら演説をぶち始める。

「そつです　この少年もまた被害者。無知をいいことにこうして自分の都合の良いように教育し、我々を欺こうとする、その首謀者はまさしくあの浅はかで狡猾な日本支店長。子供を使えば我々の目をごまかせると思つたのでしよう、そつはいきません」

ざわりと議員達がどよめきだす。監査役であるエリトに居留守を使って追いつ返す、法外な寿命を要求するなど、お嬢の素行が宜しくないのも事実だ。エリトの言葉を信じる者がいてもおかしくない。

今度はタイジが焦る番だった。ぐるぐる見回し、議員達がエリトの意見にも一理あると口々に唱えるのを聞いて肝が冷え出す。

「広告というものが、子供と動物を出しておけば好印象だというのは常識です。この少年の証言はあてになりませんな。もつと客観的な立場の意見を聞くべきです。さあ、君は下がりましたまえ！」

高らかに命令して、エリトは胸を張った。しっしっしと手まで振られたタイジのポケットで、寿命借金契約書がカサリと音を立てる。これを出すべきか。これだけの借金を背負つても、おまえに支店長を乗っ取る気概があるつてののか　タイジは奥歯を噛み締めた。

「……頼むっ！」

タイジは床に手をついた。それから額をすりつけた。土下座してカーネルに頭を下げた。

「お嬢を支店長でいさせてやってくれ。お嬢は人の下でうまくやれ

るタイプじゃない。だってまだ小つさな時に病気で倒れて、社会のことなんて何も知らねんだ。お嬢はここでしか、支店長としてしか生きて来られなかったんだ。……あ」

タイジの前方で、カレンが無様にひっくり返っている。土下座の弾みに肩から転がり落ちたらしい。

落ち際に受身を取った気がするが、まさかな、目の錯覚だよなと視界の隅に映った光景を振り切るタイジ。カメレオンらしからぬ迫力で睨んでくるカレンを慌てて拾って肩に乗せなおす。カレンはガジガジとタイジの耳たぶに噛み付いてきた。

噛み付かせておいて、タイジは懇願を再開する。

「エリト、アンタに何が分かる？ 雇われ経営者で、寿命に絶望も希望も実感したことのないアンタに何が分かるよ？ 確かにお嬢のやり方は無茶苦茶だ。だがお嬢はあんなアホ面して誰より寿命の重さを知ってるし、だからこそ皆にチャンスを与えようとしてる。お嬢が支店長でなかったら、少なくとも俺は今ここに生きてないね」
間違いなく、救われることなく妊娠三ヶ月で死んでいた タイジは真つ直ぐにエリトを見据えた。

「俺を生かしてくれたのは、お嬢なんだわ。なら、そのお嬢に俺が尽くすのは当たり前じゃねえの？ アンタらには不当すぎる下僕契約に見えるだろ。だけどそう見えるのは、下僕待遇に引き換えてもいいくらい寿命が重いことを、アンタらが実感してないからだ」

俺も、うっかり忘れかけてたけどな タイジが呟くと、会議室はしんと静まり返った。

エリトとの間にはちばちと散っていた火花は、もうない。あ、う、と声にならない声を絞りながら、エリトは答に詰まっている。

「あの支店長室を追い出されたら、お嬢はどこでケツ出して寝りゃいいんだ？ どこでワニ飼って、どこで横暴振りまいて、どこで能天気生きりゃいいんだ？ お嬢の場所が守れるんなら、俺は下僕でいる。アンタらに待遇を心配される必要はない」

「タイジ君、君は一体……？ 随分と、年齢にそぐわない発言をし

ているようだが……」

「ぱちくりするカーネル。」

「俺の中身は、無知で入れ知恵された五歳児なんかじゃない。俺は俺の意志で下僕を選ぶ。今までだってそうだったし、これからだって変わらない」

もう一度ずりつと床に掌を押し付けて、タイジはうなだれた。

「お嬢は権利欲や我侭で支店長してるんじゃない。生きてるだけなんだ。唯一生きられる場所で、ただ必死に生きてるだけなんだ。その場所を取り上げないでくれ……お願いします」

「どうだね、エリト君。もう、日本支店長の交替を主張するつもりはないのかな」

カーネルがおつとりと、諭すような口調でエリトに問う。

「い、いえ……そうは言っても……そうは言っても、ですね……」

もう勝敗はついていて、和やかに書類を片付け始めた議員達に狼狽の視線を走らせながら、エリトは口ごもっている。

「合理的な利益追求という君の理想は、その程度のものだったのかな。これだけの騒ぎにしておいて、気が変わりましたで済みますかね」

「いえ、それは……」

タイジは、エリトが事態の責任を負わされようとしていることに気付いた。ざまあ味噌漬け　とファイ風に言いたいところだが、必死にMの生え際をpushさえながら言い繕おうとしているエリトを見ると、タイジにも哀れみの情が湧いてくる。

ひよつとしたら、エリトもエリトなりにブレイクの将来を考えての行動だったのかもしれないに　そう気付いてもどうかばつてやればいいのか、タイジには思いつけない。

エリトとタイジが揃って窮していたその時、背後から規則正しい革靴の音が近付いてきた。

「失礼します、議長」

「おお、ファイ君か。先日は世話になったな」

おいおい監査会議の議長と知り合いか、ファイの野郎。知り合いどころか、世話になったとまで言われてるぞ。アンタほんとに油断ならない男だわ　颯爽と現れた白金髪碧眼を、タイジは呆れて眺めた。

「大変申し上げにくいのですが、エリト氏には日本支店長就任は諦めて頂かなくてはなりません。これを」

そう言つてファイが差し出したのは、タイジのポケットから引き抜いた寿命借金契約書。カーネルは太い指でそれを広げて、ふむふむと覗き込んだ。

「うーむ……エリト君、さすがの君でも百年の持ち合わせはあるまいな？」

「ひゃっ……百年？　とんでもない……」

目を剥くエリトに、ファイは憂い満面で首を振る。

「この契約書がある限り、エリト氏が日本支店長になるには個人的に百年の負債を負わなければなりません。日本支社のために、そんな十字架を負わすわけにはいきません……そうではありませんか、議長？」

「うむ」

首に埋もれかけた顎を撫でるカーネル。エリトは息を呑んで立ち尽くしている。タイジもガジガジと耳を噛み続けているカレンをイヤリングのようにぶらさげたまま、ぽかんとファイを見上げていた。「君も不本意だろうが、エリト君　ここは涙を飲んでくれまいか。この契約では、仕方あるまい」

ほん、とカーネルの太い腕に背を叩かれて、エリトは咳き込んだ。「さ、会議はお開きだ。美味いと噂の、日本支店の食堂にでも繰り出そうではないか、諸君」

朗らかに、カーネルは監査会議の終了を告げた。それはまたお嬢の支店長責任を問わないということであり、タイジの下僕契約承認

の宣言でもあった。

..... 3 b r e a k t h r o u g h d e a l . . .
現状打開の取引

「……ファイ、その借金契約つてまさか最初から、引っ込みがつかなくなつたエリトの体面を守つてやるつもりで……？」

議員達が引き揚げ、ファイとタイジとカレンだけになった会議室。土下座の名残で膝立ちのままだったタイジは、ファイに助け起こされる。

ファイはきらりと星の飛びそうなウインクを寄越した。

「言ったではありませんか、タイジさん。選択を突きつけられれば、わたしはタイジさんよりお嬢さんを。お嬢さんよりブレイクを選ぶと。わたしが望むのは、ブレイクの円滑な運営なんですよ。」

ファイの嗜好品である哀れな不幸と無様な騒ぎ。それを巻き起こしてくれるエリトを確保しておきたいだけじゃないのか。貸しを作つて、言いなりにしたいんじゃないのか。ついそう疑つたタイジの尻に竹定規が炸裂した。

「どああっ！ 幼児虐待反対っ……」

「その姿のどこが、幼児なんですか？」

「どこつて、どこもかしこも……あら？」

見下ろすと長い指、大きな手。いつの間にかファイに近くなつた目線。流れ落ちる長髪、ボタンがろくろく留まってやしないシャツ。お嬢が与えた、懐かしの十八歳仕様のタイジ。

タイジは自分でこの姿に調整することは出来ない。それが可能なのはただ一人 お嬢。

どこかにお嬢が……？ 見回したタイジの目に入ったのは、足許で仁王立ちの 背はあまりに低いが精一杯ふんぞり返ったその姿からするに、明らかに仁王立ちのつもりらしいピンクパンサー・カメレオン、カレン。

「まさか……」

「……タイジがいじめられるんじゃないかと心配して、化けてついて来てみれば……っ！」

ぼわわん。カレンの姿は一瞬にしてお嬢になった。組んだ腕も、噛み締めた唇も、急角度の眉もぶるぶる震えている。タイジは額から一気に血が急降下していくのを感じた。記憶が戻っていることがバレたのだ。

「あつ。ど、どうもー申し遅れまして、不肖タイジ、戻って参りましたっ」

エヘッ……とタイジは笑いかけてみたが、対するお嬢は言葉もなく睨み返してくる。

「あつ。そうだ、お取り置きのパックぱんつはいて来いよ、お嬢。どうせすぐ脱がすけどな、ははは……は」

作戦変更。と色目で迫ってみても、お嬢の眉の角度が一層きつくなっただけだった。

駄目だこれは駄目だわ。もうワ二園じゃ済まされない、間違いないくもれなく怒りの感電死行き。タイジは雷対策に、急いで金属のパックルのついたベルトを外し出す。

「……なあに調子コイて脱いでんの、この嘘つきエロ下僕……」

地を這って足を凍りつかせる、低い低いお嬢の声。タイジの膝が笑い始めた。

「あつ。これは脱いでるんじゃないのよ、お嬢。か、雷避けにと思っ……っ！」

「……それで、会議室は跡形もなく焼失したんですか。タイジさん

も相変わらず馬鹿だなー」

秘書室のカウチで、カイは呆れきって肩をすくめた。その向かいで、ファイは嘆かわしそうに眉間を揉む。

「巻き添えで、寿命借金契約書が燃えてしまつて……今さら次郎ですぐ回収しておかなかつたとはこのファイ、一生の不覚です。とほほ」

「こんなに悔しがつてるファイさん、初めて見ました……」

そこへ、のしのしと大らかな足取りで、カーネルが姿を現した。

「やあやあ。日本支店のスシは噂通りのうまさだねえ。あの食堂を安定運営できるなら、やはり日本支店長はお嬢さんに任せておきたいものだ。……で、帰る前に挨拶をと思つてね、お邪魔するよ」

「あ、今はその……がっ！」

あたふたと止めに入ろうとしたカイの延髄に、竹定規の一撃がクリンヒットした。立ったまま意識の飛んだカイに気付きもせず、カーネルは支店長室に入つていった。

しばしの静寂、やがて複数の入り乱れた叫び声。

そして勢い良く転がり出してきたカーネルの頬は、タイジと同じサイズの足の裏形で真っ赤に染まっていた。肉厚の掌で頬を押さえながら、老人はファイの足許に膝でにじり寄る。

「ななななっ何だ、あの狐目の男は誰だ！ お嬢さんに長々言葉責めした拳句、激しいラブメイキングを……！」

ほう。と、ファイは眉を上げて好々爺、改め好色爺を見下ろした。「長々デバガメしてらしたようで。残念ですねえ、覗きの噂が広まつたりすればあなたの威厳はおじゃん、窓際族決定です」

腫れた頬をさすっていたカーネルはファイの涼やか過ぎる言葉に飛び上がり、その膝に抱きついた。

「ほ、本社には報告しないでくれ。そうだ、権限を強化してあげよう。日本支店長の下僕枠拡大でどうかね？」

「ノンノン。わたしを買収するおつもりとは……」

腕組みをし、憂い顔で人差し指を振るファイ。

「分かった、秘書にも寿命争奪イベント開催権を与えよう」

「まったく、情けなくて涙が出てくらあ」

「この先、日本支店長が何をしようが見逃すから！ 本社の監査役として、君の望みは何でも融通しよう！」

その瞬間に日本支店の影の番長からブレイク本社との間の総番にのし上がったファイは、高原を渡る風のように爽やかに穏やかに微笑んだ。

「取引成立です。おやおや、そんな恨みがましい視線は心外ですね。わたしはただ清く正しく美しく、ブレイクの平和と発展を」

タイジ、五歳。精神年齢は遙か上。恋人お嬢、二十一歳。不治の病で昏睡状態。それでも彼らは自我を超えた無意識の世界で結ばれている。どんな状況下であっても、人は安寧の地を見出すことができる。それを夢物語と笑うか奇跡とするか、それは、その人次第。

…… 番外編 the end ……

…… 1 …… break a leg… 頑張る

「クリスマス？ くだらねー、この万年トロピカル・ジャングルにクリスマスなんて来ないのよ」

秘書室のカウチに寝っ転がり、仰向けの胸の上に置いた器からアイスをすくい取って、タイジは怠惰な昼下がりを満喫していた。

「タイジさん、冬がなくてもクリスマスは来るんだよ……」

「分かってるわあ！ 親父だと知った瞬間、俺のサンタは死んだんだ！」

「うわー、やだなーこんな五歳児」

カイの声がぐくもっているのは、鼻をつまんでいるからだ。何しろタイジが胸の上に置いているのはドリアン・アイス、くり抜いたドリアンの巨大器入り。お嬢の気まぐれクッキングから生まれた、恐るべき嗅覚破壊能力を持つ食物兵器である。

初めこそ便器と仲良しになりながら試食させられていたタイジだが、今やすっかり病みつきになっていた。愛が勝ったのか、味蕾細胞が生存を諦めたのかは定かでない。タイジはそのひとすくいを力イに投げ付ける。

「わーエンガチョー、透明バリアーっ！ ボクそれ嫌いだ」

「嫌いでケッコココケッコー！ くらえ必殺、ドリアン・ロケット・パンチ！ ふー、ふー！」

「うう、屁のつっぱりってこんなかな……」

死語の飛び交う喧嘩をいたく満足気に眺めていたギャラリー、それはもちろん死語のゾンビマスター・ファイである。

「お嬢さんは幼い頃から入院なさってましたから、家でメリクリ！ なんて思い出しはしないでしょうねえ……」

ドリアン・アイスの器をカイの頭にかぶせようと奮闘していたタイジは、ファイの呟きにぴたりと止まる。

「見上げるほどのツリーに、お嬢さんの好きなピンクの電飾。ハートのオーナメント。雪に見立てるのは綿でなくて、たっぷり繊細なレース……なんて、喜んで頂けるでしょうね。困ったことに、肝心のツリーがありませんが」

タイジは二、三度瞬きをして、中空を仰いで、カイの上からもそもそと身を起こした。

「……俺、ちよいとジャングル散歩に行ってくるわ……」

「チエーン・ソーなら物置にありますので」

「ありがじゅう！」

ダーツ、とぐーたらから一転、タイジは弾けるように走り出した。背中を弱々しいカイの声が追いかけてくる。

「あんな大人もやだ……」

三時間後。固まりかけたゴムの樹液に足をもつれさせ、猿の引っかけ傷をこさえ、脛をお岩のように腫らしてタイジは秘書室へ倒れ込んだ。おおよ、と非常にわざとらしい驚きっぷりでファイが紅茶のカップから顔を上げる。

「バナナの木を伐採しようとしたんですか？ 猿が許すまじ」

「遅かりし由良之助。そういうことは、先に言え……」

「夾竹桃の樹液は、触るとかぶれて腫れますよ」

「アンタ期待してたくせに……まんまと近藤いさみ足しちまったわ」
ファイが救急箱を肘掛けにして待っていたのが証拠だ。それを渡されたカイが、深い深い溜息をつきながら手当てを始める。

「で、タイジさん……手ぶらで逃げ帰ってきたの？」

「うーん、松を調達しようかと思ったんだが、どうもピンと来ないのよ……」

想像力貧困なタイジは、ブレイクのある集合的無意識界で自由に

モノを作り出すことが出来ない。タイジがクリスマス・ツリー用の木を伐採してきたとして、そこに飾るものの生産はファイに頼ることになる。

「いっそモミの木もファイに作ってもらえば完璧なツリーが出来るだろうが、一切タイジの手が入らないことになる。それではタイジがお嬢に対して、一体何をしてやれたと言えるのか。」

「お嬢に対してはまず俺が、俺が、俺が　お仕え精神に火がついたタイジは、光線が出そうな勢いでファイを指差した。」

「ファイ、モノが作れるからっていい気になるなよ！　俺はお嬢のどんな殺人デザートだって食ってみせるわ！」

「タイジの指の下で、カイがぼかんと口を開けている。一方、宣戦布告されたファイは落ち着いて微笑み返してくる。」

「カイ、これを補償と言います。ある事柄でコンプレックスを持つ者が、別の事柄で優位を得て劣等感を補填しようとする行動です。素直にシャツポを脱げばいいものを……」

「ちらりと横目で一瞥されて、タイジの対抗心は燃え盛った。」

「おのれこしやくなっ……見てるファイ、バビらせてやるからなー！」

「またしてもダーツと駆け出すタイジの背中へ、またしてもカイの声が届いてきた。」

「相つ変わらず、焚き付けるのうまいですよね……」

「五年間、平和ボケさせられましたからね」

..... 2 b r e a k a n i l l u s i o n . . .

幻想を破る

カトレア、胡蝶蘭、ブーゲンビリア、カンナ、アルストロメリア、
コーラルハイビスカス、シンビジウム、睡蓮、ディプラデニア……
タイジがジャングルからもぎ取ってきた、ありとあらゆるピンクの
花々が巨大な円錐形に盛られたテーブル。それを前に、お嬢はブラ
ウンの瞳をぱちくりさせた。

「……こんなに食べれないけど？」

「エディブル・フラワーじゃない、食うな！　これはだな！」

アンタの好きなピンクだけで作った、クリスマス・フラワー・ツ
リーだ　などと怒涛のピンクより恥ずかしい台詞を、タイジが口
に出来るはずもない。

ようやくそこで思い当たれば花がドン・ガバチヨと盛ってあるだ
けであって、クリスマス・ツリーだと言われなければそうとは見え
ない。てっぺんに星飾りでもつけとけば良かったとか、そんな事を
考えてもアフター・ザ・フェスティバルである。

「こつ……これは、だな」

「これは？」

むんむんむんむん、と山盛りの花々が発する香りのせいとか、タイ
ジは頭がフラフラしてきた。言えない、言えるわけない、このまま
ドロロンしまおう　不思議そうに見上げてくるお嬢の視線を断つ
ように、タイジはひらひらと手を振った。

「食ってくれ……無意識界じゃ、何食っても死なないからな……」

「ふうん……？」

首を傾げるお嬢に背を向けて、タイジはズルズルと部屋の隅っこ
を目指した。のの字だ。のの字を書かねば。俺はファイに敗北した
のだ　コンプレックスに打ちひしがれるタイジの耳に、ファイの
えらく楽しそうな声が聞こえてきた。

「ではお召し上がり下さい、お嬢さん。ドレッシングはハーブソー
スでいかがでしょうか？」

「オッケー」

食わせる気か、ファイ。ああそれもいいさ、ドリアン・アイスを

作る女だ。

「お、お嬢様、それはクリっ……ぐはっ！」

そういやラスト・エンペラーの映画じゃ、廃人女が悲嘆にくれて花食ってたな。

「さあさ、ボナペティート」

俺も後で食ってみるか、ドリアン・アイスに添えて。何か常人には見れないモン見れちゃいそうな気がするわ 遠い目をするタイジの背後では、皿とフォークがぶつかるカチャカチャという音がしている。

「いったただつきまー……」

「 待てえええいつ！」

ブンツと振り返ると、タイジは歌舞伎の決めポーズのように手を突き出す。

「そいつはクリスマス・ツリーだ、食うな！ 飾れ！ 祝え！ あつちの世界じゃ出来なかつたことを、俺が全部」

フォークに刺した花卉をまさに口に入れようとしていたお嬢は、そのままの格好で固まった。瞳だけがくりつと動き、タイジの視線と向かい合つ。

部屋の隅からぶつ飛んできたタイジは、その勢いで口も滑らせた。ピキピキと顎が音を立てたが、タイジはごきゅつと唾を飲んで覚悟を決め、息を吐きながら呟く。

「俺が全部……してやる、から」

お嬢の手から滑り落ちたフォークが鳴らした、ちゃりんと高い響きは鈴の音に似ていた。

Jingle , bells ! Jingle , bells !
Jingle all the way !

Oh , what fun it is to ride , I
n a One horse open sleigh !

鈴を鳴らせ、鈴を鳴らせ、はるかずっと遠くまで！
そりに乗るのは楽しいな！

「生きるのって、そり遊びに似てない？ 上がったり下がったり、ひっくり返ったり。でもそれが楽しいのー。寒いほど、一緒にそりに乗ってくれてる人のあつたかさも分かるし」

秘書室から聞こえてくるカイの陽気な歌に耳を傾け、お嬢が微笑んでいる。支店長室のベッドで上がったたり下がったりひっくり返ったりしていたタイジは、まだ火照っているお嬢の白い肩を抱き寄せた。

「そうだな」

出会った頃は支店長を演じようと虚勢を張っていたお嬢だったが、素直に語るようになった。瞳に穏やかな光を宿すお嬢の頭を、タイジはよしよしと撫でてやる。

「ねー、でも」

顎先に指を当ててお嬢が首を傾げると、ふわふわの茶色の髪がシートに流れ落ちた。

「これってサンタさんの歌じゃない？ One horse open sleigh …… って、そりを引くのは馬じゃなくてトナカイでしょー？」

「……夢を壊すようで悪いが、お嬢。ありやただ、そりに乗るのは楽しいな」と歌ってる曲で、サンタとは関係アチャコよ」

「えーっ！ ショックー、クリスマスの歌だって信じてたのにい！

やーん、タイジの意地悪ーっ！」

「いて、いててっ締めるな、千切れる！」

Jingle, bells! Jingle, bells!

Jingle all the way!

Oh, what fun it is to ride, I

...
Xmas in Break the end ...

n a One horse open sleigh ...

”Jingle Bells, or The One Horse
Open Sleigh”より一部歌詞を引用。作詞はJam
es Lord Pierpont氏(1822 - 1893、
米)。(アメリカでの著作権保護期間は基本的に没後50年まで。
この歌詞の場合は延長申請があつたので+20年の70年。没後7
0年以上が経過して著作権保護期間は終了しています)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2945v/>

ブレイク

2011年8月8日03時25分発行